117
1
1

武藏坊弁慶物語 全

東京金泉堂梓

武藏坊辨慶物語序

明治十九年十二月二日内務ノ交付ノ

[illegible]より辨慶じまの着物を着て出さるゝなし

[illegible]中より辨慶草ゝ根づよくやさし辨慶蟹ハ一色赤くして

[illegible]まゝ左れバ化物も辨慶が勇氣をきたひ草

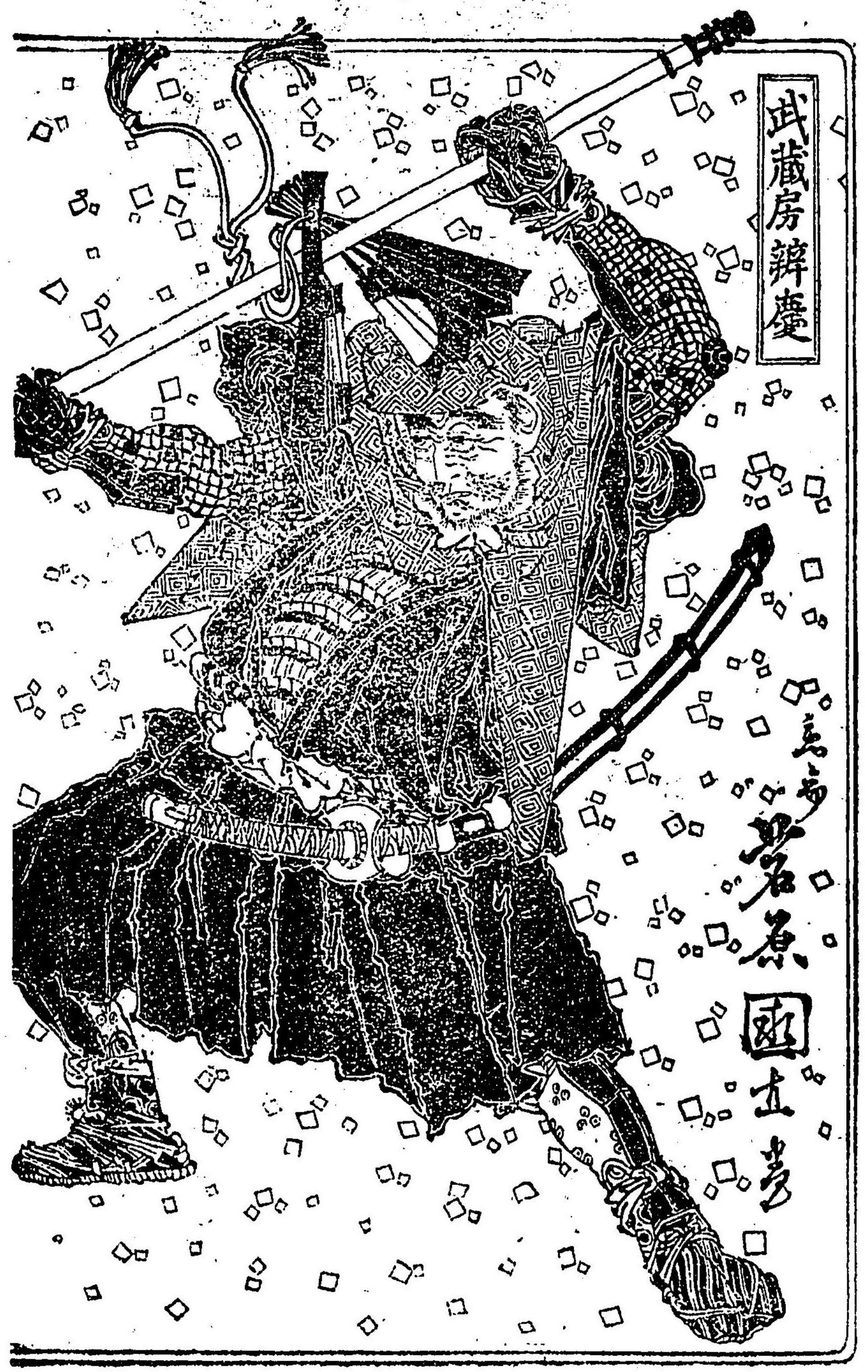
名づけ蟹も亦勇氣ありてたくましき姿ゝ

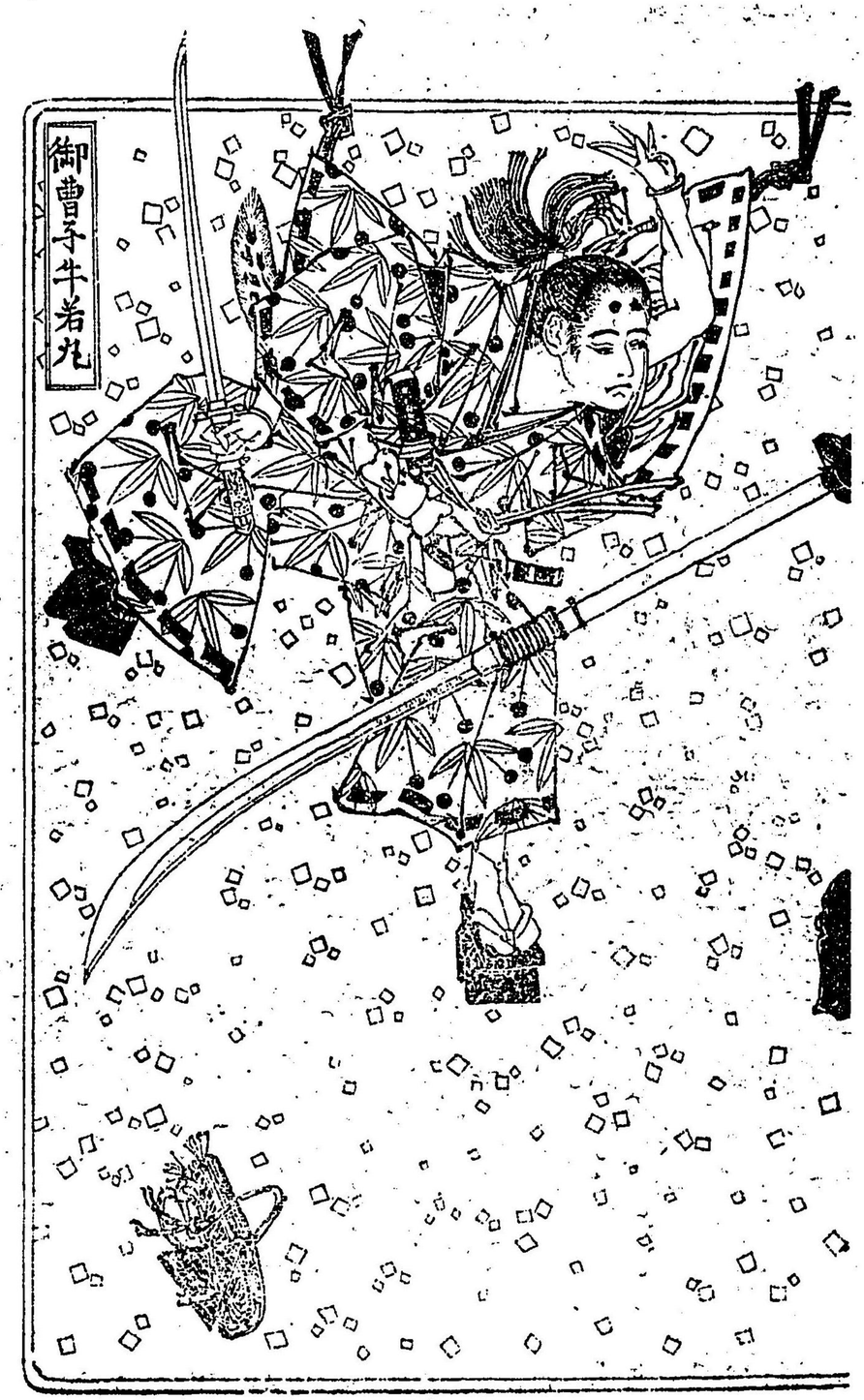
が如し其辨慶が少年より晩年ゝ至る迄の

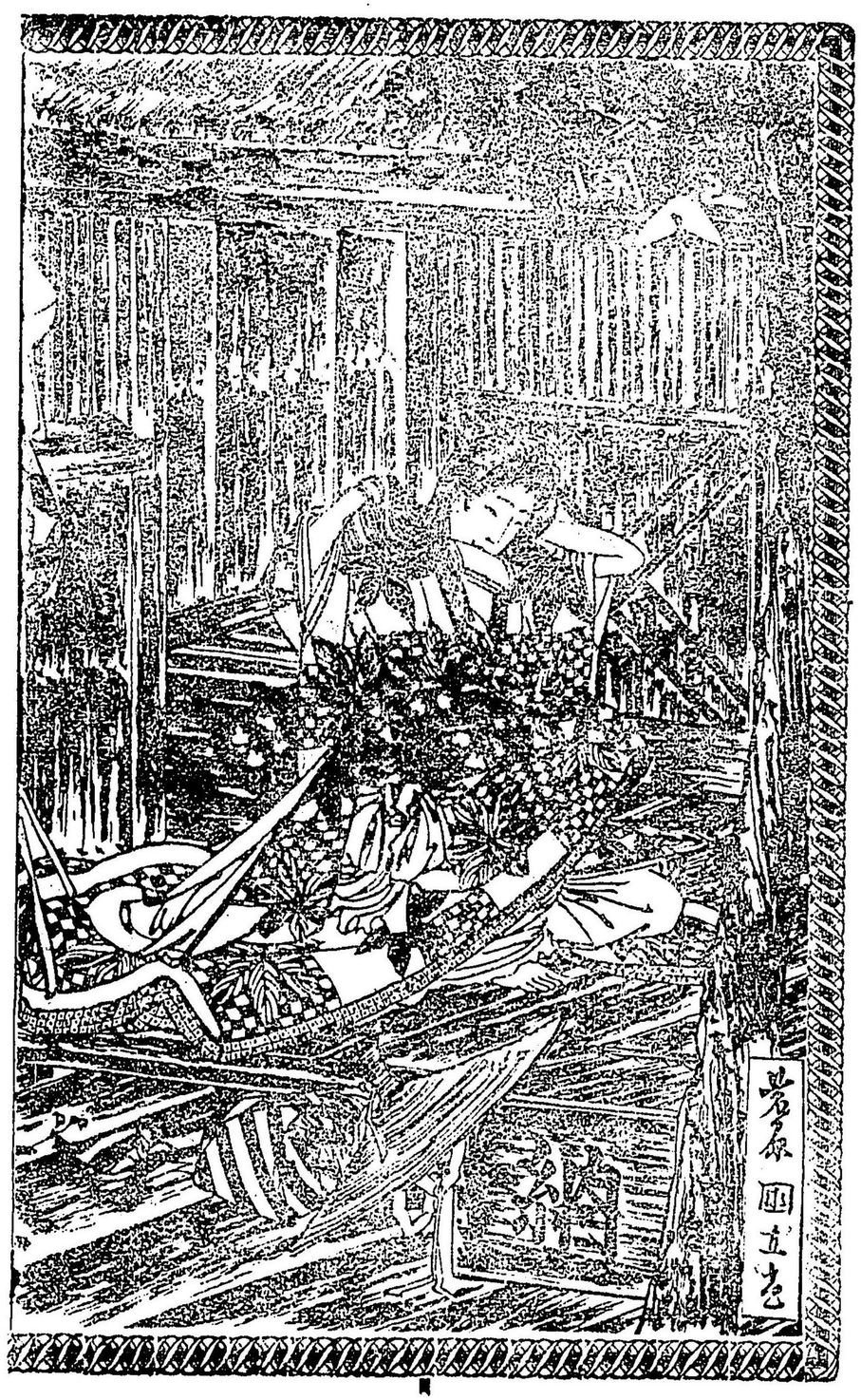
物かたりを明細ゝして洩さず一小册となしたる金龍閣の

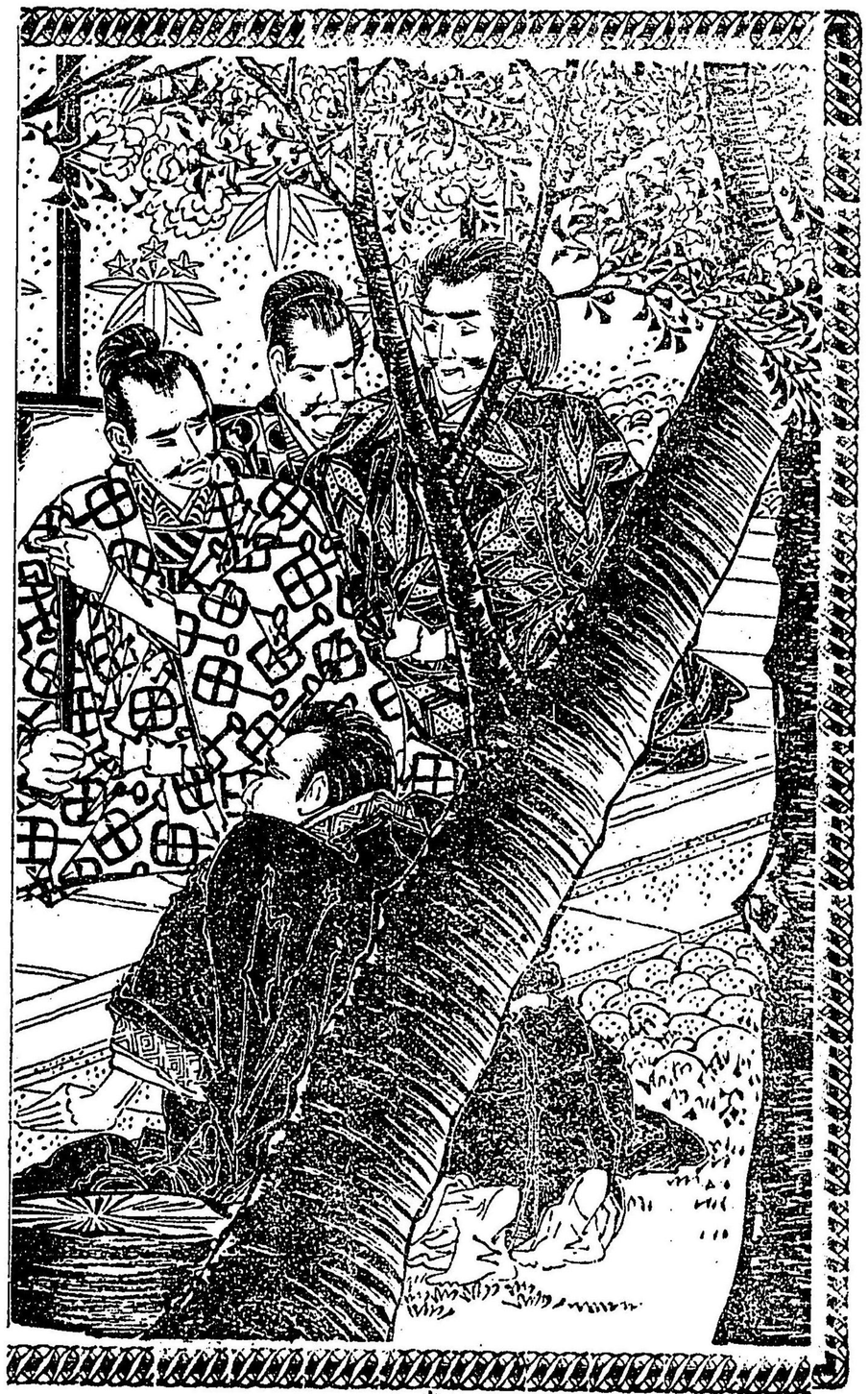
主人ゝゝの序文を乞ゝゝたるゝよつて一寸此ゝ出るす

秋琴亭緒依


武藏房辯慶


御曹子牛若丸





武藏坊辨慶物語總目錄

○第壹回
熊野山生佛丸降誕
書寫麓山井養痴兒

○第貳回
憐孤兒畊作勸登山
懲惡棍鬼若救危難

○第三回
溺美人色中餓鬼
迷子故闇外仙禽

○第四回
語往時玉苗死節
脫鈍根鬼若歸眞

○第五回
辨慶學業稍成下山
橘內因池魚災亡兒

○第六回
破落戶以詐計誘刼
富翁憐無便著留客

○第七回
水四郎病床說古
爲祐林下得雙寶

○第八回
一炷名香誤骨肉
非道白刄害三性

○第九回

欺二英雄一壯士避レ難
合二鮮血一喬梓再會

○第拾回
安達原橘次迷二路頭一
五條橋辨慶認二良將一

○第十一回
別レ袂赴二豪僧西國一
瀝レ涙仕二孝女寃家一

○第十二回
信二流言一疎二重衡愛妾一
觀二無常一入二重元佛門一

○第十三回
觀應寃虜二六波羅一

武藏坊夢闘二冥府一

○第十四回
故郷訪二辨慶師安否一
白浪松邊橘次落艸

○第十五回
垂井驛斥候松
舞子濱蒙汗酒

○第十六回
依二辨慶計一復二季春父讐一
止二灘丸一念頭二着二鯉魚一

○第十七回
武庫麓疑二孝子盜賊一
明石浦懲二英雄二兇一

○第十八回
留二勇名一辨慶擔荷堂
晒二耻辱一豪雲西塔橋

○第十九回
阿部野街道鑒二辨慶衆賊一
淺澤第宅惱二姫松鯉魚怪一

○第二十回
默龍庵諫二武藏坊主君一
浮島原至二御曹子兄陣一

武藏坊辨慶物語總目錄終

特12
13

武藏坊辨慶物語卷之壹

江戸　白頭丸柳魚編

第壹回

熊野の山に生佛丸降誕す
書寫の麓に山の井癡兒を養ふ

嘗聞西域の阿難ハ美女に因て情を動かし其色慾より却て生天の爲ヨ勉て戒を持つ亦吾國の淨藏貴所ハ兩個の孩兒を膝ヨ～たれど尙其行力おとろへず八坂の塔を禱りかへすヨ至れり手ヨ拿るからにもらぐ玉の緒とよみし志賀寺の上人眞葛が原に風騷ぐと詠ぜし吉水の和尙何れも道德微妙して後世淨屠の龜鑑となれり彼をもつて是を視れバ釋氏のうえヨもあながちヨ此道なしといふべからず故に既ヨ經にも色即是空と說煩惱則菩提と敎ゆ然れバ這惑ひより一朝武門を弃て佛門ヨ入り碩德の芳名を永く後の代にとゞめし例なきにしもあらず玆ヨ彼源の御曹司牛若丸を扶て平家の强敵を西海の波に漂せし西塔の武藏坊辨慶が發心せし緣故を尋るヨ往昔平氏未盛なりし頃紀州熊野の別當ヨ辨正といふ人有り其先祖ハ天津兒屋根の命の苗裔中の關白道隆卿と聞へし殿上人ヨおは～てそれより數世連綿たる家柄にて荆婦は二位大納言何

某卿の御娘也斯る何くらからぬ御身ながら奈何なる宿世にや齢ひ傾く迄子といふものなかりければ夫婦迭に是と憂ひ然るべき傍室と抱へて子を産せばやと其人を選み〜かど斯る片鄙にはこれぞと思ふ者もなく只夫婦が寢覺よ這綣を相譚のみ徒に兎烏を過せしが一歳弁正花洛へ登りしが其頃ハ白拍子てふものありて舞奏またハ朗詠催馬樂なんどうたひて酒宴の興をそへ貴人高位よ愛せらるゝ者多かりしそがあかよ其名を山の井と呼るゝハ播磨の國の産れにして父は源氏の被官何某といふ者の娘なりしが些の仔細有て都に來り白拍子となれるよぞありける這山の井ハ美目容艶麗のみならず志操優にやさ〜き者なりけれバ弁正ハ旅寢の寂莫よ不圖彼山の井よ馴初遂よりの身を購ひて本國紀州よ還り荆婦よも云々の由を語りて傍室とせ〜に山の井ハ一点ばかりも高慢けわひなく辨正夫婦を敬ふと大かたおらず萬最信やかよ進退ほどに夫婦が歡び比よものなく淑女を得たりと愛いつく〜〜最睦〜く暮ら〜ける有斯て又一歳ばかりを送りけれども山の井よも子いできず夫婦ハ最本意なげなる面色なるよ山の井も何とやらん影護さま〜〜醫療手を尽すといへども更よしるしハなかりける爰に其頃此紀の路なる片邊よ周雲山鰐淵寺といふ山蘭若あり本尊ハ釋迦無二世尊の金佛也其來由を尋るに何れの頃にや有けん這熊野浦よ船がゝり〜て風待船を鰐鮫といふもの魅いれて既よ船をくつがへさんとするよ至る這船の船頭何某といふ者俠氣なる漢見よて個々に打向ひていへらく所詮此巨魚の魁入れ〜うえハ助りがたし去かし吾命を捨て渠を退治して見ばやとて豫て准備の一腰を懐鼻褌にたゞさみ海へざんぶと飛入りしかバ鰐鮫ハ大なる口を開て彼船頭を啗一呑に呑ければ船中にありあふ個々這光景を視て肝魂も身よそはず怖れおのゝき今にも命拿らるゝ綣よと安心もなかり〜が稍有てさしも廣き海原只一面に朱に染て彼地獄よ有りといふなる紅蓮大紅蓮も斯やと思ふばかりなるに再び驚きこハ奈何と海の面をながむるよ彼鰐鮫ハ水の上に浮いづるを倩見れバ船頭何某ハ辛ふして魚腹を所破りて全身只朱にそみたるゆゑよて出たりければ偖ハ恙なくてありけるよと人々うちよりて介抱しけれども久しく魚腹よありける故にや竟に果敢なくなりよけり斯て尚鰐鮫の腹をさぐるに唐銅の釋迦佛出たり最あやしみながら這處に彼鰐鮫の枯骨と船頭の亡骸を埋め菩提のためにとて船人ども打集ひて一宇の堂を建立し魚腹より出〜釋迦佛を本尊とし寺号をバ周雲山鰐淵寺となづけしかば郷人等ハそのまゝにわふち寺とも呼あしけるこハ最往昔の綣よして定めて文書も有つらんが數度の兵火の爲よ烏有となりしや覺束なき說あがら啻里老の口碑よ殘れる耳にして幾千歳を經たるといふ事を知らず斯て頃日誰いふともあく這釋尊克人の願望をかなへ給ふとて遠近の老若群參して千般萬

般の願をかくるよ一ッとして叶はずといふ事あし山の井ハ風よ這縡を傳へ聞て妾許多の黄金もて身を購はれしハ全く色を愛玉ふよあらず世繼を覓めんとなるよ兒なくてハ大人のさこそ本意なく思ひ給ふらめ僥倖なる戯鰐淵寺の御佛ハ靈驗灼然なるよし聞ば妾も這御佛に禱なばなどか應驗あらざるべき然ハいへ這由を主の君よきこへあげなバ這御山よ尊き權現のましますをさしをきて來由も詳らならぬ御佛を祈ん事傍痛思されんハ必疋なり唯妾丹誠をこらして禱りもふさんにハしかじと心ひとつよ思ひさだめ俄頃に口噤ぎ鰐淵寺の方に向て遙拜し何卒聰明怜悧にして後代よ名を轟ずべき男子を授け玉へと只一心に念じその日より七日が間精進潔齋して祈りけるぞ殊勝なれ斯て七日滿ずる夜夢の裡に鰐淵寺の釋尊の御前よ額づきて念ずると覺へしよ釋尊微妙の御聲よて善哉汝吾よ子を授けよと念ずる縡切なれど辨正ハ過去よ善種を植ざれバ今生よ至りても子に緣なーさればいへ汝が切なる誠心を感ずるのあまり吾假よ汝が胎内よ舍り一たび人間界よ生れいでゝ源家の頁將を補佐し平氏の逆を討て民の塗炭を救ハんと思ふ也と宣ひて山の井が口よ飛入り玉ふかと思へバ夢はさめつ山の井ハ奇異の思ひをなして歡ぶ事限りなく辨正よも語らず意中よ秘ていたりけるが果して其月より腹のあたりふくらかに覺ゆるに扨ハ示現空しからずと愈憑もしく始て辨正よ云々と語るに辨正夫婦も大きよ歡び竊に鰐淵寺へ使をたてゝ黄金許多を布施とし又折々代參をつかはして尚母子とも恙なからん事を禱りける斯て夫婦は當る月を指折かゞへ一日三秋の思をおーて待うちに定りし月よて產れず一月とをくれ二月と遲れ遂に十八箇月よして四月八日釋尊誕生の日よあたりて急よ產の氣づきて玉の如き男子出生しけれバ兩個が歡び譬に物なく釋尊ハ御母摩耶夫人の御腹よ三歲迄やどらせ給ひ唐土の老子ハ八十年が間胎内よ在りしとかや聞昔より英雄豪傑月を越年を經て生れいでーー例最多かれ這子定めて奇兒なるべーとて其名を生佛丸と号け挿頭の花と愛いつくしみ育ける爰よわけて不思儀なるハ鰐淵寺にて本日しも釋尊誕生の日なればとて寺僧未明より起いでゝ先本堂にいゆきて御佛の厨子の扉を押開くよこれ祭何本尊ハ失給ひて影もなーー僧徒ハ大く驚き寺内のくまーー搜ーー覓むるといへども更にしれず偖ハ盜賊なんどの奪ひ去りしやと思へバ詮術なく寺僧ハ只寺の搖錢樹を奪ハれし心地ーつ急よ鑄物師よ命じて竊よ釋迦佛の像を造らしめそしらぬふりして居りけれど躁すより顯るゝハあり とやらん誰いふとなく這風説して其後ハ參る人も絶々になりーとなん後文治五年閏四月三十日辨慶奥州衣川よて陣沒せしとり又俄頃よ這蘭若の御佛二躰にならせ玉ひしかバ始めて人々辨慶ハ這釋尊の降誕し玉ひたるにてありけるよと心付しとなん星移り物變り這寺さへ跡なくなり行知人も

まれおり後世好事の人辨慶ハ雲州鰐淵山にて勸學せしといふハ這鰐淵寺を誤り傳へたるか未だ詳らかならず間話題休斯て生佛丸ハいと壯健に成長ど示現にハ似もやらず其性愚鈍にして書を讀するよ數十返にーて漸く紀得すれどもそれすら朝よ聞て夕よ忘れ論語一冊得覺へずまた手習をさすれども恰も金釘をおー曲たる如く或ハ蚯蚓のゝたくりしよも似て看官こハ上代の科斗の文字にやと捧腹て冷笑者多りける斯りければ生佛丸ハ既よ十歳よ及べ共浪花津浅香山をだにろくゝ得書ず只おふさやかなる容よて石なご印地打杯のみーて遊ぶ程よ辨正ハ是を視て方見事に思ひ示現も空憑よして這行粧よてハ我家を繼ずべき者ならずと思ふ物から鐚愛もはじめにハ似ず山の井ハ這爲体よ哀ーさやるかたなく萬般呵り懲らしなどすれど一毫ばかりも用ひず加之力あくまで强く終日山を欠めぐり猪猿を相人とし亦は余の兒童を打たゝき抔するにぞ夫婦ハ殆どもてあまし或時辨正ハ山の井を近くよねき生佛丸ハ全く鰐淵寺の釋尊の再誕あれゞ此御山の法燈ともかゞやかさんもの渠ならでハと末たのもしく思ひしに案よ違ひてその性質魯鈍なるのみかハ心さま猛く殺生を好む蹠蹊なかくもて吾家をつがせんと思ひもよらず吾も獨子の不便よハ思へど嫩のうちにわみきらずハ後一山の仇ともなるべき者なれば竊よ其許が故郷へ誘ひ行右と左もーて乎給へ御身等親子が生涯を送るほどの黄金ハ與へまひらせん喬梓の緣もこれ限りなり生佛丸斯愚なれバ如今ハ何事も辨へ知らねど成長て辨正が兒なる事を知りて再び御山へ來らば却て父祖の辱をかゝやかす業なれば渠にハ吾子ある事を努しらじ給ひぞ早疾々というがーたて一封の黄金を拿出して與ふるに山の井は愁ーさやるかたなく泣々生佛丸にも支度さし行裝そこくに調へ最懇よ夫婦に暇をつげて立出るよ生佛丸ハ愚心に出行を嬉しと思ふけはひにて衣を着替先よ立ていで行後影を見送りて辨正も漫涙よ咳びけるぞ理せめて哀れなり扨も山の井ハ吾故里なる播州書寫山の麓よ還りけるがはや此程ハ父も母も世を去り母方の叔父八瀬畑畊作といふ水呑農夫あり幽けき暮らーあから最信やかなるものなりければ云々の由を告て邊り近き處よ小家のありけるを購得て茲よ移住昨昔よは似ずいとわびしくぞくらしける生佛ハ斯る羽生の住居を懶と思ふけわいもなく猶山野を駈めぐり惡足掻よ春の日の暮るを惜める風情なるに母ハ涙の乾くひまもあく歎き哀しゝ早晩ながき病着となりければ畊作ハ大きよ驚き急よ醫師をまねぎて醫療をこひ日毎よ來りて看病等閑あらずといへども爭か心より起りし病なれば草根木皮の及ぶべき日々に重りて病且夕よせまりければ山の井ハ叔父と吾子を枕邊にまねぎいひけるやふ嚮よも聞へまひらせし如く這和兒ハ鰐淵寺の釋尊の降誕ましくたるなれば定めて聰明怜悧にして家をもおこ

父母の名をも顯さんものなぬりと思ひしよ然ハなくて斯る世の廢人となるハ奈何そやと朝暮かなーみ竟よ這病着となれり今ハはや陽炎の夕と俟よりほかなき命ぞと思ひ極めはべれば白地にきこへゆひらするなり何とぞ妄亡後ハ此子を寺へ登せ法師になりとして玉らバ些ハ罪障生滅するよすがにもなりなんかしといひつゝ豫て認や置たりけん何か書たる物を拿でゝ生佛丸が守袋の裏へ押入れやと其許愚なる心よも能聞玉へ此守ハ母が紀念と思ひて一生懸命の時に至らずバ必開き玉ふなよ言遺ーたき綜ハ澤なれど現心なる御身よいはんハ牛よ向て貴き經を說よひとーー倘父母戀しと思ひ玉ハゞ經の一卷をも讀あらいて出家堅固よとげ玉へと云了て涙雨のごとし生佛丸流石愚なる心よも哀しくや有りけん言葉なく唯默然とさしうつむきて涙ぐみたる行粧ハいふよりもなほ哀れなり畊作ハ始終鼻うちかみて山の井に打向ひあどて然心細き綜を宣ずるを都會にハ似ず片邑村落は萬端不自由にして果敢々々しき醫師ハなくともつとめて服藥し給ハゞ爭か治せずといふ事の有るべき兎に角よ病ハ氣より生ずるとかいふなるに自より養生し給へかし人間萬事塞翁が馬とやらん毛色よく聲うるハしき鳥ハ人の爲よ愛せられて籠中の苦患を得る又毛色もにぶく鳴音もうるはしからぬ鳥ハ却て己が隨意雲井に遊ぶと生佛丸が其性質の鈍きもなほ才覺あるよりハ天然を全ふするにハよかりなんよーー呉竹の節の中の人よハ萬の松原といはるゝ身でそめやすかれ都て幼稚うち餘りに賢き兒ハ世を早ふし亦成長よしたがひて愚よ返るなどいふ事あきよーもあらず生佛丸も今歳ハはや十才なれバ今二三年も過るなら些ハ物の心も付ん這子が事に懸念せず疾く本服し給へよ速日脚も西よ傾たるよ端居して風にバし當り給ふな翌こそ又來て視舞なんやよ生佛丸よ平生とハかはれば些は又惡遊戯もやめよして母御よ心をつけ給へと最叮嚀よ言悟しやをら鍬を打かたげ遽しげに出去りぬ

第二回

孤兒を憐て畊作登山を勸む
惡漢を懲て鬼若危難を救ふ

却說山迺井は其夜さり遂よ果敢あく成ーかバ生佛丸ハ慌忙きよゝと泣聲よ近隣の人々ハ何事よやと驚きて走り來り這爲体を視て急ぎ畊作許告げけるよぞ畊作ハ遽しく山の井が家に來り見るよはや綜切たれバ詮術なく泣いる生佛丸をはげまし涙ながら隣人をかたらいて野邊の送り形のごとく營はてぬ斯て母の遺言のごとく生佛丸とば儀で畊作が檀越ある書寫山の學頭觀慶阿闍梨の許に將て行母の遺言を物語り御徒弟となし經論のはーをも辨へさせ玉はらば亡母もさこそ草葉の蔭より歡びはべるべき惡綜あらバ幾度も折檻し玉ふとも苦しからじと言置て

立返りぬ夫より阿闍梨ハ生佛丸を膝の元におきて勤學せさせ玉ふといへども生佛ハいさゝかも是等の絆をつとめず稻もすれば翠よよちのぼり溪よくだり猪猿をとらへ打殺しなどして少も法師の行狀をつとめず阿闍梨ハ此爲体を攜〳〵て屢教訓をくはへ給ふといへども生佛丸ハ唯空嘯て一点バかりも用ゐるけはひなきよ呆れはてゝぞ在しける爰に又同じ寺に信濃坊海圓といふ納所あり渠ハ些の才學ありといへども其性質奸佞よ〳〵て表よハ珠數爪操て最殊勝氣なる面持ずれど其内心ハ破戒無慙の惡僧よて鮹をバ天蓋と號け鱠をば踊子汁と呼び酒をば般若湯ととなへて吃〳〵平常扁鵲と化て遊里よ通ふ斯る白痴なれば生佛丸が艶麗ある容に惑ひ白地よ言よりけるに從來現心ある生佛丸右左の應もあく力よまかしてゐたゝかよ打懲らしければ海圓ハ太く怨怒り是よりして生佛丸がををあしさまに言あし寺を追出さんとしけれども勸慶阿闍梨ハつや〳〵承諾玉ハず渠魯鈍なりといへども畊作が憑み默止がたしといひ且此兒佛縁あり心永く教授せよと宣ふよ海圓ハ再び師の坊よ向ひ渠經を教ゆれども朗誦をつとめんともせざれば寺よ在て用なし强てとゞめ給はんとあらば薪を樵らせ水を汲せ下職の業をつとめさすべしといふよ阿闍梨もそハともかふも渠が心よまかせよかしと宣ふよそやがて海圓ハ生佛丸をまねぎよせ疫病神よて仇を報ゆる心地しつゝ云ふのよしを命ずるに生佛丸ハ是を恥るけしきもなく仰かしこみ候とて其日より山よ登りて薪を樵り已が脊より高き荷を脊負ひて返るよそ一山の人々哀れがりて渠ハ由緒ある者の子なるよしなるよ奈何其身の魯鈍あるとはいひながら木樵山賤よおなじく斯く日毎よ重荷を負ふハ佛よハあらで負荷なり負荷よ〳〵負荷若よと秀句せしよりして生佛といいふものなく只負荷若と呼なゝぬ又渠が心さまの猛く强暴なるを比して鬼若とも卓号しつ斯て鬼若ハ勤學の氣づまりあるよりハ却てこれを嬉しく思ひ日毎に薪水の事を司どりて日を送るうちに時光流水の如く春と過ぎ秋とくらして早も六歳を經て生佛丸十六才よそなりよける斯て一時寺務の事よつきて急よ叡山迄用事ありけれバ誰をか遣ハすべきと思ひたまひ〳〵が生佛丸ハ力量衆にすぐれたるがうえに速走りの達人よて一日に四十二里宛の道を行ん事ハ心易〳〵といふなればとて其旨を命じ給ふよ生佛丸ハ委細承諾して阿闍梨よりの書翰を受拿これを狀筥よおさめて首よかくるよ阿闍梨ハ又一封の金を拿出して路費よせよとて遞與玉ひ此書翰ハ等閑ならぬ急ぎの法用なれば必〳〵も疎忽よするとなかれ返翰を請取らば少もはやく立還るべしと宣ふよそ生佛丸ハ仰かしこみはべるとて旅の粧ひそこ〳〵よ〳〵て都をさして發足〳〵ぬ斯て道を急ぎ叡山よ至り阿闍梨の書翰を呈し返書を乞ふて是を携へ足を早めて播州へとこそ急ぎける斯て生佛丸ハゆき〳〵て福井村といふ所の村稍尽所

まできたりけるが頃ハ正ヨ文月下旬にして殘暑蒸が如くなるヨゾ暫時憩て行べし最早山ハ三四里にハ過べからずよしや日の暮たりとも平日に往來途なれば夜るこそ却て涼〜けれと流る丶清水を手ヨむすびて咽をうるほしとある木の下の衢堂なる椽頰ヨ登り袱包を枕にしてとろ〳〵睡眠しが此程の勞にや前後も〜らず高鼾ヨそや日も西山ヨ沒し群鴉窩を覓る黄昏時ヨおよべども生佛ハおほ眠り覺ず右左するうちヨはやくも二更の鐘鎬々と響き渡り松吹嵐颯々寥々として獸吼る聲遠く聞へ溪水の音衝ヨひゞき最物凄き光景なれど大膽不敵の生佛丸覺るけしきハなかりける浩處に惡漢とおぼしき大漢兩個ヨて一個の若女ヒ猿轡をそませ喘々はしり來り且女を樹の下にくゝしつけ汗押拭ひつゝ最誇貌にいへらく今宵のはたらきハ吾都て十に七八なれば吾儕まづ這娘の破爪を賞翫〜て其後足下又心のまゝヨ樂むべしといふヨ一個が否ヤそれハ僻言也附添來りし漢ハ年ハよりて見へたれど一僻あるべき面魂なりしを吾儕勇をふるふて追しりぞけたれバこそ容易奪をとられたり然バ其功ハ吾にあり吾且其口切を味ひて後足下右も左もし給へかしと暫く舌戰する折柄天俄頃に結陰電閃き一聲響く雷の音ヨ生佛丸ハ始めて目覺四方を見まはすヨ都てこれ如法闇夜の事なれバ物の黑白ハわからねど折々閃く稻妻の光ヨずかしながむれバ山賊剪脛なんどの女を勾引〜來りて且これを姦淫せんとする爲

体とおぼしく傍の木の根ヨ年若き女の縛られてある蹠蹼にて猿轡ヨ口をおほはれけん聲をもたてずよゝと泣行粧ヨ愚心のそのうちよも自然と備る惻隱の生佛丸ハ大きヨ怒り憎き小盜賊等の所業かな辛目見せてくれんずとうかゞひ因て先一個の襟髮掴で投いだせバ彼大漢は慌忙起直り大きヨ怒り這奴などて吾を爰へ投出したるぞと敦圍荒く詈るうち生佛丸ハ又一個の足を拿て薙倒せバ是も同く大ヨ怒り這奴吾油斷をねらひ舁怯よも足をなぎ〜ハ吾を殺〜て汝獨快く樂しまんとするなるべしよし〳〵日頃の約束を變じさる不正進止せば吾且汝が頭を斬て其後ほ〜ひまゝヨ這女と洞房の樂を極めんと刀を拔て斬てかゝるよこあたの賊ハ奮然といかり汝吾を先ヨ投出〜おきあがら吾を殺さんといふこそ不敵なれいで吾一刀を試むべ〜とおゐじく拔て斬てかゝるといへども原來烏羽玉の闇なれば兩個ハ齊く空を切り又そばだつる足の下を拂ひなんどするうち忽閃めく稻妻の光りヨ兩個ハ顏見合せ丁々はつしと斬結ぶも電光石火の暫の中またも闇夜とある体に迭ヨ擊つ擊れつ〜て果ハ左右へ撞的伏し息絶たるぞ心地よ〜生佛丸ハ這行粧を視て今ハ心易〜とさぐりよりて彼女の且縛を解ぞけバ豈はからんや最前より心を痛めしそがうへヨ今の雷にや怖けん氣を失ひ〜とおぼしくて齒を喰ゐばり全身さへはや冷氷るありさまヨ生佛丸ハ大きヨ驚き且呼いけんと思へども名をさへ知ら

絲ば詮術なく水を口まうゝがんと四下の清水を手よむすび只幾度かそゝげども從來口を塞ぎたれバ咽へとうらんよふもなー漸く己が口にふくみ口うつしに移しいれこや喃々を呼生れば不測や息を吹返ー呌と一聲叫ぶよそ生佛丸ハ歡びて心わたしかになり給ふかと問ふよ女ハ漸々を我よかへりて生佛に向ひ何處の御方々知り侍らねど思ひもかけず斯厚き御介抱よ預ること宿世怪しき緣にしならめ妾最前惡漢等に强奪せられ爰よ誘れその恐ろしさ哀しさに肝魂も身よそはず戰慄いたりーよ一聲ひゝく鳴神よ氣をとりうしない其後ハ只何事も辨へざりーー君ハ寔に妾が爲たハ再生の恩人也怎生妾ハといはんとする折柄又も閃く電アレトいふ間も中空よ鳴雷に彼處女ハゆるさせ玉へといひかけて辻堂の扉を押開て周章ふためき逃こむに生佛丸も辻堂の椽よ置たる袱包ばらつく雨に濡らさじと抱へて齊しく裡よ入る折しも大雨頻りよして恰も盆を傾くるがごとく風はげしく鳴はためく雷の音きびーく更よ物音も聞へざりけるぞ怪しけれ稍あつて風雨やみて本のごとく晴わたりたる処よ大勢の人音して明松をふり照らし一挺の轎輿をつらせ爰へ來りーが兩個の惡漢が殺されて動めく光景を視て扨ハ此四下へ誘ハれーものならんと明松をあげくまゝくをさがし覓つゝやよ〳〵娘よ娘樣よと呼立る聲よ辻堂の扉を押ひらき玆にはべるかしと彼處女ハ帶引しめつゝ立出るよ迎に來りし漢視るより打歡びて扨ハ恙なくてありけるよ去來疾々と言つゝ手をとれば彼娘は左右の應おく嬉涙にむせびいりよゝと泣を然もこそとて脊をかひなで齎らしたる轎輿に打乘飛がごとくよ走去りける這時よ至て月山の端よ高くさし昇りて四方を照らー夜半の鐘聲遙の谺よひゞき折ーも辻堂の扉を靜にたーひらきて立出る生佛丸ハ手よ何やらんきらゝくと光る物を携へいで月影にすかして左視右視るに珊瑚に黃金白銀をまじへて工み造りおせし釵なりければ扨ハ今の處女が落し行しものなめりと推し小膝を撲的うつ程もあらせず彼惡漢よろめきながら伺ひ寄生佛丸を只一討と聲をもかけず斫つくるを心得たりと身をかはし持たる刀奪ひ拿細首宙に打落し自若とーてぞ立たりける畢竟這未通女ハ奈何ある者ぞそハ次の卷に分解を聞べし

武藏坊辨慶物語卷之壹終

第三回

美人に溺るゝ色中の餓鬼
子故に迷ふ闇夜の仙禽

爰に播州福井村といふ處の里保よ肥田圃太夫といふ者あり先祖ハ由緒ある武家なりしが今民間にくだるといへども數代當村に住て尙兩刀をはなさず鄕士の如くよして暮けるが今の圃太夫ハ頗る文學武藝をもあきらめ加之仁心深く自己が家の費をむぶき奢を薄ふし萬節儉を專とすれども亦一鄕の人の難を視てハ倉稟を開き袋を傾け是を救ふものから村の者こぞつて尊敬せずといふ事なし這圃太夫よ一個の娘あり其名を玉苗と呼り今歳三五の春をむかへて容貌玉の如く奈何なる貴人の姫君といふとも恥かしからぬ風情なれば圃太夫がいつくしゝ大かたならず幼稚より渠がために師をゑらびて糸竹の調手跡花類十種香貝合なんど何くれとなく學ばせしに渠又一を聞て十を悟るの才智有りて此程ハ斯る片邑村落よハ得がたき草紙物語なんど迄通曉め和歌を詠し筑紫琴をかきならし都て洛人の弄のみして深窓よあるものから一村の人々も只美麗とのみ聞て目前視たる者ハ稀なりける今歳ハ圃太夫が祖父の五十回の遠忌に當けれバ其追福を營ばやとて村中へ言觸らしめけるは吾家久〳〵く爰よ住て五十年の遠忌を吊らはんこと最めでたし因て此遭ハ絶て精進物を用ひず皆鮮き魚のみよて麁末なる非時を參らすべやう思ふあれバ本月本日夕陽方より吾茅屋よ來ませよと云送りける程よ實にや他人ハ飲食に集ふと諺の如く蠕て本日にもなりければ老たるを扶幼稚を携へ肥田が家の門前よ市をなしさゝも廣やかなる客廳よ所狹迄居並び吾勝にと食ひッゝ呟を聞バ斯舍利の如き米の飯よ菜を添へ吃さんよハ精進物にて可ならんに況て平生にハ目よのみ視る這伊勢鯛のあつものハ餘に美味し今一杯とかゆるを視兼こハ阿漕ぞと袖曳ハ漁師とおぼしく時ならざるを食はずと孔子ハ敎へ玉ひしかど七十五日生延る此初物を見のがすべきと汁をも殘さず食ふのハ村學究よやあらんずらん或ハ信やかなる志を讃め或割烹の鹽梅をたゝへ果ハたみ聲ふりたてゝ異口同音に念佛し各位箸をさしおきける這日の正賓客ハ檀那寺よりむかへたる彼信濃坊海圓あり渠ハ出家の絆なれバ別に精進の肴幾種をか調へて酒をすゝめ夕飯をまいらするよ海圓ハ從來破戒無慙の惡僧なれば精進酒ハ好ましからねど流石よ恥て左も云ハれず魚物を食て舌打するを羨しげに打視やり咽を鳴らせど詮方あく精進物よて志たゝかよ酒を呑し絆なれば早醉眼の朦朧と席よ在合ふ嚊よ娘の顏をながめて餘念なく涎の腮を傳ふるをおぼへずされど皆是田

婦野娘よして海圓が心にハ叶はず渠かこれかと見廻すうち主公圓太夫衣服を改てたちいでと
ハ皆々よくこそ來給しぞ何ハなくとも心よかあひし物あらば遠慮なくかへて澤山にとふべ給
へ信濃坊よ何をきよろ〳〵し給ふぞ村酒なれば心よいかなふまじけれど燗を直〳〵て今一
献と自銚子を拿て勸るに海圓ハ頭を左右りに打搖否々最早最前より十分に飲り實に唐人の
詞よ花下よ歸を忘るゝハ美景よより樽前よ醉を勸ハ是春風と賦せしいさる事ながら兎角に酒
ハ男同士よてハ味からず今日の法筵餓鬼のごとき農夫等よ百味の御食ともいひつべき這割烹
と賜ふ事無越善根なれとてものをよ天津乙女のごとき一個の美人伽陵頻鶯の囀がごとき音聲
にて今様朗詠なんどうたはんよハ是よましたる肴やあらじと贅言まじりに述るよぞ圓太夫ハ
最苦々敷面持よてよき程よ應けれど海圓ハなほこりずまよ再びいへらく貴家の令娘玉苗ぬ〳〵
とやらんハ美目容うるはしく殊に筑紫琴の妙手におりすよ〳〵恒に阿闍梨の物語よて聞り願く
ハ此筵よ侍ら〳〵て其一曲を聞んにハ歌舞の菩薩の音樂よもまして御先祖の亡魂もさこそ歡び
給ひなん法の筵よ糸竹を催さんハ最似げなくも思し給わんが古より神佛の御前よて歌舞吹彈
をなす事まゝありて神も感じ佛も納受し給ふよしおさ〳〵典籍にも侍るかし枉て一曲をゆる
し給へと信がちですゝむるに一座に列る人々もこハよき海圓御坊の思立かな斯いへば何とや
らん法筵にまねがれながら自己の慰をひふよふなれど全く左にあらず是非一曲と望ひよぞ從
來娘自慢なる圓太夫あれば强ても固辭ず奈何にも娘玉苗ハ幼稚より筑紫琴をかきならすすべ
もしれはべれど未其業拙なくて諸人に聞せまいらすべきにハあらねど左程迄よ宣ふものと固
辭も却て罪得べき業なれバ足らはぬところハ幾重にもみゆる〳〵と蒙りた〳〵といひてやをら奥
よ入りしが暫時ありて玉苗が手を拿て座よなほすに海圓はじめ諸人ハ瞳を定めてこれを見る
よ正よ是貝闕の乙女人間よ遊ぶにあらずハ天津空なる蟐蛾月宮をはあるゝかと疑ふ斗りの
美人なればさらぬだよ色好みなる海圓目をなゝめにして鼻のあたりをねぢめかして右視左視
て圓太夫よ向ひ寔に令娘の容儀なか〳〵高貴縉紳の姫君といふとも恥かしからず行末ハ定め
し貴人よ嫁し給ひて御身夫婦ハ老樂を極め給ハん事目前也と飫媚る一言よ圓太夫ハ最嬉し
げなる面色あるを玉苗ハさしうつむいて傍痛く思ひをり斯るうちよ婢女ハ筑紫琴をとふでゝ
玉苗が膝邊にさしをくを圓太夫は視て疾々と催すよ玉苗ハ詮術おく琴をひきよせ音律正〳〵く
秘曲を彈じ松風浪鼓の奥妙をあらわすよぞ心なき田舍人も只管よ耳とそバだてゝ靜かへつて
聞居たり頓て奏し終り最拙き一節を聞せまいらせさこう笑ひ給ふらめ赦させ給へといひさ〳〵
て琴をさ〳〵をくに滿座の人々阿呀と感じて暫ハなりもやまざりける最早與も是迄ぞと皆々厚

く暇を告て立歸るなかゝ海圓ハ今此美人を視て心中醉るがごとく扨も世ゝハ斯るうつくしき女もあるものかな吾奈何にもして渠と一夜の枕をかわさんゝハ死すとも絶へて恨なしと及ばぬ願をかけてゝけれど故意とさあらぬ体ゝて立かへりしが只朝夕玉苗が容眼にさへぎりて煩惱の犬れへども去らず晝夜心をなやましけるぞ淺猿けれ扨も圃太夫が娘玉苗が縹致世ゝすぐれたる絆遠近ゝ聞へけれバ多くの黄金を贈りて嫁ゝとらん婚ゝあらんなどいふ者最多かりけれど圃太夫ハたへて是をゆるさず吾娘容貌すぐれて才賢く古の紫家清女の風あるものから何卒勢猛く位高き人を婚兼として老の樂ゝ末の榮花あらまほしと彼の竹取の翁が古事ならで龍の胝の玉燕寓の子安貝なんど世ゝ稀なる寶器をもたらゝなバなど絆を左右ゝ托て固辭けるに玉苗ハ此程より何とやらん心地常ならぬ面色ゝて兎角ゝ酢物を好み胸ゝろしとて折々生唾をはく爲体ゝ父母ハ驚きこれ全く年來深窓にのみありて氣鬱せしより斯る病を引出せしものなるべゝと急ぎ醫師をまねきて見せゝむるに醫師ハ暫く玉苗が脈を診ていへらくこハ全く懷姙なり去かも左り胎ゝて男子なり早五月ばかりゝ及べりとおぼし急ぎ腹帶をゑめさすべゝといふゝ父母ハ再び大きゝ驚き倘や竊情を通ハゝ忍逢ひし男ゝてもありやと乳母をゝて萬般尋ねさするといへども絶てなゝといふ原來深窓ゝのみ在りて漫行をせざる者の然る者あるべきゝふなけれバ是ハ全く醫師の當推量の説ならんと又他の醫師を請て見せゝむるゝこれも又同しく懷胎なりといふゝ圃太夫ハ眉を顰醫師にむかひ嚮ゝ視せゝめたる醫師も懷姙のゝふゝ宣ひたれど吾娘深窓にありて漫りゝいでず又家の内掟きびしく男女一室に臥さずいかでか私情を通る絆を得んや加之娘も又孝順にゝて且貞あり幼稚より略書籍をも讀て唐の倭の烈婦賢女の行をもゑれバ父母もゆるさぬ不正行跡をするものにあらずこハ全く視立違ひなるべゝといふに醫師ハ尚頭を右左ゝ打搖り否々然にあらず今令孃の脈躰を診ふに心脈の動甚しく腎脈是を按ゝて絶せず是懷姙なる事明けし且左りの脈沈實なるを以て見れば極めて男子あるべし倩考ふるに女子廿歳を越へて男女の交をせず偏に情慾を堪忍ぶときハ其氣鬱結して夢中に男と交ると見て胎む事あり然れど實ゝ陰陽交合するにあらぬバ其全躰をなすゝいたらず月滿て血の丸かせを産むこれを血塊といふと見へたり玉苗ぬし未十五才ゝれど女ハ二七十四にして陰道通じ七七四十九ゝして陰道閉るものあるがゆへに爾る病なくとも言がたけれ又日本紀を按ずるゝ雄略の皇女伊勢の齋宮に立せ給ひしゝ邪姪の疑によりて皇女の腹中をひらかせ給ひけるゝ物あり水の如し水中ゝ石ありとなん醫書ゝ所謂石痿といふものゝして物の凝る所也斯る事もあるなれば左も右も且試ゝ血をくだす藥湯を用ひて見給へといふに實にもとて彼

醫師が液湯を用ひけれどしるしゝ更よなかりける

第四回

往時を語て玉苗節に死す
鈍根を脫して鬼若眞に歸す

斯て其歳もくれて春と過夏と暮らすうちよ玉苗ゝ腹のあたりいよ〳〵ふくらかよ見るに不審これ全く病の業なるべし氣鬱より生ぜし病あれば只保養こそ肝要なれとつねよゝ赦さゞりしが此程ゝ日毎よ邊り近き郊外或ゝ川邊なんどへ誘ひてもつぱら心を慰させぬかくて既に其年も文月十三日となりつ今日ゝ盂蘭盆とて尊き卑とおく寺へ詣て亡靈の追福を營むことなるよ圃太夫夫婦ゝよき折柄あればとて娘玉苗を將て書寫山の觀慶阿闍梨の許よ至るよ海圓ゝ斯と視るより久々よて戀人の顏を視る絆の嬉しく信だちて且客殿に誘ひ茶菓の管待いと懇に四方八方の物語する折々眼を斜よして屢々玉苗が顏を視に玉苗ゝこれを懶おぼへて疾兩親の還れかしと心裏よ思ひ顏をそむけて居りける圃太夫ゝ孫て奴僕に齎らしたる米と錢とを海圓が前にさしおきこゝいつものごとくに佛に供ずる代になして給ひねこれゝ又薄儀ながら御坊へまひらするなりと別よ錢三百銅を紙よつゝみて海圓が袂に押いるゝに海圓ゝ呵々と打笑ひなど斯貧道よ迄意を用ひ給ふぞ貧道ゝ從來出家人の事あれゝ金錢を視る事瓦礫よひとしさゝい

へ大人の賜る物を返しまひらせんゝ失禮なるに似たれゝ宿此儘に受おさめはべるべしなど獨言つ頓て齎らせし米錢を佛前よ供じぬ斯る折柄手織木綿の糊强き單衣襟かき合しつゝゆるさせ給へといひかけて庖厨のかたよりおづ〳〵といづるを海圓ゝ視るよりこゝ青田村の麥六ぬしよくこそ詣ふで給ひつる倡こゝたへと招ずれゝ麥六ゝ何やらん折敷のうえに打載て袱をかけたるを心斗りとさゝいだせば海圓ゝ拿てまづ其貫目をこゝろみ莞爾と打笑ていへらく誠よ長者の萬燈より貧の一燈とやらん御身貧き身を以て斯厚き贈物せらるゝ事阿闍梨も左こそ歡び給わめと言つゝ佛の前に供じぬその跡よりゝ新田の畆右衛門田返邨の鍬作後家おの〳〵身分相應よ盆にのせたる盆供よ打懸たりし破帛紗松よ巣をくふ鶴の書も大かたはげし摺箔ゝ祖父の遺物よして千歳ゝかりも經ぬらんとおぼへて古雅に奥ゆかし海圓ゝ是等一々神靈の前よ備へ鈴うち鳴らゝ先祖代々一切の諸生靈佛果菩提と唱へつゝ又本の座よいなをりぬ浩る折から八瀬畑の畊作ゝ最垢じみたる針目衣の裾みじかきとはせをりて諸人の後邊よりおづ〳〵盆をさしいだすを海圓ゝ打視遣り畊作主今更いふよも及ばねど其許か許より憑越〳〵生佛丸法師になさばやと吾儕はじめ經をおしゆれども覺んとゝせず夜ゝ火を見ると船を漕出し晝ゝ終日山を欠めぐり殺生を好みて一山の掟を破ること數々なれゝ幾度か追やらんとゝ思ひし

かど折角足下の頼みこ一たる者なれバとて師の坊も早不便よ思し給へバ啻そのまゝに捨おきたれど從來一点ばかりも法師の行狀をつとめざれば師の坊も呆れ果去る頃より山に登りて薪を樵らせ谷よおりて水を汲せなど賤の手業を營しむるに這奴ハとれを恥るけわいもなく日毎に薪水の業をつとむるといへどもそれすら見給へ今日も未朝より出て最早未の下刻なるに得歸らず畢竟是薪をとるをば余所にして野樂かわきてこそ居るならめ斯る世話をかけながら這贈物ハ奈何ぞや所謂旦那の頭數盆と暮とに百旦那々々といわんも傍痛しされバ一山の衆徒等迄生佛丸といたえて言ず只鬼若と呼なすも實に無理ならず斯無益なる白痴をいつまで寺にとゞむべき疾々連て歸りねといわれて畊作頭を搔き宣然ハ些も無理ならねど從來貧しき小子が獨の口さへ食兼て年貢の未進も澤なれど里保さまの御情でどやらかふやら其日を送る痩道家のうのなかへ今更口の増んことハ最迷惑にはべるあり何卒御慈悲よ今暫く御山に置せ給はれゝしと涙ながらよ憑ける浩る折から生佛丸ハ已が脊よりも丈高く薪を負ふて立還るを海圓みるより聲かけて奈何鬼若かばかりの薪をこらんよ長の日一日かゝらんハ餘りといへば心なし今日ハ盆とて參詣も多く厨屋もいそがしきに油賣のも時よるる疾々薪を木部屋へ入れ爰へ來りて給仕でも勤給へ人をつかふハ使るゝと下世話の譬も外あらじと喞がましく呟に生佛丸ハこれを聞て一言半句の答もなくその儘勝手の方へいりしが頓て裙長き衣よ着かへ客廳へ出來り何くれとなく働くに圃太夫ハこれを見ていかさま今の壯童ハ畊作殿の姪孫の都がたに給事して儲給ひし生佛丸とやらんよて有りけり親ハなくても子ハ育と思ふまゝして脊の高く成長給ひたれば吾儕も殆ど見忘れはべりき實に世の中ハまゝにあらぬものかな彼總角容貌ハ玉の如く宋玉潘安が童形といふとも恥かしからぬけわいよて殊更素性も賤からぬと聞に愚鈍なりとハいひながら斯る下ざまの業を勉て日を送るこそいたましけれといふを聞て海圓ハ傍痛くや思ひけん圃太夫に打むかひそれハ肥田大人の議論大く違へり人ハ氏より育といへども腹ハ假用物鬼若めも然る素性あら敎へずとも外典の一卷普門品の一部ぐらひハ覺もすべきよ彼白痴的ハ諸人よ鬼よ〳〵と罵辱らるゝをさえ些もはづるけわひもなく机により勸學の氣づまりよりハ草鞋脛巾で山へ登り谷へ下り薪水の業を司るを快事なるはち知らずなどて胤のよかるべき素性もゝれぬ破落戸と轉寐ゝたる父なし子もふけて返れど然もいまれず人前つくる空言を實とおし給ひそ這奴が顛沛造次にてその父さへもさぞかーと想像はべるなりと飫まで罵はづかーむる辞よ畊作大よ怒既にいはんとゝたりしが否々山の井が遺言といひ如今這所よて其素性を白地にいふときハ人もゝらざる闇夜の恥かゞやかすのみならで誰かハそれ

を實説とせんいふいいぬに勝るとい愛なんめりと無念を忍び涙を躱してこらへ居る心裏や奈何ならん這形勢よ海圓ハ彌つのる傍若無人尚畊作よ打向ひ嚮にもお汝よいふごとく藝無ー猿の鬼若丸寺よ在て用なき白痴的早く運て歸られよと生佛丸が肩さきをむづと摑で外の方へ引いださんとゑたりしよ生質愚鈍の生佛丸も最前よりの惡口を口惜しくや思ひけん大磐石のごとくよて些も動かず眼を怒らし物をもいはず信濃坊を佶と疾視て居たりけるに海圓這形勢を視て呵々と冷笑臭者身ゑらずと下世話の譬ハ汝をいハん歟役ふたゝずの分際で師匠よ齊しき師兄の吾儕をさまで疾視なバ來世ハ比目に生れやせん幾程おのれが白眼ばとて何程の絆有らんと又立かゝる腕ねじ上もんどりうたせて彼首の板間へ頭轉倒と投いだせば畊作遽て走りより忙ーげに海圓を扶起しつゝ生佛に向ひ汝魯鈍の身を以て師父よひとしき海圓ぬしへ手向するこそ易からねやよ信濃坊ぬし何處も痛みは十玉はぬ歟這奴が不骨ハ吾儕よめんじ何卒ゆるし給へかーと詫る詞よ海圓ハ打れし腰をさすりつゝ腹たゝしさよ聲ふりたて優婆夷優婆塞比丘比丘尼と釋氏にハさまゞーの若別あり然るを優婆夷よだも至らぬ兒のぶんざいで吾儕を爰へ投つけし惡行何よたとふべき汝が日毎よ山よゆき樵る木よすら猶尊卑あり棟梁となりて人のうえよ在るもあり又雲隱の板舗よはられ穢れし物よはづかしめらるゝもありそがな

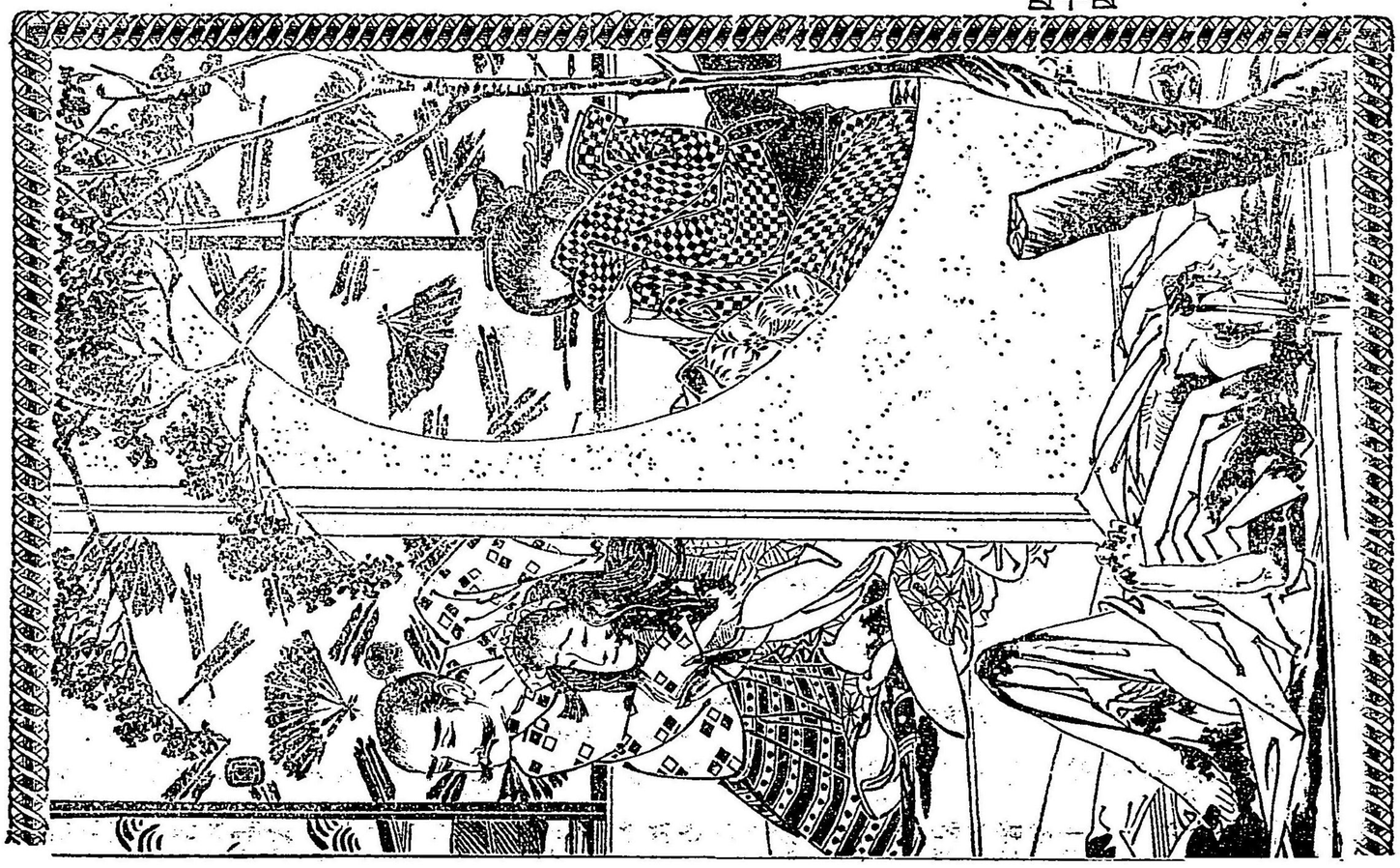
かよに神佛の御像に彫刻れて人よ拜し敬いるゝ幸あれバ下駄や木履よ造られて足にゑかれて賤しめらるゝ恥辱もあり阿彌陀も下駄も同ー木の端吾儕がごとく法師となり今生よてハ活佛とよバれ人にかしづきうやまわれ來世ハ寂光淨土ようまれ蓮の臺よ上品の佛とならんハ必定せり其許がごとく生ながら鬼とよばれ白癡とのゝしらるゝそれすら恥をもおもはぬ空虛的阿房羅刹となりやせん是を縱はゞ吾儕ハ佛よ作らるゝ木よて汝ハ兒法師のはく下駄よ齊し今より後ハ鬼若をやめて下駄若とやいわん下駄なれバ足をもてはく我土足を喰ふべーと足をあげて散々に生佛丸を蹴返せば圃太夫はじめ在合ふ人々あまりといへば海圓が人もあげなる進退を憎しと思へどさしあたる理の當然よ詮方なく手よ汗握る斗りなり海圓ハ此爲体を視ていと快げよやよ下駄若よ其身寺院よ在て法祿を食ーながら法師の行をせざれば武家よいはバ祿盜人盜人の折檻ハ斯こそせめと拳をかため最前投し返報と云ぬバかりのつゞけ打擲口惜おがら畊作が詞を守りて生佛ハ手もいださずよ低頭平身悔涙にくれたりしが鬢髮亂れ衣破れ余所目いぶせき行粧よ玉苗ハあるよもあられず傍より父の袂を卒度曳つゝ聲をひくふーー彼兒余りよいとおしゝ家尊大人詫言してたまひねといふよ圃太夫打点黙海圓ぬしのいハるゝ處理おがら地獄の釜の蓋さへあくと諺に云盈の中最よきかげん赦し給へ生佛殿も今よりーて心を用て師

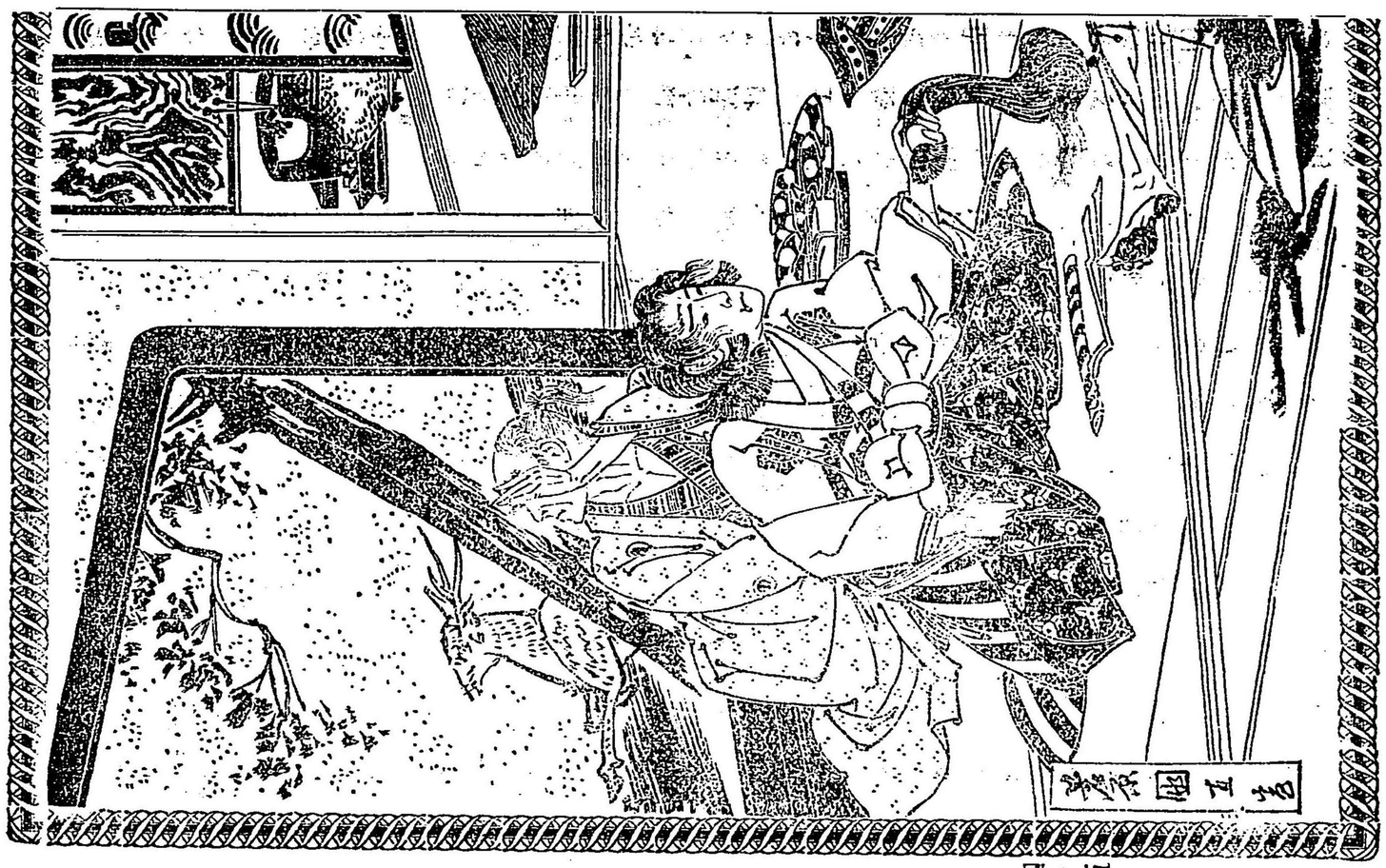
の坊や海圓主へ傅給へといへども海圓尚聞すいやとよ渠ハ原來横着者よして打るゝ時ハ故意と云ほれ空涙をこぼせどもゆるしてやれバ次へ行舌を出〳〵て吾僧を譏笑ふ事ハ吾疾よりしりつ今一拳を喰せずバ吾腹ハ爭いんと亦つゞけさまに打柏子よ瓦溶離と音して生佛丸が懷より落る物あり海圓手早拾ひあぐるを生佛丸ハ遽てこれを拿らんとする其手を拂ひ右視左視て佶と疾視へ諸人これを觀せよ是ハ抑も片鄙おんどにハ見もならハぬ珊瑚珠といふ價尊き玉を黄金白銀以て潤色せし簪あり簪ハいふまでもなく婦女の髪のかざりなるよ寺よあるべきものゑらず思ふに這奴何首よてか盗み取り沽却おして買食の本錢よせんとたくめるおらんか吾僧が嚮よ盗人と云し辞も今爰に符節を合せし偸盗戒サア何方で盗めりと妄語をいわず眞直に白狀をせバ殊により又ゆるすべき仕法もあれ外の事ハ兎も角も盗すると知りつゝも寺に置てハ阿闍梨ハ從來一出の恥辱なり言譯あらば疾く聞んと威丈高に詈るよゞ哄作もたまりかね生佛丸が襟髪つかんで拿て引よせさん〳〵に打擲なし最前もさいぜんとて信濃坊のハ詞に破落戸的の胤ならんと宣ひし時なんじが素性既にいわんとーたりしが今將思へばまだしもよ素性をいはで闇夜の恥をもあかくせざりけり氏より育といひながら奈何身貧に暮らせばとて人の物を掠めとり己が榮耀よつかはんとハみさげはてたる根生かゝ草葉の陰から山の井が聞バ何程歎

らんよしや愚の心よも少しハ恥を知るならバ其身斗りか吾僧迄多くの人の見る前で斯まで恥辱を與へハせじ世よもまれなる空氣者憎さも憎しとたゝひつ踏つ悔涙よむせびける身の過よ生佛丸顏も得あげず平身て消もいりたき行粧也何思ひけん玉苗ハ遽しげよ走り寄落たる簪拿より速咽へぐざと突立れば圃太夫夫婦哄作も慌忙とりすがりこハ物にバ〜狂ひ給ふ歟何故の生害ぞと涙ながらよ尋ぬれば苦しき息を吻とつき妾全く狂氣もせず月頃親を欺きし先非を悔ての這自害父母の御前で白地よ聞へあげんハ影護恥かわしさの限りなれど懺悔よ罪も消ると聞バ吾身の上の一件を語りはゞらん聞てたべ思ひいだすも去歳の文月廿六夜の其夜さり月の出汐を拜まんと漫行の闇まぎれ惡棍等よかいさらはれ村稍尽處の辻堂へ倡引既に渠等にけがされんとしたる折から雨降出し雷さへおどろく〳〵う鳴をためぐに氣をうしなひ髮時前後も知らざりーが何國のおりたか一個の壯佼彼惡漢を所ころし氣をうしなひし妾をあわれみひとかたならぬ介抱の誠心通じて息吹返しうれしと思ふ折からに又一聲の雷に恐れて堂へはーり入り彼壯佼よ取りついて暫く雨をしのぎーが縁のはーとや成よけん顏も得しらぬ其人の情に絆れ只一度まくらかわして何首の人奈何なるおかたと問ばやと思ふ間ものふ爺御の迎ひ影護さよ何氣なきふりよて家よ返りーが跡よて思へば衞堂へ日頃秘藏の簪を忘れて來たハ物

化の幸倘彼人の手より渡らば再び巡りあふ便よなりもやせんと心に秘て過せーうち何とやらん心地悪く酢物のみが好もしきハ扨ハ正しく彼お人の削を此身にやどせーかと思へばいとゞ浅猿斯聞玉ハゞ父母の徒者よと嘸かしに御腹立と思へばこゝ只病とのみ言ふらーー今日迄つゝみおゝせしが親を偽る罪深かり然ハいへ女子ハ一生に夫ハ一個と聞ものをよしや顔も名もしらぬ人よしあるとて一念のやわか通らぬ事あらじと心の中に慕ひしが今日といふ今日爰へ來て視れば癡呆の生佛さま海圓殿のうち打擲いと悼しう思ひしが今懐より落ーー玉ふ這簪ハ妾が物偖其夜よかたらひし男ハ則生佛様と思ふにいとゞ哀しさつらさ其簪より疑うけ咲作様の御折檻何といひ説辞なく顔も得あげぬアノ御姿いかで余所めに見らりやうぞ一夜の情より百世の命を縮る玉苗が心を不便と思しなゞ御身の口より一遍の廻向が智識の引導より遙よまさりて覺ゆるかし先立不幸ハ幾重にもみゆるーー玉ハ父母よ死る命ハ惜ーからねど日の目もみせず腹な子を闇から闇に迷はすが不便とゞかり言さして跡ハ涙よくれけれゞ稍有て圓太夫ハ目をしゞたゝき縦ハ痴鈍下愚たりとも娘が左程思ふなら又詮術も有るべきにはやまりー絆えてけりと夫婦が歎に咲作も俱に道理よ俯沈む此爲体を見る海圓いと妬まーさに立あがり扨ハ玉苗主が病といひーハ鬼若めがそゝのかー懐胎たるよてありけるかそれゆへよこそ玉苗殿が命を

捨れば鬼若ハ圓太夫ぬしにハ娘の敵吾儕がためよも懲の仇いで息の音を止てくれんと生佛丸よ撃てかゝるよ今まで伏ーて默然たる生佛丸ハむッくと起信濃坊をかい掴目より高くさしあげて遙の庭へなげいだせば在りとふ飛石よ頭と打つけ脳くだけ微塵になつて死けるハ心地よかりー行粧なりあるやと駭く一間のうち勸慶阿闍梨の聲高く白露のおのが姿をその儘に紅葉よをけゞ紅の玉と口吟つゝ立出給ひ空則是色色則是空煩悩則菩提今ぞ鈍根斷絶して正覺を得る時至れり奈何よ生佛日頃よかゝり心地清浄なりつらんと宣ふ辞よはつと蹲踞最前海圓に打擲され忙然として放心せーに夢ともおく現ともなく黒衣の老僧あらはれ給ひ汝今こゝ剃髪染衣の時來れり然ハいへ亂れし世の中よ法を説ともなかくもて衆生濟度ハ思ひもよらず故よ汝今より諸國に飛脚し容ハ浮屠にありながら武術を磨き汝よ勝る者あらゞそれに去たがひ蓋世の功を立なゞ懲に佛よ仕へ經を讀作善供養に勝るべーー母の遺言今此時汝が肌の守をひらかゞ素性も詳よしるべきぞといふかと思へゞ我に返りぬ何ハ兎もあれ此守護とひらきて視ればうたかたの消ても殘る水莖の跡なつかしき母の筆天津兒屋根の命の苗裔中の關白道隆卿の後胤熊野別當辨正が一子小字生佛丸とぞ名るせしかゞ扨ハ四夫鄙夫の子にてハあらざりーか是にて最前海圓が吾儕を下賤の胤ならんと恥かしめたる恥辱を清りてれみな母の賜よといふ聲





音さへ常にハ似ず懸河の辨舌滔々と流石高貴の胤なりし熊野の別當辨正が一子とこそハ〜られけり勸慶阿闍梨再 曰く往昔畊作が汝を誘ひし時既よ凡骨ならぬを知るといへども故意と下賤の業をゆだね心のまゝ〳〵進退せしハ過去の因緣をはたさせ一度男女の道をしらせ其煩惱の源を脫離させんが爲なれバ也吾 豫 これを悟りゐるといへども故意今迄御身等よも對面もせず海圓が非道も余所よ見なせしハ這宿業をはたさんが爲也圓太夫ぬしさな歎き給ひゞ皆是前世より定る處に〜て外典に所謂死生命ありいかで人力の及ぶ所ならんや生者必滅會者定離喜怒哀樂ハ浮世のならひ雲井をいで、遠からぬ辨正が子を婚よせば家のほまれ此うへなしと因を訣果を示す六根弘通聖の辭苦痛のなかに玉苗ハ生佛丸が目前怜悧なり〜を右視左視いと嬉しげなる面色にて兩手を合掌て伏拜むハ勸慶阿闍梨よ生佛が綽を托ずと見へよける奈何ハしけん玉苗ハ阪とのつけに反かへる拍子に腹の子返り〜て忽産るゝ産聲に夫婦ハ再び打驚きとりあげ見れバ正に是玉を欺く男子なれバ歎のなかの歡と袖引ちぎりておしつゝめば生佛ハ圓太夫夫婦よ向ひ今更いはんも其過をかざるよ似て最面ぶせなる綽ながら去歳の文月叡山よりの返り道村稍尽所よて玉苗殿が危難を扶け辻堂へ誘ひいれ〜暗まぎれ春心動くを禁じがたくわりなく枕をかわせ〜よ何國いかなる人ぞとも問もせず問われもせぬ其間に御身の迎の駕籠影護さに出もせざれバ御身と知らんよふもなし佛よ仕る身を以て邪淫と犯せし罪深けれど彼も是も前世よりの約束事と思諦給われかしその代りよハ吾今より周國を漫遊し專武門よ身をよすとも容ハ圓頂緇衣の徒よて生涯不犯よ身を終らんこれ令娘苦節よ死せ〜恩義よむくふ一箇の寸志妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と從來三界無庵の境界謝靈運がむかしにあらひあらゆる名山靈場よ錫を飛し杖を曳うゑよハもつぱら柔和を常とし心にハ磨高麗劍武を藏の意を以て武藏坊となのり父辨正が辨の字と阿闍梨の法諱の一字を取り今より後ハ辨慶と改むべしと髻ふつと切拂らへバ阿闍梨ハ殆々感激ましく〳〵あれ聞給へ圓太夫ぬしこれ迄遂に經卷を手よふれざりし生佛が妻子珍寶云々の悲華經の文を記臆〜武藏坊とよび辨慶と名乘らんといふ其字義茲よ分明たるハ天の與る宏才博識ゆくすへ奈何ある者とならん 熟 考がふれバ唐土にも是よ似たる事あり徽州の進士某といふ者あり幼稚時其父是よ書を讀ことと敎ゆ性奇塞呼唔十數載尊常の書卷都て句讀を辨ずることあたわず然るよ彼父が姪何某といへるハ文名を負て世に聞ふる者なり太翁幣を厚ふして延致しこれよ師たらしめて曰此子敎ゆべくんば則敎へ敎ゆ可からずんバ質く予に語るべし久く羈るゝことなかれと姪命を受て訓牖百方に〜て懵き事故の如し歳暮よ辞去て曰某が力竭く且叔父の產 固 豊なり弟郎魯ありとも田舍

翁を失わず奈何ぞ此を以て相強ん太翁曰然り退て嗔り婦よ語ていまく不肖の子を生乃翁ハ真よ乞せんと私よ大挺を覓め壁間よ靠て待ところ有るが如し蓋公進士の已を辱かしむるを恨み意且にこれを撲殺さんとす毋翁の方に怒て返すべからざるを知り進士を呼んで窃に告て他に避しむ進士甫て新に娶る是夜閤戸籌議す留らんと欲すれば禍測られざると恐る去らんと欲すれハ行所なし則夫婦相持〜て大よ哭す不覺夜半也倦極て假寝す金甲神有て巨なる斧を擁し闥を排て入るを見る其胸を捽で是を劈其心を抉出す又別に一ツの心を取てこれを納る大ひよ驚て寤む次の日翁杯を延き飲で別を爲す翁まづ返る進士前み送て數里よ至を最後あから衣を挙涕を流〜て曰惻隱の心人皆これあり師何ぞ某の歸て死に就に忍びんや師瞿然と〜て曰安ぞ此達者の言を得たる進士曰此自某の意より出づる所也且某此時頗る胸次開朗なるを覺ふ願はくハ更に師に乞たがつて業と卒ん因て夜來の夢を述師叩くに授る所の書を以てするに則よく記誦す大ひに駭き密よ與よ返る翁剝啄の聲を聞挺を掣門よ俟已よ師の返るを聞則延入る師つぶさに途中なて聞所を以て告翁認としてれを試むるよ良よ然り乃大ひに喜ぶ是より敏穎大ひに著る數歲ならず小て邑の書生に補せらる又數歲歸接て進士となると此事きわめて小説に近〜といへども今生佛丸が絆を以て見るときハ又認がたし且生佛に殺されし信濃坊こそ破戒の惡僧諸天善神生佛が手を借渠を罰し給ふ歟今生れたる其兒こそ全く君の孫なればこれを持て世繼とし肥田の家を立給へ御身も先祖ハ武士と聞ハ勇士の血脈にて家繼んハ無越幸ひ又此悴成長して子ども許多あるあらハ惣領よ家督をつがせ二男ハ熊野へ贈やり嫡正殿の家をつがさハ啡作の姪御が昔の過をおぞのふといひ且生佛が鈍根を脱して聰明怜悧よなりし事を彼人ほのかよ聞ならばさこそ歡び給ふらん是等の絆ハ豫じめ啡作ぬ〜はからひ給へと絆おちなく説示し給ふよよそ各位あつと感じける當時阿闍梨ハ再び辨慶に向ひ汝今より直に諸國をめぐらんハ今もこし早かり我書翰を認てつかわすべければ叡山の西塔よ至り三年が間勤學せよ螢雪の勤め怠らずハ忽一山の博識とならん倡疾々といそがゝ給へハ辨慶ハかしこみてたゞちよ頭を剃こぼち衣服をあらためて立出れハとなたハ修羅の四苦八苦流石婚とも泰山ともいはぬハ云ふに增かゞと貞女の鑑出家の鑑武門の鑑と後の代迄龜の鑑の萬代も尽ぬ名殘の哀別離苦引ハかへさじ梓弓やまと魂雄々しくも思ひ切てゞ出て行

武藏坊辨慶物語卷之二終

第五回

辨慶學業稍成て山を下る
橘内池魚の災に因て兒を亡ふ

抑叡山一乘止觀院延暦寺を聽へ〜い人皇五十一代桓武天皇七年の草創にして傳敎大師の開基なり西塔ハ釋迦佛を安置し東塔にハ大師を安置す横川よハ觀音阿彌陀を安置す是を三塔といふ偖も辨慶ハ師父觀慶阿闍梨の命に從ひ叡山よ赴き西塔よ住しければ是よりして西塔の武藏坊辨慶とこそハ名乘ぬ斯てより辨慶ハ三伏の夏の日玄冬の寒き夜も竟日徹夜手よ經卷を繙ず顯密の學業惰らぬものから忽圓頓實相の止觀を極るとハ云も更なり傍和漢の史典子諸百家通ぜずといふ事なし尙修學の暇よハ窮よ深山幽谷にとけ入て巨木岩石を對人として劔法を試み亦熊猪よまたがりて馬術を調練などするに是もまた幾程もあく學ばずして其温奥を自得しぬさる程に隙行駒の足疾く爰に又三歲の兎烏を送り辨慶ハ廿才よ及びければ偖ハ師父の敎へ給へる河清と或日天晴れ麗あるに從ひ山と下り麓の村に至り其所よ此所よと逍遙せしに忽叮々砧々といふ槌の音聞へけるよそ辨慶ハ是何等の家なりやと裏の容子を物色よ是正よ一軒の鍛冶家なりければ心中に思へらく吾今より諸國を經歷せんよ嚢に寸鉄を負ずしてハ最便あしさりとて法師の身よて刀劍を帶したらんよハ人强盜老馬賊なりと疑て怖るべし何をかなと且うちよ入て鍛冶家の主よ打向て吾思ふ旨趣をつげて扨いへりけるハ傳へ聞唐土懷慶奇華鎭の宋將軍が家よ寄たりし大鐵推といふ人ハ平常よ大きやかなる金鎚を夾む其重サ四五十斤飲食拱揖皆がうちもこれをはなたず其鐵の柄つねにハ摺盤て環複すると鎖上練の如く是を引ば長サ丈許をきくこれ則張子房が爲に秦皇帝を博浪沙中よ推せし滄海君なりと見へたり爰よも如斯工をなしたる者あらんや然らんにハ吾このたびの行脚よ擕へて不眞の備へになさんハ奈何よといふよ鍛冶屋のあるじ眉を顰めていへらくうハいかはも作りて作られざる事ハあるまじけれど鐵を以て金鎚を作らバよ〜や其柄ハ麤とも重くて持歩行よ便り悪し師父斗藪よ刀劍を拵るを似氣なしと思ひ給ハゞ柄をバ堅木にて作り刃ハ薙刀のごとくきたひて棒のうえよ仕込て常よハ禪杖と視せて山路阪徑を突き碎あるときよ至らバはね出すよふよ作り給ハゞ可ならん乎といふに辨慶限りなく歡び爾バ柄の長サ四尺斗りに作り又刃の長も四尺斗りよ作りて給ハるべし價ハ幾程よても苦しからずと懷より一封の黃金を拿出して手附として遞與し其造り果ん日を約して立歸りぬ斯て程なく其日よもなりしかバ辨慶ハ再び彼

鍛冶家よ至るよ阿翁ハすゝみ出て是を迎へ頓て一本の棒を拿出して遞與るよ辨慶熟視て其用ゐべき樣を問ふ鍛冶家の主公打頷て彼棒をとりあげ一振ふるよと視へしが忽然として明晃々たる白刃ひるがへり出て恰も長刀に異ならず辨慶這形勢を見て掌を拍て大きよ喜び約束のごとく黄金を與へて是を稿ひ携へて即時に山よ歸り行裝そこ〳〵よ調へて當歳もなーに東とさして出行ぬ世よ辨慶柄も四尺及も四尺合せて八尺の大薙刀を携へしといふものハ是といふ歟

是より下に記す物語ハ辨慶が生れいでー前後の緯にて二十年ばかり前の話説と見給ふべし

夫耕牛よ宿食なく倉鼠よ餘糧ありと朱文公が歎じたるも宜なるかな貧富貴賤ハ天の命ずる所にーて人力の及ぶ所よあらず茲に洛陽三條よ金商客よ橘内といふ者あり彼ハ陶朱猗頓が富となして黄金白銀許多積貯へ高貴縉紳の御館へも入りこみて親ふするものから自と其威勢强く家居もてぎ〳〵しく家隷數多もちて何くらからず時明ける今歳荆婦何某なるもの始て一個の男兒を産ければ喜ぶと限なく我家を繼ん者これならでハとて橘次と号け愛慈を大かたあらず爰よ又下野の國深栖氏領主よ深栖陵之助光重といふ人おはしけるが是も在藩よて洛陽よありけるが同年同頃よ女子をもふけ其名を唐立と呼つ素より陵之助と橘内ハ莫逆の友ありければ一日陵之助ハ橘内がもとへ音耗て四表八表の談の序にいひけるやう吾儕ハ子供許多持るが上に今歳又女子を儲ぬ足下ハ初て一個の子を得給へるなれば吾儕が今歳もふけし子を以て足下が子の妻と定め襁褓の中より字をーて今より後一家の因を結ばんハ奈何といふよ橘内ハかぎりなく打悦び深栖生ハ源の仲正公の三男におはして三位頼政ぬしの舍兄たり斯る槐門貴族の人と緣を結ばんと悋が洪福家の面目此上あーとて一議にも及ばず承諾あし頓よ吉日を選らみて橘内が方より聘物を贈りければ陵之助がかたよりも婚引手を贈り兩家歡ぶと隅りなし斯て又橘内ハ倩〻思ふよふ吾家斯富て何不足なーと雖渠等二個成長まで ハ最あがき よ世ハ戰國の時なれば不憶別れて又歳月を經て環會ことなんどあらんよ當時迭よ女とも夫と証據あくハ便なからん幸ひあるかあ年來吾家よ秘藏せる花橘と号る名香ハ世よまたあるべやうともおぼへねば彼名木を引わかちて兩個の孩兒よ齎らしなば環會ときの割符には是にうえこす物あらじと光重よも思ふ旨をつげて臍緒の書付よそへて橘次が肌の守におさめ其一木をば深栖が家に贈て唐立が守袋よ入れさーぬ寔や明雲座主ハ相者に逢て兵仗の難やあると言ひ給ひしが遂に節に當て終焉をとり給へるとやや橘内が遠謀はたまて兩個一度別れて

後再び此名香に依て萬般の禍〻と醸〻終に聚合する因緣豫天命の然らしむる所なる乎斯て其翌年霜月某の日洛中某の處より火起りて風烈しくさしも立澎らねたる洛陽の甍忽地灰燼となり男女號哭巷街に充滿たり爰に彼橘内が館より橘次が乳母何某幼主を抱て庭前に遊び居りしが遑形勢に驚き慌忙逃いでんとせしがはや四面に火うつりて出るとあたわず辛ふして後門の方迄遁れ出しに忽上より大やかなる梁燒落て押に討れて死たりける然れど橘次が運や强かりけん幼兒のみハ恙なく築地の下の溝に轉落て泣叫び殆ゝ死すべく見へしが適一個の旅漢焔のなかをかきわけて喘々走り來しが這体爲を視ていとおしくや思ひけん兒を火の中より抱きとり泣叫ぶをいぶりつゝ院の子〻と呟きつゝ懷へ押入れ又燃あがる焔下とれいくゞりつゝ何処ともなく往過ぬ畢竟這旅客ハ怎生者乎次々の條をもみて知るべし斯て程なく風休火靜りて其首此首より辛ふして逃のびたる奴婢等より集て更にその恙なきを視するに ひとり橘次が乳人のみ見へず從來愛兒の絆なれば何地へゆきしやと夫婦ハ物狂ハしき迄に東往西往尋ねめぐるに漸々乳人が遺骸をば後門の邊に見出したるに扱ハ渠烟にまかれて死したるものなめりと思ふにつけて胸まづ打潰て吾子橘次ハ如何せしやと百端さがし究るといへども更に影だに見へず倘や燒死せしやと思ふに骸も見べずとハ世に所謂神隱しなどい

ふものゝやと其頃の陰陽博士安部康親評いもきて其有無を問ふに康親蓍をとり卦をとしき少刻考ていへらく今得たる所の本卦ハ雷澤歸妹なり而て歸妹の初爻變じ火澤睽となる睽ハ遇なり本卦の雷ハ震なり變爻の離ハはなるゝなり火あり火の禍によりて一度離れんを易の表に顯然たり且兌ハ澤なり水に屬す祝なりよろこびといふ訓ありこれを以て考ゆるに水に依て命を全ふし廿歲余を經て喬梓再び邂逅すべし爾はれその折のぞんで大愁傷あるべ丁這卦ハ是昔晉の獻公が娘齊姜を秦の穆公に送り晉秦の好を結ばんとしたる時に得たる卦なりと繆審に示しける抑此康親ハ晴明五世の孫にして先祖に劣らず廣く天文曆數に通じ彼唐山の管輅召康節晉國の伴別當指の巫女なんどよりもをさ〻劣らぬ者なりければ橘内深く信じ扱ハ吾兒恙なくて廿歲を經て再逢見事疑ひなし爾われ其折に望てきた愁ありとハ怎生なる緒ぞと前程さへも思ひやられて意ならず月日を送るうちに橘内が妻ハ這緒を愛とに思ひ且暮涙のかわく隙もなく竟にはかおくありにければ橘内ハ歎きのうえに歎を重ね鬱々として樂しまず愛年月を送りける爾る程に二氣往再として委みおく春と過ぎ秋と暮れて早くも廿歲近くの歲を經て代ハ仁安とかしうつりぬ爰に小松内府重盛の次男平の資盛の家隷に美佐崎太郎爲祐といふ者ありこれハ少納言信西が親族にて其齡いまだ若冠にして色白く目秀唇紅にして適れの美男なれ

どもりの心さまゝ大佞て巧言令色の癖者あれども資盛のおぼへめでたく晄明て何くらかちず いまだ獨住の徒然不圖袖衣といふ白拍子よなれそめ〜が這袖衣も美目麗よい似もやらで昨 りの媚と獻じ客の心を蕩し何方へもなびけるさまよ管待ものから是が爲よ家を亡ひ産を破り 親の諫世の譏をつゝむよ心のいとまなく遂よ路傍の客となるもの少なからず然れゝ同氣相鬩 同病相憐の諺のごとく爲祐と袖衣が中今ゝ膠漆のごとき有樣にて鳥の啼ぬ日ゝあれども雨 個が逢ざる日ゝなきといふ泡になりよけるが太郎が家爭か搖錢樹聚寶盆を貯ふべき忽黄金尽 るにおよんで兩個が通路よ關を居へて心の儘よ逢さゞりけるよそ大郎ゝ鬱々として樂まず窃 茫然として吾家に引籠りて暮しぬ爰よ三條の橘内ゝ此程數々彼袖衣を招きて酒の對人としけ るが袖衣ゝ斯る腹くろある性なれゝ橘内が齡のかたむきて妻もなきにそ胜裏よ一計を生じ翁 よふれてゝ妾ゝ父もなく母もなく最便なき者なりあど打歎はや野の花穗よいでゝ引ばなび君 ん風情なるにそ橘内も流石岩木ならねば渠が奸計とゝ知らず竟に身を購ひて小妻とこそゆあ しにける爾る程に橘内ゝ活業の絆よつきて下毛野方よ下らねばあらぬ事ありければ克折と光 重が許に立越ていへりけるゝ吾僧此度汝が知行たる下毛野よ下行姑く彼地に足をとゞめはや と思ふよつけて吾兒橘次ゝ往時池魚の災の砌より踪跡しれず尤康親ぬしの勘問にゝ恙なく

で年經て環會よしを示し給へれど今に至りて二十年近くよ及べども絶て音信だにあければ未 死生も詳あらず然るを貴家の令娘唐立ぬし最早嬪さす年も過がてなるよ其存亡定あらぬ吾兒 橘次が爲に貞操を守りて何方へも嫁〜給ゝざるゝ我よおゐて滿足するといへどもはや廿歳も たちたれゝ其志操ゝ屆り今ゝ唐立ぬし何方へなりとも嫁給ひて後よしや橘次が恙あくてある とても爭か恨侍るべき生死存亡の定ならぬ夫を守りて可惜年月を送り給ゝんとの不便さよ此 度の序吾思ふ旨意を告〜らしまひらする也といふよ光重眉を皺めていへらく足下説給ふ所宣 なり寔ゝ吾僧も平常より爾思ひはべるゆへよ時々娘よ再嫁の絆をすゝむるよ渠ゝ貞操いと正 しく死生定ならぬうちゝよ〜や齡の傾とも肯べきさまの更になし浩れば娘が健氣ある心操 よ羞て再口を鉗〜か今亦足下の聞へあらし給ふ趣意をつげて目前渠が底意を探りはべりな んと直よ唐立をまねきよせて光重ゝ方今橘内がいへりし有枝有葉を物語るに唐立ゝ容貌を改 ていへらくこゝ心得ぬ泰山君の仰かな妾最愚にゝ侍れども賢典のはしくれをも些ゝ學びは べるに史記とかいふ書よ忠臣二君に仕へず貞女兩夫よ見へずとか見へはべる橘次君とゝ襁褓 のうちよりの字のみにして互に顔もあらずはべれば安部の康親大人の考にゝ年ふりて後恙 なくて遇見るよ〜のたまへりとかや彼大人ゝ深く天文よ通じ前程往時を説給ふとと神の如し

とか聞侍るに爭かあやまつ事あらんやよしや橘次ぬし世よなき人となり給ふて生涯まみゆる事あらずハ千年經るとも夫ハ倶せじ松の操の淸らなる心ばへをバ黃泉で聞へゑらしまひらして蓮の臺よ菅の根の永き契りを結ばんこう最願わ〜うはべるかしと涙と俱よねがふにぞ光重殆と感激し實や其許ハ我子ながら世に類なき節婦なりやよ橘内ぬし斯る健氣な子を持る吾儕ハ最も幸なり否其許より吾儕こそ爾る貞節の女兒を新婦にもたり〜幸ハ黃金よまさる幸おから悴橘次が世よありて嫁舅よと呼れおばりの嬉しさハ奈何ならん世に稀なる貞婦を嫁とせ〜ハ世に稀なる洪福にして又天にも地よもかへがたき只獨の悴の行衛も知れぬといふハ吾身にとりて不幸此うへや侍るべきいかよも唐立が詞のごとく康親ぬ〜の拘問疑ふべきにあらねバ遠からで悴が踪跡もゑれ兩家めでたふ愁眉を開く時あるべし且夫迄ハ唐立をば其元が方よ預けまいらするなりと再會の期を約し袖衣以下奴隸許多を俱〜下毛野にこそ下向ける却説平資盛ハ平家の威勢盛なるよゑたがひ萬事驕漫の事多く公卿殿上人へ對し失禮なる進止澤なりしかバ忽ち罪せられて嘉應二年伊勢の國へ配流し給ひければ爲祐も退糧となり詮術なく奈何ハせんと思ひけるがとても斯なるうへハ毒を喰ハバ皿をねぶれといへる諺のごとく彼半縷約たる袖衣を掠奪して東國へ走らばやと竊よその動靜を覗ふよ渠ハはや前月金賣橘内といへる棄封家に身を購れて吾妻のかたへ下りゝと聞より且呆れ且悲れども詮術あく從來獨住の心易さハ些の家財を沽却て路費となし父が所縁下毛なる高野の庄の邊りに在と仄に聞しと便よして遙々とこそハくだりける

當時前回に記す辨慶叡山を下て東行せし折と同頃の物語とゑるべし

第六回

破落戸詐の計を以て刼を誘ふ
富翁便著無を憐で客を留む

さる程よ美佐崎太郎爲祐ハゆき〜て下毛野高野の庄にいたり知音を尋ねしよ其人ハはや二三年あとよ死去て其跡だに定ならずと聞へしかバ憑む樹下雨漏るハこゝちして忽進退爰よ極り奈何ハせんと啻在茶肆に立よりて臂打懸澁茶を乞ふて是を吃し少時勞れを晴らし東行西行思ひめぐらし居たる適向ひの方より歩行來る一群あり前よすゝみ〜ハ年齡耳順余と見へて奈何にも富有なる人とおぼし夫に從ふ一個の若女兒ハ小星よてや有らんずらん年未廿歲よも充てず彩麗衣を重襲て蘭奢の薫四下を拂ふて許多の侍女よ傅れ其他奴婢多く誘ひて今太郎が憩ひたる床几の前を行過るよ原來色好の爲祐忽地蘭奢の薫り鼻をうがつよ斯る憂苦の中よも不圖頭を擡て其個を見るに是正よ別人よあらず都よて二世と誓〜白拍子袖衣にてありけれ

ば愕然として大きゝ驚き這奴平素吾に誓し言を食暫逢ざるうちにはや昔時の約ゝそむき橘内とやらんが僻妾となりーこそ易からね寔や妓女ゝ戀なし寶をもて戀とずと故人の語も今ぞしるよーく此上ハ跡追蒐て憎ーと思ふ袖衣はじめ橘内侶共只一刀に斫殺し吾鬱憤をいらさんか否々這計極めて拙し渠ハ素主人にまかせたる身あれば吾儕をすてゝ年闌たる橘内が側室とゝらんを意ゝ快かるまじけれど是もまた詮術なくて事の爰ゝ及べる乎よくも其實否をも問諦ずはやりて渠を殺さんハ匹夫の勇といふべき歟縱渠が變心せしに極るとも橘内も癖者也且亦從者も多かるに倘本望も遂ずして空く縛とられなば恥辱ゝ恥辱を重る理也それよりハ密ゝ文を送り其肺肝を問ふていよ〳〵吾窶々しくなりーを見限て橘内ゝ心と傾るゝ極らバ更闌人靜りて後渠が家ゝ忍び入り兩個が熟睡せしを見すまし思ひの儘に刺殺ーて其恨をはらすべきか否これも又啻恨を返ずといふのみにして彼に損ありて吾に德なし爾ハいへ此儘ゝして打捨おかんも余りゝ口惜く且大丈夫の所爲にあらずと右さま左さま思ひめぐらしつゝ茶肆をいでゝ歩行日脚も頓て脯時屠所に近く心地ーつ係る適向ひより來る一個漢行違ふさまに太郎が刀の柄にさげたる燧袋を拿て逃出さんとするをすかさず其首筋を捕へおのれ白晝吾燧袋を奪はんとするこそ贍太けれいで某が首をとはねて旅客の後愁をはらふべきぞといふに彼須利ハ面色土の如くなして只救を給へ〳〵と戰慄より外なー太郎ハこの行粧を視て嘲笑扨も汝ハ須利をなすゝ似合ざる肝のさゝやかなる奴かな今吾汝が命を助て大金を得る事を敎ゆべきが吾いふとを用ひてつとめて事をなしはてんや奈何にといふに彼刼ハ大に喜び忽ち大地ゝ平身していふやう吾儕ハ這邊の者なるが疾く父母を亡ひよるべなき上に我儕素より袁彥道を好酒に耽り色ゝ溺るゝ以て親しき一族も疎ゝはて誰ありて憐む者なく詮術盡て晝夜遠近を徘徊して人の懷の物を盜みこれを市に鬻て其日の飲食にかへしが程なく其業ゝ熟しける程ゝ徒黨者吾をさして白日鼠の鳶六と諢名しつされバ終に今日のごとくおくれを取りし事なし此上に命を助け金儲の事を敎へ給ハんとならばいかなる辛苦もものかハ虎穴ゝ入らずんバ爭か虎子を得んと故人の格言よくも悟りはべるかしと最信だちて聞ふるに爲祐ハ再び飛六に向ひ爾る心ならバ言聞さん近頃當國に來りし洛三條の金商客橘内といふ者こゝ當世無双豪富にして多くの金銀を貯るものなり吾渠を一刼ーて其資財を奪ひ拿と思ふゝ汝これに組すべきや否やといふ鳶六これを聞て呵々と笑ひ吾儕も粗橘内が事を知といへども渠ハ從者數多あり然ればこそ今世に名たゝる熊坂殿をはじめ王生の小猿摺針太郎などいふ盜跖張角ゝもまさりし大賊すら手ざしもせざるに吾儕がごとき小盜賊の爭か手ざしのなるべきや這事の

みゝゆるし給へかしと舌を巻て怖るゝに爲祐ハ掌を拍て大ひよ笑ひ扨々汝ハ心の狹き事と
いふ奴哉大凡軍法にハ弱よく强を制し柔よく剛を制すおどみへ又小歇を見て侮るべからず大
敵と見て恐るべからずといへり今橘内夥の從者ありとも何ぞ爾迄懼るゝよ足らんや吾別に計
略あり其計略をほどこすよハ渠が自筆の書翰を得ざれば計を行ひ難し汝奈何よもして五三日
のうちよ渠が燧袋を奪て吾に得さしなば夫よ付て施すべき妙策有り汝よく此一條をなし得
んやといふに鳶六聞て然ばかりの事をなさんハ最易し吾儕是迄人の懷の物をとり又腰よ提た
る物を奪ふをハ啻袋の物を取るごとく竟に一度も不覺をとりし事なし今烏の過失ハ全く千慮
の一失よして實よ君が洪福のいたす所なりと最面なげに見ゆるにぞ太郎ハ打点頭然らバ某の
日迄に爲課て云々の所まで携へ來るべしその上にハ吾別に妙策ありと堅く約して立別れ爲祐
ハ邊り近き逆旅に在て鳶六が音耗を待ほどに頓て其日にもなりけれバ按のごとく一箇の燧
袋を携へ來て太郎が前よさしおき日外嘱給へる橘内が燧袋をバ難なく盜み取りて待るか
しよく中を展檢給へと最誇貌よ述るよぞ太郎ハ頻りに其伎に長たるをたゝへつゝ燧袋を開て
其内を見るに印形あり且黄金を貸たる劵文又自筆の書翰幾枚もあり太郎ハ是を見て再白日鼠
に向ひこれを手に入るゝ上ハ忽大金を得んと最易かりされど人の耳ハ壁よあり石のものいふ
世の中に爰にて浮々その計と商議ぜんハもれ聞へん恐れあれバ人跡はなれたる方よいゆき
て緩々を相譚べしといふ鳶六聞て尤と同し前よ立て逆旅をいで人なき方に行よ傍よ古びた
る一箇の草井戸在り太郎ハこれを見るより心のうちに点頭足を揚て後方より鳶六が油斷を見
ずまし忽地彼古井に撲地と蹴落しければ白日鼠ハ阿呼を叫もあへず這上らんとするひまに爲
祐ハ四下に在合ふ手頃の石を打こみ〳〵遂に鳶六を埋殺し莞爾と笑ふて棄の舍りよ返りぬ此
一件ハ都て橘内が燧袋を手に入て渠家にいりこまんといふ太郎が姦計圖をはずさず首尾よく
計成しかば心中大きに悦び頓よ行裝とゝのへて橘内が家を訪ふに聞しよまさる家居のさま最
奇麗なるに太郎ハやがて裏に入て案内を乞ふよ一個の青侍立出て何處よりぞといふ當時爲祐
ハ禮を厚ふしていへらく吾儕ハ棄洛陽の者なるが幼稚して父母を亡ひ只一個何某の君に仕へ
居りしが同僚の讒言よ忽よるべなき身とありしよ日頃交り深き友のいへるハ下野國高野の庄
といふ處よ云々といふ人あり足下此人の許に至り身の落着を計り給へと紹介の書翰を遞與し
給へり小子其厚志を歡び聞へ頓て書翰を燧袋よおさめ當國へ下り其人を尋ねんとせしに昨日
不圖刼の爲にひうち袋を奪ハれたりこれ口惜と後追蒐て直に劫を捕らへ懷をかいさぐるよ果
して燧袋あり拿返して這奴を二ツ三ツ打懲らし放ちやりぬ斯て舍りよ返りて後によく〳〵是

と見るゝ其色ハ似たれど全く吾盗れたる物にあらず玆よおぬて大よ駭きその中を点検するに印形あり且券何枚もありて阿家翁の姓名を記したれば始て其麁忽を悔み大切なる紹介の書翰を失ひたればよしやその人を尋ね行て實を以て告るとも世ハ戰國の時にして歓の間者も多かるゝ誰かこれを實として吾儕を留る者あらんや然らんよハ尋ね行とも其詮なし爾とて都へ歸らんとするに小葉うち枯らゝたる退糧の事あれバ腰纏の貯へ爰ゝ盡て進退既ゝ極れりこハ吾身の上の薄命を説のみにゝて貴家の預らざる所なれど吾身ゝ付て又他のうへを想ひめぐらすゝ這ひうち袋を失ひ給ハゞさこそ貴家にも困じ給ハめと今烏しも故意々々持來り返ゝまひらするなりよく中改めて受取給ひねと實しやかゝ語りて燧袋を遞與すゝぞ取次の侍ハ少刻待たせ給へかゝ主翁に其由を稟べしとて奥ゝ入りしが頓て出來りこあたへといふに太郎ハおづ〳〵彼青侍にしたがひ奥ゝ入れば橘内出迎へて客廳に招じ且其人品を見るゝ色白く眼秀頗容貌堂々たる好男子なりけれバ橘内ハ心中十分に渠を愛ずる意生じていへりけるハ昨日不憶須利の爲ゝ這燧袋を奪ハれ奈何ハせんと當惑せ一適よくこそ持來り給ふものかな今取次の者が話ゝ聞ば足下遥々此國へ下りその紹介の書翰さへうゝおひて進退爰ゝ極り給ふと聞くに最悼しく想ひ侍べれり吾儕も原ハ都の生れなり都と聞さへ愛藝けれ一樹の蔭一河の流れも他生の緣と成るものゝ中ゝ語しかゝすハ吾儕が家ゝ逗留して緩々と其人を尋ね靜にその緣故を告なばよしや書翰ハ失ふとも容られざるといふとあらんやと最憑もしく聞ゆるゝぞ太郎ハ計策既ゝ成れりと心中ゝ喜び陽ゝハます〳〵禮を正ゝふしてその厚志の忝よゝをいらへ其日より橘内が家に止りよろづ信やかゝ進止夙に起夜半ゝ寢常住座臥心を用ひて内外のものゝ媚諂ふ程ゝ橘内ハ深くよろこび激人を得たりと暇ある毎ゝハ言葉敵とゝて古今を談ずるに太郎又よく和漢の書ゝ通じ辯舌蕩々として水の下流ゝ付が如く物を書かすれバ草書拙からずかゝりけれバ今ハ太郎なくてハあらざるほどなりけれバ爲祐ハ爲濟たりと一日袖衣が四下ゝひとなき時を物色竊ゝ低言くやうハ汝吾生てハ室を同し死してハ穴を同ふせんと誓ひつるに疾も汝其誓ゝ反き這家の阿翁橘内ゝ身を委ね吾儕が許へハ一言の應もなく此下毛へ下り給ふとハ餘りといへば情あし人情反覆如斯ハ世の中の常とハ預てより覺悟ゝはべれど汝にかざりて然とハあるまじと想ひゝに忽金銀に眼くらみて今の行狀ハ奈何ぞや然ハれ吾儕ハ往日の盟を忘れずもゝやと思ふ心より僞の計を設け這家ゝ入りこみ阿家翁の橘内ハいふも更なり其他奴婢小厠ゝ至るまで阿り諂ひ其心ゝかなわんとする苦心幾許ぞやこれ皆汝ゝずるゝとなりを涙あがらゝ怨ずるゝ袖衣も是と聞て最面なげに斯ハへば何とやらん嘗譯がまゝく思されんが

都に在り〜日兩個が中に關をすゝられ遇をさへも絶々となり〜適逗家の主翁橘内ハ黄金ゑ富たる者なれば主が爲にも成なんかと心よもあらで年闌たる橘内よ〜たがひ艶言を以て渠を誘しかば竟ゑ妾が身を購ゑいたれりこハ妾が計爲課ぬと主かたへ云々のよしを告しらさんと思ふまもなく東國へ誘れ〜ゆへ事の顛末をつぐるによしなく意にてゝろならずも此月日を過せり然るゑ主も亦當國に吟行妾が爲よいくそのの患苦を盡して當家へ入りこゝ給へり言合さねど其志ハ是一ッなり此上ハ良君ハ陽ゑいよ〜仁惠を專らとして内外の者をなづけ妾ハまた陰にありて橘内を計り時を得て渠を斃〜良君と兩個快く樂をとらんを遠にあらじ尺蠖のかゞむハ伸んがためとやらん努怠りて悟られ給ひぞと呟くまぞ奸智ゑたけし太郎爲祐疾も其心を得て打頭き兩人久しく閑談せんハ人の怪〜むべきの第一ありさらば其許もつとめて其計に怠り給ひぞと更ゑ謀し合せ河清を俟ゑけるゝ

武藏坊辨慶物語卷之三終

武藏坊辨慶物語卷之四

第七回

水四郎病床ゑ古を説く
爲祐林下ゑ雙寶を得る

爭かハ想ひ有りとも知らすべきと詠し下毛野國なる室の八島の邊りに中窪の水四郎と云者有り渠ハ若き時より俠氣の者にして戰國鬪爭のあかを絆ともせず人の爲ゑ雇れて列國に漫行〜强をくゞき弱を佐くる性質なりけるが今ハ年老て荆婦を亡ひ當獨の男子を持り其名を吉次年廿歳許ゑ〜て克父ゑ事て孝あり然れども家窮て貧く加旃水四郎ハ先塡より重病ゑ臥〜て起居すら自由ならねバ吉次ハ枝日毎ゑ遠近人ゑ傭れて僅の價を得て父を養ふものから已ハ都て麁食を喰らひ父にハ日頃より好る物を調へて進め其身ハ寒き折も裳短き朽の衣一重を着るのみなれど水四郎ゑハ衣襖何くれとなく寒からぬ程に手當〜つ其孝行等閑ならぬものから人擧て譽ざるハなし斯て一日例のごとく吉次ハ星を戴より起いでゝ父が食事の儲殘かたゝく なしはてゝ夫より市ゑ赴き人ゑ雇れ些の錢を得て黄昏過る頃又父が夕餉の菜ゑもと青物生魚の類を覓て遽しげゑ立歸るを水四郎ハ病床より其爲体を見てやゑ吉次ゑ今島ハいつよりも遲

かりーゐへ奈何ゐせーと案じつるよ能こう返り來りつれ茶も地爐よかけて有れば大方ゐ温も
りてやあらんずらん物ほしくゐなかりしかといふ詞さへ忍みあぐる咳よまぐれて苦げなる形
相を視て遽ーく草鞋脛巾を解棄つゝ這上りて脊な撫さすり父御よ按じ給ひぞ今烏しも雇はれ
ー家ゐ殊よ情深き家にて父上が絆を語り侍りしかゐうゐ最便なからんとて價も極しよりも多
く拿らし給ひそが上よ夕飯さへ喰べて行ねとて鬼の牙見る如き飯よ干鮭そへて賜ひつれゐ推
辞も欠禮よ似たるゆへ翌朝餉の分迄も食置しつれどなかーくよ苦ーき迄よ腹ゐよけれ父御ゐ
家よ獨在てさこそ淋しくおわしけん是憐せ此鮮き魚さへも其家主人の賜ひしなりこれに
て夕飯をとうべ玉へ炙りもやせん烹もやせんとかざる詞の花の香の山茶も出花と一トつまみ
入れたる欠瓦鐺用なき口も病父に貧苦を見せじ知られじと僞る心を水四郎ゐ推量すれど孝心
を無足よせじと打点頭いとよろこべる面持しつ誠よ人に人鬼ゐなーとやらん世の諺も虚しか
らず爾る家あるゐ其許が孝を天ゆ感應じ玉ふなめり孟宗が筍王祥が鯉其例最多かりさわれ我
病ゐ所謂老病よーて若かりし折の腕立力業が今ゐ這身の仇となりつ斯行歩すら自由あらず居
ながら食ふ身を以て義味を食さゐ病を増ん足下ゐ日毎よ身をつかへゞ隨分ともよ魚肉を嗜ま
氣力をつけずゐ勞やせん吾儕が事心念とせずよくくー其身を保養せよと聞て吉次ゐ首を打ふ

り否々吾ゐ年若けれゞ麁食を喰ひ身をつかへばとて懶じとも覺べされど父御ゐ門へも出玉ゐ
ず竟日獨り留守ーー玉へゞさこそ退屈し玉ふらめ酒なりとも飲玉ひて鬱をはらし玉ゐずゞ愈く
病も重りなんこれ烹割してまいらせんと言つゝ下りて流下なる俎板取て庖丁する魚よりも俎
水四郎ゐ吾子が切なる誠心に我腹を斷るゝ思ひはふり落る涙を拂ひやをら病床を膝行いでゝ
吉次が手を取て無理上座に押直せゞ吉次ゐ一切其心を得ず爺御よこゐ何事をかなし給ふと最
不審氣なる面体あるに當時水四郎ゐ吉次に向ひ足下吾儕がごとき匹夫下賤乃者を實の父と思
ひ給ふものから斯ゐ大切にーー給ふ事嬉しとも忝しともなかーくー辞よ盡し難くはべれど寔足下
ゐ我骨肉を分ーー子よあらず疾よも這絆を語り聞すべく思ひつれど愚なる心よゐ若や實を告る
なら隔る心の出もやせんと姑息の愛に溺るゝものから今日までゐ包みたれど今こそ實を告る
ぞかし思ひ出すも甘年久安の頃にや有りけん去りがたきよふ事ありて京師におもむき用事は
てゝ後遽しく故郷へ立歸らんとせーー適俄頃よ火起りて風烈しく猛火煽よ燃あがるよ我儕ゐ頻
りよ道をいそげゞ焔の中をかいくぐり辛ふして三條の邊を過りーがとある朱門の下の溝の中
に二才斗りと思しき兒の轉落て泣叫ぶ形勢今や燒死べう見ゆるよいとおしく其儘拾ひあげた
れど火の靜るを待て其親族をたづね嬰兒を返さん暇なく且我儕も年來子を欲しと思ひ居たる

折なれば是天より授玉ふ子ならめと無端に嬉しく懐よおしいれて其處を去り其夜の舍りよつきて爾々のよしを語り貫ひ乳などしつゝ熟々其兒を見るよ肌の守あり裏をあらたむれゞ花橘と銘を誌せし一木をおさめ且臍の緒の書誌に金賣橘内が一子橘次と記し又某歳某日深栖生女唐立と襁褓のうちより約婚としるしたれば於茲我儕はじめて骸き扱ハ世よ名たゝる金賣橘内ぬしの一子にておはせーか夫と知らねば庸人の子と思ふゆへこれ幸養育ばやと誘しが由緒ある人の子としりて還ざるハ不仁なりさりとて都ハ廿里余えや遠ざかれゞ今更彼處へ戻りて還さんハいよ〳〵以て難義なりこい奈何にしてよかりなんと左さま右さま思ひめぐらーけるが佶と心づきあのまゝにーて打捨をかば燒死べかりしを助たれゞ一旦下野へ誘ひ行折を見合せ都へ登り事の顛末を告て還ーまいらするとも遲かちじと肚裏よ思尋しつそれより行路々々にて貰乳しつゝ下野へ立歸り假よ我子と披露して其名も僅に橘の字を吉よかへしも行末を祝ーて付け〳〵名詮自性さハ然りながら其後ハ都へ至る便なくて思はず數多の年を經たり足下ハ委細をきり給はねば我儕を實の父と心得斯正首々々しく介抱し給ふ程我儕ハあゑ心苦しく侍るかし兎ても角ても老來て行歩さへ心に任せざる世の癈人一日も疾黄泉に赴かんこと願はしき身の今日よりハ藥も飲じ翌にもあれ我儕眼を閉ーなら足下急ぎ都へ登り守袋の名香を證よ親子の名乗せば今日の襁褓ハ翌の錦忽地富貴の身とあるべし斯る富有の人の子を貧苦のうちよあらせしハ僻る心の過失ありと云了て破葛籠の底をかいさぐりて一箇の守袋を拿出ーて與るよぞ吉次ハはじめて吾素性を聞且驚き且喜び水四郎よ向ひ扨ハ我儕ハ噂に聞し金賣橘内が子にてありけるよな縱ひ實父ハ誰にもせよ既よ燒死べかりしを助けられ此年來養育よあづかりし大恩須臾なほひく〻蒼海も却て淺ー後の親を親とする本文爭か疎略になるべきぞと尚正首なる詞よいよ〳〵水四郎ハ感激し斯る孝子を這年月行衛もきれず亡ひし橘内ぬーが心の中爾こそ便なく思しつらめ世よ類なき富家の子と生るゝ果報を持ながら世よも稀なる貧困の吾儕が家よ成長不幸ハこれ皆吾科也ゆるし給へと打咄つきめりがちある親と子が話なかゞへ畔道のきるきと草履で飛々よ歩來るハ其名のみ唐天竺を一ッにせーー伊場燕雀といふ懐醫師勿体作る咳のゝ國手めかして座に着ゞ吉次ハ慌て摩打拂ひまづ此方へと招すれば揉手きつゝ水四郎が邊り近すり寄て容体を聞脉を試ー眉を顰吉次よ向ひ跡の月から見る時ハ顔ばせもよく元氣も增りさハいへ年老給ひたれゞ人參を用ひずんハ頓よ治る事難し彼一藥ハ唐土の品にして價尊くはべるゆへ吾儕もこれを貯へず其許眞實父の病を治したくゞ僅圓金五六兩才覺なして遞與給へ爾あらゞ其極品を選求めて用ひなんと聞く吉次ハ頭を搔き見給ふ如く吾儕が

家窮て貧しく翌の糧だに貯はぶべき力さへなき痩世帯只一枚の金なりとも頓に調へ難き身に五枚六ひらといかでか得んと當惑面に顯るゝに水四郎は聞も敢ず吉次よ心を苦しむる事なかれ嚮よもいふごとく生存命て甲斐なき這身體へ藥は呑ずとも時至りなば本復せん宿打捨てゝきねかしといへど吉次は承ひかず否々子として親の病を見てあど徒に過すべきよきことあれと今父が遷興せし實父の紀念たる守袋のうちより伽羅一株を取り上て伊場が前にさし置てこれは故在りて持傳へはべる花橘といふ世にも稀なる名木にして身よも命よもかへ難き寶なれど時の用には鼻もそぐ父が大事の一命にかゆる寶の有べきや這名木を沽却藥の代よといわせもあへず水四良は聲かけて否其名木は手放しがたし其許が父御の遺物よて父子再會の証となる世よ大切の品なれば日外或人これを知り五十金よ贖んと言ひしを誰にもゆるさゞりしを吾儕が藥の代よ賣らば足下が實父へ義理たゝずと押とゞむれど吉次はきかずよしや實父の紀念でも養父の命を救ふべき藥の價に代あすに誰かこれを不可ありといはん是非とも賣ていなうらせじと義理と孝とに親と子が爭ひはてぬ折りからよ嚮より外面よ物色ふ漢その名木は吾儕が買んと言つゝやをら裏に入るよ吉次は驚き且其人を視るよ是高井屋利九郎といへる者なり這利九郎は些の貯錄あるよ住せ貧しき人に金銀を貸與て其利を貪て世を渡る慳貪邪見の白癡あり從來斯る者の性として慈悲の心露斗もあく倘渠よ金を借りたる人其返すべき日の一日も遅へば大く罵り辱め家の内の調度何よまれ理不尽よ携へ歸り亦官府へ訟へて獄屋に繫がせおどすれど人皆黄金の威にけとされ齒をくひしばれど詮方なし吉次も去る頃渠が金を借りたるがはや其返べき程も過たれば日毎に來りて責はたる事急なりける今烏しも利九郎は爰に來かゝりて一五一十を立聞て彼名木の高價になる物と聞これを安く買落して又利を得んと伎倆て吉次よ向ひて言樣は其身かゝる高金よなるべき物を持ながら我儕が貸たる金を返さゞるは腹惡けれされど我儕は又佛心よて今其身の孝心を聞其名木とやらんを覓め其身望をとげさせんやうは思へど五十金の六十金の爾る高金よは買難し廿金ならんよは買求め其うちよて去頃貸たる五兩の金の元利を引き殘は其身よまいらせんと云つゝ矢庭よ彼名木を掠奪十有余金よ券を添へ吉次が邊へさしおけば吉次はこれを視て再利九郎に向ひ這個名木は故有て身よも命よもかへがたき大切の品なれど父が病の藥を覓めんためあればなりされど五十金にすら賣らざりし物を僅廿金よは賣難し且是を質として廿金を貸給へ後日よ金を調へゞ其名木をば返し給ひてんやといふを聞て利九郎は這奴所詮斯貧しきおかゝて爭か頓よ廿金を調ひ得べきまゝ渠がいふよまかせて其期月の切を待て我物と爲べしと肚裏よ思案しつゝ左

も右もすべげれど質とあらバ凡百日を限て其うちゝ金を調ひ返し給ハすバ這名木ハ我物あり
よく其心を得給ふべしと言すてゝ伽羅と懷ゝ押入て遽〳〵も出去りぬ吉次ハ不憶も拾枚余の
金を得て喜ぶこと限なく頓ゝ其うち五枚を燕雀ゝ遞與せバ燕雀ハ打点頭頻りに其心操を賞ゑ
金を携へて立歸りぬ却説利九郎ハ吉次を賺〳〵て花橘を獲て心中大きゝ喜び急ぎ吾家とさ〳〵て
還らんとせし途にて日頃隔なき友なる蜃樹屋韓三といへる藥商客ゝ遇り利九郎斯と見るより
韓三を呼かけて今日の始末を語り彼花橘をとりいだ〳〵て見せ〳〵むるゝ韓三ハ左視右視て大ゝ
驚きてハ世に稀なる名木なれバ倘望人有て高貴の人に沽らバ百金の物ハ有りぬべけれど拾貫
ゝしても四十金や五十金ゝハなりぬべ〳〵と聞て利九郎ハ踊上て大ゝ歡び吾此名木を宮廿兩の
質ゝとれど迚も受る事でハな〳〵爾あるときハ二三拾の利分を獲ハ目前なり且前祝ゝ一盃を傾
くべ〳〵とて韓三を誘ひ一軒の酒肆に入り更に數盃を傾て韓三ゝ別れ利九郎ハ吾家ゝ立還らん
とせ〳〵が當時忽地十二分の醉を發〳〵一歩ハ高く一歩ハひく〳〵蹌々踉々と〳〵て歩來り〳〵に前程
なる木の下ゝ誰たき捨〳〵野火ありけり爰なん總社村といふ處ゝして林のうちゝ總社明神の社
あり是下毛野國の總社也其前ゝ室の八島あり小島の如くなるもの八ツあり島の大きさ何れも
二間ばかり其島ゝ杉少し生たり此島の廻りの池より水氣烟のごとく立のぼるをさ〳〵て室の八

島の煙といふ又二說ゝ室の八島ハ一所にあらず島と号る處八村俱に都賀郡にて所謂鯉ケ島高
島萩島大川島卒島曲の島沖の島仲の島等也扨てたして水氣か又里の畑か立といへり閑話題
休利九郎ハ今這處へ來て風景うるはしく風そよ〳〵と吹て快にゑ忽木の下ゝやすらひ雲時
醉を醒さばやと爰の芝生に匐伯て遠近を眺め獨笑して居り〳〵が素より多の酒を飲たる事なれ
バいつ眠るともおく轆轤前後も知らず寢入りしが時うつるに從ひ颯と吹風の稍を鳴ら〳〵とら
〳〵と落る雫よく寢入たる利九郎が顏にかゝれバ利九郎ハ現心ゝ手以てはらひ呟と言つゝ
寢返りて更に生躰なかり〳〵が奈何ハしけん懷より花橘の名木の轉び落て焚捨し野火の邊りに
入りたりけん忽ち異香四方に薫じ馥郁としてあたりに充れど利九郎ハなを覺ず鼾の聲ハます
〳〵高く熟睡してぞいたりける話兩頭分爰ゝ又彼橘内が許に寄食せし美佐崎太郎爲祐ハ此
邊りの名所をも見ばやとて麗なる空ようかれ出瓢箪酒ゝ酔を盡〳〵僻哥ゑど詠て獨興にいり
しがはや夕陽西に傾くゝ驚き忽ち立歸らんとして此邊を過しゝ名香の薫り四林に充るを大き
に怪しみ霎時躊躇て四丁を視るゝ頃ハ彌生の末ゝして桃花爛漫と咲亂れたる形粧ゑもいはれ
ざるに爲祐ハ心中ゝ想へらく彼桃花の水源をたづねて仙境ゝ至り〳〵例なきにしもあらず疑ら
くハ此邊りゝ仙女なんどの住給ひて吾を誘ふものゝあらぬかよしや吾儕が才色の張文成に

ハおとるともあはれ十娘五嫂がごとき美人もあらば斧の柄の朽る代迄も歸らじと獨言つゝすゝみ行に只在る樹下よ獨りの漢兒醉臥してありその傍の野火の焚さゝたる邊りよて得あれぬ薫の鼻を穿にぞ太郎ハ不審佇立て 偖 これを視るよ目なれぬ一木の火の邊りよあるよ扨は是なめりと疾も推し遽しく手よ取あげてこれを見るよ紫よたがはず伽羅の一木よゝて而も包める紙よ花橘と云るしありけれバ爲祐ハ視て且驚き且悅び扨は異香の薫じたるは這名木の業なりけり抑此漢奈何よゝて斯る名木を所持せし者ならんと左視右視て躇躇居りけるに利九郎は這時漸々目覺て心付やをら身を起して懷袂を數回かひさぐりて花橘の見へぬに驚き只看ば傍に美佐崎が彼名木を手まさぐりゐる体を見て愕然として這奴他の熟睡せしを覗て懷よせし物を拿るハ必定偸兒よ極れり疾く此方へ遞與せといひさま奪ひとらんとするよ爲祐も大よ怒り汝何者なれバ吾をさして偸兒といふや吾儕ハ爰よ落てありしゆへ拾ひとれるなりと遽しく懷にれさめんとするよ利九郎ハ益々恚り吾首より大切ある二十金といふ何堵を出して買求たるものを奪ひとらんとするゆへ偸兒といひしハ吾過にあらずと强て拿返さんとするよ太郎ハ猶遞與さじと其手首を拂ひ退行んとするを利九郎ハ太郎が袂を確と捕へ取戻さんとするに太郎ハ大よ怒り這奴と言ひさま氷の如き刀引拔き唯一刀に斬殺し後白波を逃失せたり

第八回

一竈の名香骨肉を誤ち
非道の白刀三性を害す

美佐崎爲祐ハ其夜さり家よ還り窃に袖衣よ今烏の大略を語り名香と黃金の二種を見するに袖衣ハこれを聞て少刻沈吟していたりゝが稍有て太郎よ向良君實よ殯跡給ふべき河清れり喜給へといふ太郎ハ一切其心をしらず故を問ふよ袖衣いへらく良君未近頃此家に來り給へば其詳なるを知り給ふまじけれど阿翁橘内ぬゝ常に妾に語給ふよハ原來吾一個の男兒ありしが二才の歳地魚の災のみぎりより行衛しれず然ハれ安部の康親ぬしが考よハ廿歳を過て必環會べしと宣しも僕ふれバとや廿歳斗よなりぬれば若や遠らで實の忤に遭事の有んもはかられず渠よハ世に類なき花橘といふ名香よ臍緒の書附を添れきたれバよゝや顏ハ知ずとも香の薫を證よして名乘遇んと這年月心を付て搜せしかどそれかと思ふ物もあしと且暮歎息し給ひしが扨ハ這香を嗜持ゝ其主か此家の主が實の子たる橘次とやらにてや有んずらん君は計らず這名木を得給ふ上ハ云々斗ひ給ひなバ君を實の子と思わん然んよハ永く這家に足を留給のみならず主橘内世を去ハ良君と妾生涯歡樂を極ん事易かるべし努秘して人よなゝられ給ひそと最こまやかよ說示すよ太郎ハ欣然とゝて大に喜び吾儕詐の計略を以て首尾よく此家よ入りこみ又辭

を巧よして主翁の心よかあふといへども從來久戀の家にあらねばひさしく止る事がたく且其許と兩個が姦通あらはるゝよおひてハ殆く命もあやふきに至らん茲よおゐて予平居よこれのみ心苦しく思ひゐたるよ斯不憶この名木を得る事偏よ天の賜よして月上氷人其許と吾良緣をむすびしめ給ふものなめりと兩個竊よ額を突合して閑談數刻に及ぶを知る人更よおかりける扨も頃ハ既に夏の半よして五月雨降つゞきていとゞ物淋しきよ橘内ハ獨小屋のうちよ在て前程往時を思ひつゞくるよ橘次踪跡なくなりてはや廿年よあまりぬれど今よ於て其在家の知れざるは倘や亡人の數に入りもや〜つる斯吾家富て何くらからねど白銀も黄金も玉も子よ增す寶たへてなしと遠よ懷舊の涙せきあへぬ適何處ともなく名香の薫り芬々と〜て鼻をうがつよ橘内ハ眉を顰め意中よ想らく這薫りハ褒べやうもなき我家よ秘藏せ〜花橘に違わず彼香ハ予家の外に又あるべきいハれなきよ何人かこれを炷らすよやと居室と立いでて其香を尋ねたゞね行よ日外より寄食する彼美佐崎爲祐が部家の邊りなるよあら不審と紙門のすきまより窺ひ見るよ太郎ハ壁に向ひ机の上に香を炷き一心不亂よ念じゐる身体つや〳〵心得がたく橘内ハ徐に紙門をおゝ開きて裏に入る音よ太郎ハ後方を見返て猛よ容を改めこハ家翁の刀禰吾儕よ用事あらんよハあどて左右の人よ命じて召し玉はで自爰よ來給ひしハ何等の示す事ありやと

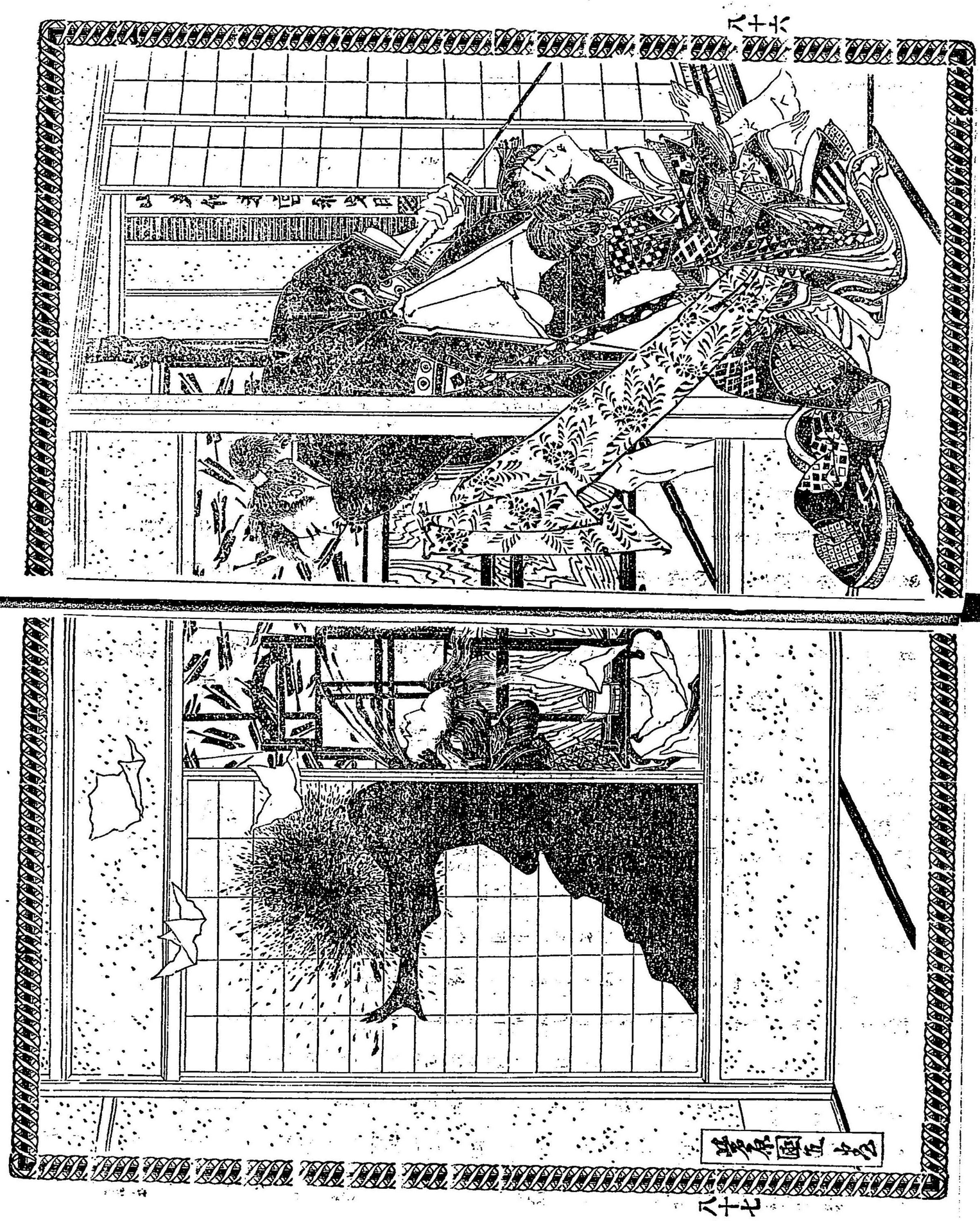
額の汗を押拭ふよ橘内ハ當時太郎に打むかひ繹卒示よハ似たれども汝よ問ふべき事こそあれ吾儕今烏適半日の閑を得て獨小室にと心籠り偶然として行末越方の事を思つゞけ賤の小田卷くりかへし昔と今よおすよしなきを運りよ歎息せ〜折から心覺への名木の薫り最不審小室を立出不覺に爰へ來て視れば正しく香の薫こそ這小室の裏なるよますます不審はれやらねバ目前問諦て疑念をはらすよ如かじと思ひ扨こそ其許を驚せり倘や此香の名と花橘と呼びて是よ爾々の守袋と筒樣〳〵の書付が添へてハあらざりしか抑も汝奈何に〜てこれを持傳へ給ふにや緣故を詳に語りて給ハれかしと問ハれて太郎ハ眉を顰め奈何にも此香の名ハ花橘と呼て吾亡父母の紀念なれバ大事にかけよと乳母何がしがいへり〜ハ今將耳の底よ殘りてはべり嚮よ爰へ來りし時聞へまひらせしごとくまだ頑是なきその頃に父母よわかれてそれよりも成長るまで遠近を呻吟たればうのうちよ守袋も書物も何國へか亡ひしものならめ然ば此一木をば父とも母ともおもほへて戀〜き折ハくゆら〜て僅よ想いを散ずるのみ刀禰ハ又奈何よして此名香の名と花橘と知り給ふハ最不審はべるかしと聞より橘内小膝をすゝめ扨ハ其許ハ這年來尋覓し我子也とばかりにてハ合点ハゆくまじ吾儕元來一個男兒有りしが二才の歳池魚の災よよつて行衛しれ亡尤其當時陰陽博士安部の康親ぬしの〜めーにハ二十歳を過て恙あく環會べ

きよしを宜へり素よりその兒の守り袋の裏よゝ吾手づから認たる臍緒の書付よこれある花橘を添たるこそ慥なる證据なれ 因是 倩 思ふよ吾家池魚の禍のみぎり其許養親の行かゝりなどして焔なかよ救ひとりて吾兒となゝ育あげし後實を以て告ざりしゝ隔る心の出もやせんと故意うれとゝ告ざりしものゝらん其許洛陽の産といふのみならず花橘を所持するからゝ賽かたなき我子の橘次ゝる事明けし康親ぬゝの勘がへ爰に符合する上からゝ何の疑べきあらず と年頃の愁眉を開き急よ袖衣を呼て云々の由を語り親子の緣盡ずゝて今日もからずも恙なく遇見る事の嬉しけれと悅び勇む爲体を視て袖衣ゝ太郎と顏見合心中に笑を含計略の成を歡ぶといへども陽にゝ態驚けるさまをなし頻りに太郎が才色のすぐれたるを稱美するに橘内ゝ一点ばかりも是等の事を知らねばたゞちに吉日良辰をゑらみ家隷們を聚合て一伍一什を語り聞せ此日より太郎をして橘次と名を改めさせ扨云樣今迄ゝ其委事ゝいはざりしが實汝よゝ襁褓のうちより字せし配ありゝゝ當國深栖の領主深栖陵之助光重といふ人の小孃よして其齡ゝ其許と同じく名を唐立と呼つ縹致といひ心緒といひ又類なき處女あれば近きに此由を洛陽よ告遣り頓に呼下して婚姻を取結ばすべゝ喜び給へと始て聞て太郎爲祐其座よありゝふ袖衣と目と目を見合し詞なく默然とゝて居りしが女心よ袖衣ゝ疾懲ゝ兼柳眉を逆立眼を見はり太郎が方を努目て既よ口をひらかんとする行粧あるよ爲祐はやくも其心を推し氣觸を見せじと咳よ打まぎらゝて再び橘内よ向ひ宜ふ處ゝ爾る絆ながら男子三十よして室ありとゝ禮の敬へ吾儕三十よゝ程もあり且騷ゝき世の中なるよ女の身を獨都より呼下さん事道も遙けきよ容易絆よあらじ且婚姻の義ゝ緩々と計り給へと左右に托して推辭ども橘内ゝ敢て赦さず否々爾にあらず唐立既に年も二十歳に余れり這年來其許の爲よ苦節を守り何方へも嫁せず雪操を全ぜゝ適れ貞女の唐立よいつ迄か物を思ねすべき其許が所在の知れし上ゝ少ゝも早く婚姻をとゝのへ疾初孫の顏を視て我們が心を休め侶共よ孝行憑はべるかしと余義なき辭よ爲祐ゝ再び返す詞なく且假よ領諾して其座を退ぬ斯て袖衣ゝ贋橘次の太郎が傍に人なき時を見ていふやう其許奈何なれば往昔の誓を忘れ都女郎の唐立ぬしとやらんと婚姻をなし給ふ御心にや實に男乃心と秋の空と賴がたなき諺も軀よつまされてはべるかゝと或歎き或ゝ怒り物狂はしき形勢よ太郎ゝ殆く諫かねてその脊をかいさすり否吾とても其許を退ていかでか仇女と枕をかゝさんこと思ひもよらずさわれ斯る時宜に及びたる上ゝ强てこれを固辭ば計に計りし謀計の忽水の泡となるべゝ是よよつて我思ふにゝ先其唐立とやらんと婚姻をて阿家翁よ疑をさけて後又東も西も緩に計策を施すべきよ其許要ず仍あき進止をして他人よ悟られ給ひそ乃よかけて我其

許をのけて嘗て外心なしと天地に誓て視せければ袖衣も良心解て斯迄宣ふ辞よも詐りにハあらじと尚行末の事など何くれと相談ぬ斯てより太良ハ愈我身を高ぶらず上を敬ひ下を憐む程よ誰有てこれを怪しむ者なく橘内こそ淑子を獲たりと羨ぬものハなかりける爾る程に橘内ハ過頃太郎が我家に來りし綽の首より花橘の名香の奇特にてはからずも親子の名乗せし事又太郎が才色の勝れたる事迄一五一十書翰にたゝめ家の老僕篤内と云者よ其心を得さし即日京洛へ登せければ陵之助ハ這書を披ちき見て限りあく悦び頓て篤内を留めおきて管待し小娘に斯と告ぢらせ不日下毛へ下すべけれバ其許も其準備あし給へと聞より唐立ハ年頃の願ひの叶ふを喜ぶよつけても又父母に別れて知らぬ國へ赴かんことの哀しく先立ものハ涙あるよ光重ハこれを見て其許平居の志操にも似げなくなどて斯歎給ふぞ總て女ハ家にあるうちハ父母を以て天とし既に嫁するに及んでハ夫と天とすと斯らんうへハ我們が事を念とせず夫橘次ハいふも更あり舅橘内ぬしよく孝を尽し給へ下野ハ吾領地なれバ他國へ赴よふにハあらず吾も遠からず彼地へ下りて婿橘次よも對面せんと旅の調度殘かたあくとゝのえて篤内に又吾家隷を添へて下野へこそ下しける斯て唐立ハ心細くも知らぬ旅路に赴けるが日を經て下毛なる高野の庄にいたりけれバ橘内が悦び大かたあらず日を撰て婚姻を調ばせんと其日を俟つ程に是彼の喜びを演とて遠近の朋友橘内が家よ來訪して門外長者の車轍絶へず去る程よ廣橘次の爲祐ハまづ彼字なる唐立が行粧を闕覦るよ將よ是翠袖雲環更よ人間に有るべやうとも覺へざるよ素より色好なる太郎爲祐忽魂を天外よ飛し吾都に長成て普く文君弄玉を視たれども未斯る美人よあるずはからず吾儕かゝる美婦人を妻にせんこそ願ふてもあき幸なりと意の中よ喜び婚姻の日を算へて待程よ頓て其日よも至りけれバ山海の珍味を尽し洞房花燭の式かたの如く執行て橘次ハ唐立を誘ひて巫山の夢に入るに袖衣ハ此形勢を見て妬きことかぎりなく心悪しとて衾引かつぎて打臥しけれど鬧しきにとりまぎれて訪人もなきよ涙のみはふり落て獨り心をいためける斯て唐立ハ橘次と夫婦中睦しく半年ばかりの光陰をすごせしが思ふにハまして夫が性質の浮薄にして且荒婬なるを見て心の中鬱々として樂まず從來禮義正しき女なれバ夫婦別ありの歌へを守り晝ハ苟且にも夫が邊りなんどへよらず橘内よつかゆる事最正首なり一日太郎ハ獨り我部屋の中に在て源氏伊勢物語あんどの文をくり繙げて其身を光君在五中將に思ひよせて微笑いたりし折柄唐立ハ手づから茶碗を奉て橘次がほとり近くよつて茶を呈するよ橘次ハ斯と見るより讀さしたる文をかいやりこハ勿体なし吾儕いかなる神の惠にて君のごとき美人と枕席を俱よするのみか斯叮嚀なる管待よ預りまひらすること無越洪

福なりせめて其報ひにハ斯こそせめとやとら手を拿て引よせんとするをふり拂ひこハ正なき事し玉ひず君と妾ハ父母のゆる〳〵玉ひ〳〵縁よハはべれど夫婦別あり爭か同席よ進りて戲れかたらば是正よ禽獸よ等〳〵闘雎ハ樂んで淫せず悲で傷らずとか聞えべる君從來漢字をも知り聖賢の典をも粗學び玉へけれバかバかりの事ハ妾がいわずとも玄ろしめ〳〵てありぬべしといはれて太郎ハ應もあく腋の下に冷汗を流〳〵きへもいりたき風情なり左右するうち袖衣ハ唐立があたりに見へぬに這奴又太郎が傍へいもきて共侶に妾が絆を譏でやあらんずらん最前嘘の出〳〵も彼等が処業なめりと怒氣胸中に溢れて遽く太郎が子舍の邊へ行て窺ふに何やらん向ひて玄めやかよ物語して居る爲体を視るより妬きこと限りなくいと荒らかよ紙門を押ひらき裡よ入て兩個を佶と白眼る其許們ハ奈何親々の赦せ〳〵女夫なればとて白晝斯よりうひて在らんハ余りに見苦し女ハ女とも思はるべけれど橘次ぬしが我物顔よ傍を放ち玉ハざるハ奈何ぞやと柳眉を逆畧るに太郎ハ故意そら空吹こハ袖衣前何事をか宣ふぞ生るにハ室を同ふし死てハ竅を同ふするこれを君子の本意といふ襁褓のうちより字して廿歳あまりの年を經て不思議に環會しもの爭疎略よなるべきやさらぬだに糟糠の妻ハ堂をおろさずと聞それにもましたる年來の貞操節義よ酬よハいかバかり大事よかけたりとも其心緒よ比なバ是丸牛

が一毛なりと飫まで媚る一言を聞より袖衣勃然として大ひに憤り焔のごとき息を吻とつきあな怨め〳〵扨ハ是迄海山を誓し事も僞よなよしそれとても増花よ見かへられて何樂しみ東ても西ても捨られし身ハ憖に存命へていとしと思ふ吾夫を他人の花と詠させ余所に見るこそ方見けれ戀の仇たる荒淫婦など安穩よおくべきや咽へ喰ひ付てなと俱よ迷土に誘んといふ音聲さへ皺枯て物狂はしき形相ハ恰も鬼女よ異ならず唐立めがけて飛蒐を太郎ハ慌てゝけへだて刀の柄に手を懸て佶と疾視聲ふりたて父に事る女なれバ最前よりの失禮をもゆるしておけばつけあがる法界悋氣の出傍題戀の敵の吾夫のとハ誰に對〳〵ていふ事ぞ現在妻の目前不正語をいわれてハ家尊の大人へも影護そこ退ずやと敦圉ば唐立こわさ恐ろしさ戰慄逃んとする裙を玄かと引捕らへ逃るとて逃さんや其許ハ委細を知らざれバ這奴が實の橘次にて字せし良人ぞと第一條に思ハれんが這奴ハ實の橘次よあらず妾が洛よ有〳〵日より二世とかいせし夫なりと身の惡さへも口ばしるに太郎今ハ堪へ兼れのれ血迷何事を言とも誰かそれを寔とせんいで息の音を止てくれんと氷のごとき刀を抜只一打と斬蒐れハ殺さバ殺せと立向ふあれ浮雲ととゞむる卻利白刀ハそれて唐立が肩胛深く斬込れ阿呀とばかり仆れ俯す南無三寶と太郎が仰天惜くき女め覺悟せよと袖衣めがけて閃かす電光石火に一刀兩斷惡の報ぞ心地よき人や來ると



爲祐が血刀さげて立あがり一息吻とつく折から此怒劇よ驚きて阿家翁橘内追取刀よ走來りと
みれゞ橘次が血刀提立たる傍に袖衣唐立朱よ染て伏居たるに橘内慌忙てこゝ橘次物にや狂ふ
心をしづめて緣故を詳よ語れと聲かけられ毒を喰ハゞ皿迄と物をもいはず蕊直に斫て蒐れゞ
橘内ハ右よさゝへ左に除二足三足下りしが運の盡よや踏はづし椽より下へのけさまよ仆るゝ
處を疊かけ難なく其處へ斬仆し裳ともて血刀の血押拭ひ白刃をば頓て刀室にハ収さめても納
りがたき此場の時誼如何ハせんと躊躇しが時ハ將に黄昏よ向ゞとして母屋に離れし室なれば
箇程の騷動を知る者絶てなかりけるよぞ太郎ハ四下を見まはして天の與へと打悅び三十六計
走るを上とす視答められぬ其内よと既よ爰を遁れ出んとせし當時天俄に結陰庭の池水動搖す
るよと見へけるが水氣盛に立登り許多の蛙忽然と顯れいで諸聲合して鳴連るよ太郎ハ吃と眼
をとゞめあら不思議や今橘内を殺害なせし鮮血渠が帶したる刀よかゝると覺へしよ池水驟よ
逆立て數万の蛙聲と發すハ扨ハ聞及びつる此家の重寶蛙鳴丸よ極れり抑此刀の威德にハ瑾を
離るゝときハ何國ともなく蛙の聲し又鮮血の穢れよ觸るゝときハ數多の蛙あらハるゝと聞し
に違はぬ此場の形相こハよき物こそ手よいれりと遽しく橘内が帶せし刀を拿く拔放し熟視
て適の名作あれと意中よ喜び手水鉢の水を瀝かけて穢れを清めて刀室におさむるよ蛙も消

うせ天も晴て元の如くなるよ彌〻其奇特を感じ我刀を捨でとれを帶しおどするうちに爰へ人
の來るけはひす打驚で慌しく庭よ飛下り見越の松に攀登忽外方におりたつひまよやれ人殺
しよと闕容子見つけられてハかなわじと北をさして走去るに追人と見へて後方より炬を振照
らし夥の人追蒐來るさまに爲祐ハ益〻心忙水の根岩角の嫌ひなく喘々三里許走りしが見体勞
れ咽喝き足ハ棘よ貫れ殆進退極りて奈何ハせんと佇立よ玆に岐の路ありて南北よわかれ
たり北の方よすゝめバ二荒山へ行道なり南の方よたどれバ武藏へ至る道なり太郎ハ朧なる月
影よすかし視れば一軒の辻堂ありて椽側に一個の大法師最太やかなる拐杖を突立休息居たり
其容貌逞しく只者ならずと見へよける畢竟此法師ハ何等の個にして又怎生物語かあるそハ五
の卷の首に說ん看官讀得て去るべし

武藏坊辨慶物語卷之四終

第九回

英雄を欺て壯士難を避く
鮮血を合して喬梓再會ふ

彼衢堂に臀うちかけて憩たる大の法師を何個なりやといふよ是別人よあらず嚮年叡嶽を出て東國よ錫を飛ばせ普く海内よ英雄豪傑を覓んとせ〜武藏坊辨慶よてぞ有りける當下太郎爲祐ハ辨慶が相貌容易者ならずと視てければ遽しく其邊りよ躊躇〜つ僞ていへりけるハ吾儕ハ京洛がたの退糧なるが身の發跡の爲よ當國よ吟行〜よ計らずも今宵此わたりよて盜賊に出遇彼賊等と鬪しかど彼方ハ大勢這方ハ單身爭かかのふべき漸其透を窺ひて爰迄ハ逃延たれど賊等猶吾を追掛て殺さんとす吾身躰勞れて最早一歩も進ことあたりす師父憐とたれ給ひて吾此急難を救給へらバ廣大無邊の惠なるべしと頓首〜て逃けるにぞ辨慶詐とハ一點知らずこれを聞て打頷き寔や駆鳥懷に入るときハ獵夫も是を獲らずとかや況て人を救ふハ釋氏の好ところなれバ何條余處よ見る法やあらん心易く思ひ給へ吾よきよ計ひてまひらせんと太郎を辻堂の裏にかくし何氣なきさまにて鉦打鳴らし唱名して居りけるよ頓て數多の人各位に續松をふり照らしつゝ爰へ來り道の兩方に別れたるを左視右視て北へや逃し南へや走りけんと異口同音に喬散動き辨慶を見つけて一個の漢兒近くすゝみて怎生法師今爰へ云々の壯佼の來りしならんが孰方の道へ往しぞと問ふ辨慶聞てそハ儘に南の道へ走り往しと覺へしが最早余程時刻もうつりたれば今ハ五六里ほども逃延しならんといふよ彼人々ハ扨こそと遽しく南をさ〜て走去りぬ辨慶這爲体を見て太郎を辻堂の裏より出し又かたへなる稻塚の小蔭にかく〜前のごとく鉦打鳴らし念佛とゐへ從容として居りけるよ少刻ありて以前の人々立戻り嚮にハ心焦燥てよくも展撿ざり〜が道十字街堂の内こそ怪〜けれといふを聽て辨慶ハ嘲笑ひ吾儕ハ出家人なれなどか僞と云て何の益かあらん疑がハしくハ展撿給へといふに彼人々ハ續松をかゝげて辻堂の隈々を探し扨ハ這奴足疾くて遠く遁れつるこそ殘念なれと皆口々に咳きつゝ元來〜方へ引返〜ぬ辨慶跡を見送りて今ハ心易しと太郎と稻塚の蔭より誘ふよ太郎ハ大地に額づきて實に師父が吾再生の恩人なりいつかハ此恩を報じ奉るべき願くハ負笈して朝暮事へまいらし苟其恩に報ひはべりなんよ枉げて免〜給ふべきやといふに辨慶首を左右に打搖り否々墨衣黎藜一鉢の外に貯ふ物おき雲水頭陀の身の上に爭か其許がごとき壯佼を伴ふべきと固く推辭て承諾ず太郎ハいよ〜感激〜さらば責て暫時もといふよそハ東も西も心にまかすべ

し汝且此拐杖を携へ來れといふよ爲祐わこれを常の拐杖なりと思ひ侮りて持上んとするよ重くして手もたゆく漸々双手をかけて持上るを辯慶わ見て打微笑其許わ是を常の拐杖と思ひ給ふらめど爾よあらずと最輕かに手に拿あげ一搖ふるよと見へけるが忽上の方より明晃々たる白刃飜りいで、恰も長刀に異ならず辯慶わこれを水車の如くつかひて見せければ太郎わ再び地上よ低身ー吾儕わ只師父を通例の和尚と耳思ひつるに師父わ寔よこれ天下の英雄豪傑なりと舌を巻て恐れければ辯慶わ打笑ひ又其刃をかくし本の拐杖となしぬ左右するひまよ雞鳴曉を告て東雲近くなりよければ兩個わ辻堂をいで、尚北をさして赴きぬ追前回再説洛陽にわ深栖陵之助光重わ娘唐立を東へ下せし後絶て音耗もなかりければ奈何わせしと案んじ暮らせーが幸ひ都の任も果ければ取るものも取敢ず家隷を將て獨り妻子よ先達て夜と日よ次て下野に下り吾家にも至ちずまづ橘内が家に行て外面より裏の容子を物色よ何やらん混雜の爲体よ見へて家僕東西よ奔走するさま最心得難く慌忙しく裡に入て呼門に頓て一個の侍出來り何方よりぞと問ふ當時陵之助わ姓名を奉じ橘内よ相見せんことを乞ふ彼侍まづ此方へと招じ暫くありて老僕篤内立出て別離の情を演る行粧悵惘として愁をいだける顔色なるに陵之助わきづかわしく其故を問ふに篤内わ最もぶせながら云々の絆より起りて昨宵橘内わじめ僻妻袖衣命

愛唐立ぬーにも深痍を蒙り玉へりと涙ながらよ一五一十を物語るに陵之助わ始終を聞て大きよ驚き遽しく奥に入て見るよ目も當られぬ行粧なれば胸まづふさがりてはふり落る涙をうきはらひつゝ橘内が邊り近くより藥を與へ耳よ口をさしよせて奈何心を慥よもち玉へ陵之助來りーぞといふ聲聞て眼を見ひらきやよ光重ぬし其許に面を合せんわ最面目なく侍るかし吾思慮足らずしてあらぬ者を引入れて唐立どのに操を破らせ剩非業の最期を遂させーも悔て返らぬ我過ゆるーたべと云ふ聲もそや魂消る斷末魔かたへよ伏したる唐立わ父が聲音を聞よりも最細やかよ目をひらき父上かよくてそ尋ね來玉へる妾の死る命わ更々惜ーからねど彼人實の橘次よあらずわ立去操も徒にあらぬ人を夫と思ひ肌身を汚せし事耳が心頭がゞりよ侍るかし後日に實の橘次ぬーよ環曾もー玉わゞ此由傳へて後の世の緣わせめて結でたべ遺言も是限りと跡いひさして酸嗅よ陵之助わ涙を拂ひ再び橘内よむかひ爾るよても不審わ世よ類なき名香を奈何よして獲て橘次と僞り浮雲の富貴を得んと欲せし太郎とやらんが出身を詳に問んも肝心の詮義の種になるべきといふ袖衣さへも綽切れたれわ尋問べき便もなし倩事の爲体を考るよ實の橘次此邊りに徘徊するよ極まれり其郎等兩個死去らば誰か歃の面を認仇を報る者あらんや心を勵給へかしと力をつくる折からよ俄頃よ外面騒しく一個の奴隷走來り陵之助よむ

かひ只今門外より甘許の賤夫主翁橘内君に對面せんと申はべるも〻今日は障事あれば亦重て來れと申せども聞入ず押て對面せんと傍若無人よ奥へ通らんとしはべれば我們強てさゝへ候を左右へ取て投ちらし理不尽よ奥をめがけて踏込候といふ辞のいまだ終らざる所に身よは荒朽の衣をまとへど何となく相貌堂々たる一個の好男子さゝもる僕が腕をねじあげ庭上近く進みくるよ陵之助は彼壯侠が容貌の凡ならざるを視て絆の子細を問んと端近く立出るに彼壯侠も又陵之助を庸人ならずと見るものから捕らへ〻奴僕を撞的投退その儘庭前よ蹲踞り小子は室の八島の畔に住居はべる賤者にて候が這家の主翁橘内君に直々見へて絆の實否を糺ばやと故意〳〵まいりはべるに奴婢們吾儕が斯蹇々しき容なるを怪〻みて紹介もせず重て來るべきよしを宣へど是究て過急の綜よ〻て期を延し難けれ〻強て奥へ通らんとするを拒みしも〻へ止事を得ず斯の行粧其無禮を咎め玉はず相見ずる事を赦し給はゞ小子が悦びこれよ為ぐしと額を土におゝあて〻最慇懃に述るよそ陵之助はこれを聞て打点頃已前の奴僕を吃り懲らして次へたゝせ偖彼壯佼にむかひ吾儕は本當國深栖の者に〻て陵之助光重とよべる者なるが久〻く都よ在て今將歸郷の時に望んでこれなる橘内とは相舅なるをもて我家にも入らで先當家を訪ひしよ思ひきや橘内は昨宵不憶災よかゝり重疵を蒙りて病床よあり其許また我等よ示す事

ありやと聞より壯年太く驚却は橘内君にわはや手疵を蒙り給ふとか而其對人は何處の誰ぞや也辞せわ〻く問ひかくれ〻陵之助應へてりは最長やかなる緣故ありて一朝一夕には説尽〻難し且其許が爰へ來り橘内に遇んといふ其子細より語り給へといへ〻壯士奈何よも御尋ねおくても白はべりなん嚮にも聞へまひらせ〻如く吾儕は室の八島の邊りよ住る中窪の水四郎といふ賤者の子よて吉次と呼る者なるが去る日父水四郎爾々の事より〻て始めて吾素性を明〻守袋と名香を遞與せりと父が藥價よ是非なくも名水を利九郎と云者よ質入せし事よりして其金故よ又父は何者とも知れず其夜さり殺害せられ〻事其首をいへ〻箇樣々々尾を説ば云々と顧末おちもおく物語て却いへらく吾儕斯蹇々しきさまなるのみか證據となるべき名水をさへ失ひたれ〻阿容々々と爰へ來らん事は最影護けれど此曉夢の中よ養父水四郎が寃魂來り吾に告〻は其許が實父橘内君は過頃より東國高野の庄の邊りに住玉へり而も昨霄云々の危難ありて御命殆々危し汝疾立越て息のうちよ對面せよと宣ひ〻かと思へば夢は覺つ肉頻りに動て胸うち騒ぐよとるものも取りあへず尋ね來りしにはや橘内君よは手疵を蒙り玉ふとかや今一足早かりせ〻此禍はあらせじと悲歎よむせびつゝ守袋と臍緒の書付を陵之助が手に遞與せば光重は是を聞て扨は其許が實の橘次にて在りけるかとは知らずして橘内ぬし宮名香を証据

にて太郎とやらんを一條に實の吾子と思ひしより這禍を釀せしなりそを今更に百千般悔たりとも詮術おし何ハともあれ橘内が息あるうちに少しもはやく親子の名乗をさすべきと吉次を誘ひ橘内が枕邊近く立寄て有技有葉を語るひま吉次ハ頓て懷より一箇の小柄を拿出し自腕を擘て流るゝ血汐を橘内が衣服にかゝりし血に瀝ハ看々一箇合する有樣橘内はじめ光重も此爲体を左視右視見覺への有る守といひ賽方なき臍緒の書付もあるそがうへよ血汐の合ふこそ喬梓の驗よゝや名木ハ亡ぶともまがふべやうもあらぬ吾子の橘次今將思ひ合すれば康親主の勘文に火よ因て離れ水よつて命を全ふし廿余年を經て再ひ會環んときに臨て亘禍あるべゝと宣ひしを熟思へば今日只今此枉津日のあらんことを是定れる天命あらんよ歎ハ下愚の至りなりやよ唐立よ實の其許が良人をば只一目視て快寂光淨土へ嫁して蓮の臺の翠帳紅閨夫迎ひする弘誓の舟彼の織女が契さへ年よ一度ハあるものを遇ふを別れのはじめとハかなき夫婦の緣あれ責て息あるそのうちよ三々九度の末期の盃深栖生よく斗らひてよと聞ふるに唐立斯と聞よりも最細やかある音聲よて否々父上最前より實の吾夫橘次ぬし來給ふと聞飛たつ嬉ゝさ遇ぶひらゝたくハ思へども年頃立し操も仇に夫ならぬ人よ肌身を汚し霄々毎の添臥ゝよ更よ變るな變らじと一詞半縛約も今更思へば口惜ゝく左なも右なも女の道はかけたる妾何の顏ばせ有りて橘次ぬゝにまみへはべらん父上も妾が末期よ望みて一箇の願事ありなん何聞居けて給ハるべきやといふを聞て光重ハ何が扨其許が言事聞とゝけてやハあるべきぞ何にまれ此世の思ひでに言給へ鳥の將よ死なんとするとき啼こゑ哀しく人の將に死なんとするとき云事よしとやらん疾々遺言給へかしといそがし立れバ唐立いへらく橘次君未年若おはせば妾が亡後必荆妻を迎へ給ふべゝ幸なるかあ妹床世ハいまだ定る郎人もなく且其心操貞し渠を以て婚を繼せ妾に代らし箕箒をとらせ給ハらば思ひ置こと更よおしと聞て光重眼を丸ばたゝき奈何にも姉の代りよ妹を以て婚をつがす其例おきよ丸もあらず橘次ぬしが心いかにぞやといふに橘次ハ爭か固辭はべるべき爾ハいへ諾がたきハ其の美佐崎とやら天を翔地を潛とも尋ね出して怨を清め父と妻とが修羅の忘執を晴らさずバ人たる者の道よ違り又養父たる水四郎を打て立退曲者ハ顏も知らず名も知らねど僅の金に目を懸れば强盜白挺に極まれり實父の仇を討たりとも養父の恨を返さずバ是又禽獸よひとゝいへんか狙ふ歟ハ兩個よて討ハ已單身よ普く諸國を偏歷し苦よ寢戈を枕にするの患苦を經るとも兩箇の首級を提ずハ再び暫て故里へ返らじものと思ふものから夫婦約束したりとも倘運尽て返討よ討るゝ事もあるならば可惜若木の唐立のみかきこくの程も斗られぬ吾儕よ繫れ床世迄盛の花も見せずして仇に

ちらすが不便に此婚姻ハ承引がたしといへバ光重首を打振り否爾にあらず總て孝子にハ必皇天の恵あり其許本望をとげて立返る日近にあり枉て小娘が死期の願ひにまかせ意にハ適まじけれど妹床世を姉と思ひ夫婦の契をむすんでたべ爾るよても養父水四郎殿とやらを討たる者ハ何者なるや倘手がゝりハあらざる乎と問われて橘次ハ奈何にも其砌曲者が我を目がけて打かけし銑劔爰よあり後の證と拿おきつと最前臂を擘し小柄を出して見せしむるに橘内ハ熟視るよこれ南蠻鉄よ黄金を鏤て橘を彫つけたる目覺へある品なれば愕然としていへらく此小柄ハ吾秘藏の物なるが日外太郎爲祐よ拿らせしが扨ハ水四郎とやらんと殺ゝ金を奪ひし曲者も美佐崎太郎でありけるよと聞より吉次ハ益ます怒り恨重なる太郎爲祐いつかハ思ひゝらせんと齒がみをなして憤りゝが屹と心づきて光重にうち向ひ歎にまぎれて忘れたり吾儕此曉爰へ來らんとする道よて怪ゝげなる大法師と若き侍よ遇へりうの爲体心得がたく思ひしかバ兩個が行粧を倩視るよ彼士の衣服の裳よ鮮血着てありしゆへ愈不審く法師が容貌を見るに年齢ハ廿歳ばかりともおぼしく色白く極めて美僧なりされど眼光するどく一癖あるべき面魂ひありき兩個ハ大く道を急げる面色にて喘々北をさして走さりゝが今將思ひ合すれば若や彼武士が贋橘次の爲祐とやらんよてハ有ざりしかと其相貌ハ云々にて衣服の色ハ箇樣々々と委ゝく物語るよ橘内ハ聞よりそれてそ美佐崎に疑ひあし最前太郎を追止めず立歸ッたる奴僕等が語るを聞ば辻堂よ通夜せし法師の在しゆへ太郎が行衛を問たりゝよ南の方と教ゝゆへ南の道を探せしかど竟よ追止ざりしといへり是彼思ひ合すれバ彼法師も盜賊なんどにて太郎を助けて陸奥へ下りしものと覺へたりと聞て吉次ハ踊あがり倶不戴天の太郎爲祐今よぞ思ひしらさんと拳を握りて怒りける斯て吉次ハ止事を得ず床世と婚姻の事を諾ひけれバ唐立橘内が悅び大かたならず終よ其夜に兩個とも空しくなりけれバ吉次陵之助が愁傷縱んにものなく責て歔の隻と袖衣が死骸を箠楚て無念を散じその骸を野外に捨唐立と橘内とと厚く葬送りして泣々七々の追善供養怠らず營み渾家ハ總て闇夜に燈火をうしなへるが如く愁然としていたりける

第十回

安達原よ橘次路頭よ迷ふ
五條橋よ辨慶良將を認る

爾る程よ陵之助が妻子ハ斯る事の有りとハ神あらぬ身の一点知らず不日下毛よ着にけるが道容子を聞て驚くこと大かたならず床世ハ姉が非命の死を聞より悲歎の涙にむせぶを光重ハ萬般とすかし姉が死期の遺言を物語り忌はてあバ橘次と夫婦と成り行末長く添ひ遂んこそ即姉

が志なれば必推辭べからずと理を尽して言諭しけるにぞ漸々の絆にて床世もこれを諾ひぬ却て說吉次ハ父が忌ども果けれハ吉の文字も元の如く橘ゟ書かへ橘次季春と名を改むるゟ陵之助が許よりも頓て吉日を撰床世を送り越しけれバ絆故なく婚姻を調へ兩家とも此程よりの愁眉を開き悦ぶ事限りなし扨も橘次ハ夫より一日二日を經て光重が家に至り斯る上ハ最早一日も過し難し速ゟ諸國を巡り敵太郎が在處を探し首尾よく討果て立歸るまで留守の間の絆ハよき程ゟ計らひ給ハれかしと最懇ゟ頼み聞ふるゟ光重ハ頓に委細領諾して何が扨跡の事に氣づかわず一日も早く本懷を達ゝ立歸るべゝといふゟ橘次も大ひに悦び此上ハ心易ゝと家に歸り老僕篤内に云々のよしを語り家事を委ぬ床世ゟ暇乞を告るに床世ハ未結婚をとゝのへて幾程もなく夫を長き旅路ゟ赴せんこと最心苦しく哀けれど從來止べきよあらねば疾御本望をと耳言さして跡ハ涙ゟむせ返るを心よはくてかなはじと頓て吉左右知らすべし大事の首途に歎くハ不吉の至ありとさまゝ〳〵言諭し竟ゟ別れを告て長打曲浦の旅の空へぞ赴きける扨も橘次ハ先當國の總社室八島なる總社明神へ參詣し何卒敵爲祐が行衞をしらし給へと一心ゟ念じ茲を出て倩心中に思ふにハ遣奴彼法師と共に北をさして走りたれば定し陸奥へ志せしものならんと奥羽をさして下る道すがら態と人なきかたにわけいり彼首此首に一日二日づゝ足を止ぬ心をつけて太郎が踪跡を搜ゝ求つゝゆきゝくて奥州の安達ケ原ゟさしかゝりしに不圖道を踏違へ行ども行ども人里へ出ず只渺々たる曠野なるゟ只管心焦燥草踏分て馬蹄を栞ゟ道と急ぐ程ゟはや日ハ黄昏ゟ向々とす頃ゝも神無月下旬ゟして霄闇のほのくらきゟ心中頻りゟ悶ゑれ共詮方なく斯る野原ゟて日暮れなバいよゝ〳〵進退極るべし奈何なる野守が家ゟても一夜をあかさばやと遠近をながむるに遙あなたなる一群繁る森の中に火の光り幽ゟ視ゆるゟ扨ハ人家なるべしと意嬉しく辛ふしてたどり付て見るに案に違ず一宇の草庵にして裏にハ讀經の聲聞るゟ扨ハ樂門の引結る庵なりけりと片折戸を開て裏ゟいり最靜やかに呼門に主翁ハ經を讀さゝて出來るを見れば年齡五十あまりなる法師にて庵のさまかゝる鄙ゟハ似げなく清らにして觀世音の像を安置せり橘次ハ當時主僧に向ひ吾儕ハ下野の者なるが今日しも道に踏迷ひ此原中にて日を暮らゝ殆難義に及る者なり何卒一夜の舍りを惠み給ハらば生々世々の恩情に侍るかゝと最慇懃ゟ演るにぞ法師ハ橘次が爲体を左視右視て打頷きそハ定めて心苦しくおもすべゝ見給ふごとくの庵にしてまいらすべやう物もなく夜の衾の薄をだにいとひ給ふ事なくば一夜を明ゝ給へかしと快げに承諾に橘次ハ限りなく喜び何が扨苦しかるべき枉て一夜の宿の恩報敍ゟ預りなんとて草鞋脛巾を解捨て門邊なる流れゟ足を洗ぎ簀子の上にあがるひま

に主人ハ地爐に柴折くへ鑵子の澁尓あたゝめ進むるに橘次ハ其志を謝しつゝ四下を見るに傍なる壁ゟ觀音堂建立寄附の金多寡と施主の姓名を記せし札幾枚も張れり且主が物の言さま這邊の人とも見へぬに橘次ハ法師に向ひ抑爰ハ何とか呼べる処にして其許ハ又當國の人とも見へ玉ハざるゟ何國の産ゟして何の程よりか爰に仕給ふやと問かくるゟ主人答へて爰ハ名ゟ員ふ安達ケ原ゟ此觀音堂ハ昔時八幡太郎義家公奥陽征伐せさせ給ふ頃ほひ人を拿喰ひし鬼嫗の住りし庵の跡也と言傳へてじう物ゟ人を煑たる鍋の欠たるといふ物あれど眞の物とも見へはべらず又昔の黒塚と言ひしハ彼處の松杉を植し小高き丘なん其跡也なんど里人ハ言もてはやせど荒唐説なれかし又吾儕ハ茲よりハ遙けき播摩の國の産れにはべるが故有りて去る歳當國に券縁ーはべりしが不圖此庵室に留り月日を送るうち早晩馴染もふへるに忘たがひ都と違ひて片邑ハ人心正首々々しく吾儕が質扑なる心緒を賞へて信心の徒多く觀音堂を營まんと遠近の信者を促し其代ゟ充せんとて錢財を寄給ふ輩少からずあれ纔せ彼首の壁に貼ーたる榜ゟ記せしハ皆施主の名なり最早其費も大かたハ集りはべりつなど物語り居りしが何思ひけん急ゟ小膝を磴とうち忘れたりく小宵ハ此隣村なる里正どのゝ許ゟて志の日なれば晩餐を給べゟ來ませよと宣たるを忘たりーが腹の淋ーくなりしにて驟に思ひ出したりやゟ旅の御方ゟ其許淋しくおゝさんが霎時が程留主してたびね初更過頃ゟハ戻りあんといひかけてそこくに支度しつ門へ出しが立戻り吾儕が腹の淋ゟつけて其許物欲しくハおわさぬか折悪敷飯ハはべらねど最前貰ひーー餤の庖厨の棚にはべるかしあれなと給べて餓を凌ぎ給へと最懇ゟ言おきて遽しげゟ出行ぬ橘次ハ廣やかある家ゟ宿獨行末越方の繹を思ひつゞけ地爐の端に足ふゝ延して倩案ずるに主の法師齡ハ傾きたれどまだ岩疊ゟ見へ言語の水訥といひ幼稚よりの出家ともおぼへず何さま一癖あるべき法師と見ゆれ加之幸門の庵に似げなく清らなると云も不審など思ひつゞけ居たるうちゟ旅の勞れにや頻りゟ睡魔きざーー吾にもあらで居眠りーが忽庖厨の方ゟ當て瓦落々々といふ音ずるゟ駭き覺て何事にやと紙燭して庖厨ゟいたりて見るに棚より盒轉落てそこらあたり餅とり散らし傍ゟ大きやかなる鼠二三疋四足をちゞめて死ーいたり橘次ハ此形相を視ていとゞ不審はれず彼が喰さしたる餅を見るに其色紫だちて見ゆるに倘や此うちに毒を和したるものにハあらぬかと尚打割て見るに案ゟ違ひず班猫といふ虫有り扨こそ鼠此餅を喰たれゞ斯四足をちゞめて死たるなり危かな吾知らずして喰たらんにゝ忽鼠の如く手足をちゞめ血をはきて死べかりしを誠に神佛の救ひ給へるものなるへし是を以て考るゟ主の法師こそ盜賊ゟて往來の旅客を留め斯餅の中に毒を加へてこれを進めて殺

一其路費を奪ひ取るなるべし彼古の鬼姥にもまさりし法師が姦悪無道察る處最前法師が齋
よとて出行しも渠們が魅賊なんどゝ知らせに行しも計り難し斯うか〳〵と茲に在らんハ薄氷
をふむよりも猶危一といふべきか疾く茲を通れいで、其毒手を避んか否案内知らぬ夜の道よ
りや茲を通るゝとも東西もからぬ這郊原行先も又覺束なゝシヤツ何程の絆やあらん茲に待て
渠が爲樣を視て後よ其計略よ付て又此方よも計策を施すべし係る事よりして歇の手蔓を得る
こともあしといふべからず爾なり爾なりと我に問我に答へて燈火を吹消し壁によりそひ琫く
つろげ息を殺して待居たり少刻ありて人の足音して頓て戸をひらき裡の容子を覗ひ視てやよ
く旅客ハ何處へ往給へる燈火も消たるに喃々旅客よ〳〵と呼ふ聲音響のあるじが聲にハあ
らず橘次ハ扨こそと愈油斷せず尙聲をも立ずいたりしに彼外面より來りし漢兒ハ燈をとも
さんと彼此をかいさぐりて橘次が邊りへ來り不圖手をさし出して頭をさぐり大に驚き飛のく
はしよ地爐の柴はつと燃立火かげよて両人ハはじめて顏見合せ暫時物をも言ざりしが橘次ハ
今外より來りし人と熟視るよ將に是年若き大の法師よゝて然其面体何とやらん目覺へ有る
やうにおぼへしが稍有て佶と睨まへやをれ汝ハさいつ頃高野の庄の邊りにて最怪しげなる退
糧と倶よ走し賊僧め父の仇たる美佐崎が行衛をいへバ其通り隱ゝだてせば赦ゝ難しと敎園荒

く詈るにぞ法師ハ聞て嘲笑ひ靑をさゝて賊といふ汝とそ却て賊よてあらんずらん主人の留守
よ燈を消ゝて待居かちハ問ふに及ばず主人を殺し建立寄附に集ひたる其錢財を奪ん工歟吾殺
人劍爰にあり汝を斬て旅客の後の愁をはらゝんといひさま持たる拐杖を搖動すよと見へける
が忽然とゝて拐杖より白刃翻出長刀に彷彿たるを橘次ハ見るより扨こそ汝出家に似氣なく斯
る刃物を携ふこそ强盜剪脛に疑ひあゝ太郎が在處を疾ぬかせ「在所などゝハ何の浪言無用の
舌を動さんより其息の音を止てくれんと擊て蒐れば拔合一上一下虛々實々奮擊突戰時をうつ
せど更に勝負ハつかざりける浩る處へ主の法師ハ立歸り斯と見るより慌忙やよ待給へ兩個
ともこハ何絆の爭よや暫待ねとゝむれども血氣よはやる龍虎の勢ひ耳よもかけず挑戰ふ主
此法師ハもてあまし傍よ有合ふ筵屏風を打合ふ白刃の眞中へ礑と返して身をかせよ停れバ兩
個ハ遽りよ氣を焦燥「其處退給へあるじの法師「怪我し給ひそ畔作ぬ一這奴ハ正しく盜賊よ
て燈火を消して其許を待ところゝて物を取らんとする大膽不敵の僻者あれ「ヤア盜賊等とハ舌
長なれ爾云汝が盜賊よて美佐崎太郎が同類ならん這奴が在家を疾いへを勢猛詈るよ主人の
法師ハ尙も動かず奈何旅客心をゝづめて聞給へ此法師ハ全く爾る類の怪しき人よあらず强盜
剪脛と思ひ違へて跡で後悔ス給ふなと辭を和て說諭と橘次ハ尙も疑ひ解ず主の法師を礑と努

目汝も賊の部下よて餅の中へ毒を和ー既よ吾僧を殺さんと計りーかども運強く鼠の喰て死ー
たる故汝が毒手わまぬかれたり兩個ともよ覺悟せよと聞て主人わ眉を顰めそわ何といふ最前
の餅の中に毒ありとか扨わ此奴めが吾僧を殺ー寄進の金を奪ん爲の計略にてありけるかと
さとる折から山の端よはやさし登る月代よありく見ゆる庭の隈梢よ忍て怪しの人影橘次わ
すかさず礫の銚剣阿呀と叫で梢より飛び居る一個の曲者逃んとすると彼法師襟髪掴で曳よす
れば大力無双よまめつけられ眼飛出死たりける當時主の法師兩個にむかひ先迭に白刃をおさ
めて吾云事を聞給へ最前の餅に毒の有たれば旅人わ吾僧わ賊なりとして燈火を消して俟給へ
わ和子わ又旅人を却て賊を怪む更よ理なきよあらねど彼餅よ毒ありとわ吾僧も絶て是を知ら
ず知らざるゆへに其許よすゝめぬ素彼餅わそれなる黒塚の杉六と呼べる惡棍が畫の程携へ來
て吾よ與へしものなり這奴わ此邊りに名たゝる無賴子にして平居袁彦道をのゝ好める白痴な
りしがいつよ變りて亡父の忌日なれわとて吾よ與へしゆへ扨も殊勝なる事哉性わ善なりと流
石虎狼の心よも親の忌日を思ひ出て出家に物を與ふるとわ鬼の眼よ涙とやらん世の諺もこゝ
なりと心の中よ感ぜしかど物ほしくもあらざりーも庖厨の棚よあげて置つ扨わ這奴餅の
なかに毒をいれ吾僧を殺して寄進の金を奪ん伎倆であり世るよな笑の中に刃を磨實よ怖ろし
き世の中なり嚮よも聞へまいらせし如く吾僧わも播州書寫山の麓よて畊作と呼べる農夫な
りしが故有りて剃髪し國々の靈場を順拜し去年より爰よ住りしなり又此法師わ吾姪の子なが
ら忝おくも中の關白道隆卿の後胤熊野の別當辨正ぬーの一人子にて書寫山に成長叡山よ勤學
せし西塔の武藏坊辨慶といへる豪傑にでおわすなり甲夜にはからず隣邑へ行んとしたる其道
よて辨慶ぬしに環會先へ庵りへ歸せしを其許わ賊と思ひ違へて絆の爰よ及びしなりと誠心詞
よ現るれば橘次わ少しく疑念をはらせど猶辨慶よ打向ひ其辭に僞もあるまじけれど日外下
野にて伴ひ行し侍こう俱不戴天の我仇なり其行衞をわ知てあらん疾語てよと聞ふるに辨慶暫
時考へて爾いえるれば此方よも覺へあり日外野州に飛錫の折から高野の庄の辻堂に少刻憩ひ
て在ける處へ年最若き武士の途よて賊よ遇りーも救ひくれよと余義なく賴み不便よ思ひ辻
堂よ隱ーて危難を救ひーうへ權程わ伴ひしが渠わ越後の國のかたへまかるとて淺香山のこ
あたよて互に袂をわかちたり奈何よも其名わ美佐崎とか呼びし扨わ這奴其こざり盜賊よ過ふ
とは詐よて其許が父を殺害して捕人の者よ取つめられ詮方なくて吾を欺き危窮の難を逃れし
ものか知らぬ事とわ言ながら惡を佐て姑くも孝子の心を苦めーわ我大ひなる過なり而其許が
父といふわ何國の何人よて何とか呼れ又奈何ある緣故よて美佐崎とやらんに討れ給ひしやと

問かけられて季春い又思ひ出ず露時雨ふりにも綽の顚末を詳よ告て三條の金商人橘内が子に橘次と呼るゝ者なりと聞て辨慶も大きよ驚き扨い噂よ聞し橘内ぬしの子なりしかよ〜〜此うへい其許よ一臂の力を添へ太郎を討すい我も又江湖上豪傑に笑はれなん義を見てせざるい勇なし心易かれ橘次ぬしと最憑もしく聞ふるよ橘次い深く感伏し吾眼ありながら英雄を認らず最前よりの不禮の段々もる〜給へとありければ辨慶も何か扨苦かるべきとて此夜い夜とも に文武を談じぬ斯て其翌の日辨慶い橘次に向ひ爲祐い越後へとて行たれば今よりして共侶に越中越後の間を搜し夫より都へ赴く〜這奴もと都の者せ〜聞ば燈臺下闇ら〜と諺の如く都よ忍び居んもえれず今諸國よ群盜蜂起し出羽にい由利の太郎信濃にい權の太郎越前よい麻生の松若江州よい摺針太郎都よい三條の右衛門王生の小猿など名たゝる盜賊の大將軍各寨を搆へ部下を從へ郡縣を掠め黃白財寶を奪ひ取ることを袋の物を取るに異からず太郎爲祐身のよるべなきまゝよ竟にい渠等が群に入らんい必定あればなか〜其許單騎よて向ひ給へんい鷄卵を以て大石に當るにひとし吾拙しと雖幸まゝて山を拔鼎をあぐるの力あり且叡山よあり〜日深山幽谷よ入て十八般の武藝悉く其温奥を自得せり我助太刀をなすからい百万騎の强敵たりとも恐るゝよ足らずとそれより橘次と兄弟の義を結び聯作法師よ別れを告て越後路へ赴ぬ

却説辨慶橘次い越後路より加賀へ赴行て山城よ至る其道すがら專ら美佐崎が行衛を探し求るといへども更よ其踪跡を知らず茲よおゐて辨慶い佶と一箇の計を案じ橘次よ吽くい這奴奪ひ取たる蛙鳴丸を帶しおらんい必定なれば吾云々の打扮して夜毎よ都五條の橋に至り千人斬と準へて武士と見れば引捕らへ其帶劍を改めなば敵と搜るの捷徑ならんかといふに橘次も尤なり我も竊にその邊りを徘徊して倘や讐よ出會ば本望を達せんこと只此一舉にありと兩個ゑめ〜合せてうれより辨慶い頭巾を以て面をつゝみ例の刀も四尺柄も四尺の大薙刀とも見まがふばかりの打物を小腋よかいこみ黃昏すぐる頃よりも五條の橋に至り俟程よ橘次も精悍く打扮て其邊りを彷徨り人や來るかと窺ふうち武士とさへ見る時い矢庭よ捕らへて刀を奪ひ拔放〜てあらたむれどりの打扮と勇氣に怖れ鼠舞して逃るもあり又拔合せ二三合戰ひ遂にかないずして刀を捨て走るもありされど辨慶素より〜て刀よ血ぬるを好まぬものから逃るものを強て追いず落たる刀を改むれどそれぞと思ふものもなく既に九百九十九人よこそい及びける頃い水無月十七日辨慶橘次い五條の天神よ詣何卒敵の行衛をゑらしめ給へと丹誠を懲らして祈念し扨例の如く五條の橋よ立出て風冷じく更る夜に通る人をぞ待居たり既よその夜も明がたの山頭の鐘もすさまの雲の光り輝く月の夜はきたる鎧い黑皮の威よおどす大鎧革摺長よ

着なしつゝ從來望む大薙刀眞中とつて打かつぎゆらり〳〵と出たる行粧奈何ある天魔鬼神か
りとも面をひくべきやうあらじと我身ながらも物賴もゝく佇立適遙よ笛の聲するよゞ辨慶
耳を聳面白や小夜更て天神へ參る人のふく笛ハ法師やらん男やらん疾く來よかゝと橋板を
とゞろ〳〵と踏あらし今や來ると俟居たり畢竟這笛を吹く者ハ誰ぞそハ次の巻の首に說ん

武藏坊辨慶物語巻之五終

武藏坊辨慶物語巻之六

第十一回

袂を別て豪僧西國より赴く
涙を瀝で孝女寃家より仕ふ

命ハ塵芥より輕く義ハ金鉄よりも重〳〵と扨も武藏坊辨慶ハ義によつて橘次季春を扶けそれが
父の仇たる美佐崎の太郎爲祐を討さゞやと洛五條の橋よおゐて千人斬をあゝ蛙鳴丸の太刀を
たづぬるといへども是ぞとおもふ刀もなくすでに其數ハ九百九十九人にたゝよび今一人ぞと明
がたちかく待をりからはるかよ笛の音葉調ときこゆるよさてこそと例の柄も四尺刄も四尺の
大薙刀をもて橋板をつきあらし今やおそしと待かけたり笛の音漸々よちかづきてこゝへ來る
者を何人なりやと月かげにすかしみれバ白き薄衣をかつぎたかやかなる足駄をはき手よ一管
の笛をたゞさへ悠々とあゆみ來るよ女子にやと倩〻るに左ハなくて虎の皮の尻鞘かけたる太
刀をはきたりさてハ平家の青公家ばらの公達が漫行よやあらんずらんいで一刧しおびやかし
てくれんずと長刀を水車のごとくまわして擊てかゝるに彼小冠者ハ自若として驚けるけしき
もなく身をひらいてとび上るとみへしが忽欄干の上にとゞまり猶笛をふきゐたり辨慶これを

みてよくさ小冠者が進退かなとまたもや長刀をりなをしたゞ一薙よおぎ仆さんとするときぶたゝびおごんで下をくゞり手ばやく笛を納め小太刀を引ぬき辨慶よ切てかゝるこあたもすかさず長刀よてこれを丁とうけとめ千變万化に戰へども彼小冠者ハたゞこれ蝶鳥のごとく上をはらへば下をくゞり下をきれバとび上り前にあるがとすれバ忽然として後にあらハれ流石の辨慶あーらひかね西度路よなつて見もる所を小冠者得たりとちかよつて長刀てうと打おとせゞ南無三寶ととらんとする諸臑けられて頭轉撞ゑりがみつかんでおーふせて聲あらゝげ此ほど五條の橋よおいて怪しき打扮をなす道行人をゆやます曲者ありときゝて我わざ〳〵きたりてうかゞひみるにきゝしよ違はぬ汝が進止抑汝ハ何者なれバ斯往來のさまたげをなす白波緑林のたぐひならん梁上よも君子ありと彼陳寔が辞のごとく汝もさだめしむかしハ由緒ある人の子なるんよ己が心のまゞひより斯路傍よあつて斬取强盜をなすをとだれたる世のならひとハいひながら最あさまーさ活業ならずや吾今汝が首を斬て道ゆく人の後のうれひをはらハんとハおもへども汝が力量速伎中々尋常の者にあらざれば吾不覺よ及ぶ加ふるにきのびず疾々うの來歴をかたるべしと威風凜々として水のおがるゝごとく述玉ふよ辨慶心中よ大きよおどろきこれ寔よ只者ならぬよ中より辞をいだしていへらく我ハかならず罪なき人をころし貯へもてる黄白調度を奪ふ放馬賊山客なんどのたぐひにあらず然れば千人ぎりとハ号れどいまだ一人をだもころしたるとなーたゞ帶劍なす者をとらへてうれが刄をあらたむるのみ是ハこれふかき縁故あつて一朝一夕にかたりつくしがたし我おそらく人よ後れをとりたるとなさに君ハまだ總角よわたらせ玉ひながら斯出沒自在よして劍法よ熟練ー玉ふとさらよ人間業にあらず抑何人の公達にまーますかあはれ御名をあかさせ給へかしその後愚僧が俗姓をも名乗きかせまいらせんときくより小冠者打点頭今ハ何をかつゝまん實我こそハ左馬頭源の義朝が八男鞍馬において成長し源九郎義經なりと名のり玉ふに辨慶きくよりふたゝびおどろきさてハ噂よきゝつる御曹司義經公にてましませーかさればこそ辨慶つれがおよばざりーも理あり我とハ大職冠鎌足公の末孫熊野の別當辨正が庶子幼名生佛丸今改て西塔の武藏坊辨慶とヤハ我ことなりときゝ給ふより義經公も辨慶を引おこしその縁故をたづね給ふに辨慶とび去さつて蹲踞き我儕いとけなきをとりから痴鈍不具よてありし身の母の情妻の一念よ年頃の沈疴終に本復なーりのバよすでよ出家せーー首尾ハ箇様々々又此度此所において千人ぎりをなす子細といふハ爾々なりと二荒山の麓にて惡棍ときらず美佐崎の太郎爲祐をかくまいしとより〜て安達がはらの一ッ家よおいてはじめて橘次よ環合ひ仇とあやしめられしを晰作法師橋内そで衣

から立陵之助等がとゝまで遺もなく物がたるに義經公も頻に辨慶が義心を感激まゝ〳〵ますよ辨慶ふたゝび義經公にむかひ我往昔書寫山において夢の中よ一人の老僧つげてのたまゝく汝よまさる者あらばうれにあたがひ順を扶け逆をうち蓋世の功を立なばなか〳〵に佛よつかへ經をよみ作善供養に勝るべゝとおしへ給ひし言の葉に露たがわざる今日今宵何とぞ御家臣のはしにも居らゝめ給へらべよゝや命ハ鯢鯨の腮よさらゝ苦に寢戈をまくらにするとても仁義禮智信忠孝の七ツ道具を脊よおひて那里までも御倶なし軍よりいでゝ軍よいふ月よ名たゝる武藏坊と末の世までもくもりあき名を万天よかゞやかさんこそたゞ願ひしうこそはべるかしとおもひこんだる形相よ義經いよいよ感激まし〳〵實よや万卒ハ得やすく一將ハ得がたしと苟も吾平家の强欲をほろぼし父のうらみをはらさんとするとりから辨慶ほどの勇士を得んを悅び何かゐれにあかんいで主從の盃せんさハいへゝハ人家はなれし所といひ且更たけたれば九献の用意もなきものから事をがなと見まわゝ給ふにはや山の端よ入月のかげれいろうと辨慶が今とりおとせし長刀の四尺にあまる刄のかたようつるかげを右視左視それよおほけなきたとへながら月のをを盃のかげとも詠むまた長刀ハ偃月の形よにたり彼是因あきよあらねバ三世のちぎり主從の義を金鉄とむすぶある誓ひよくめるさかづきにハ是よまゝたるものゆらしと長刀おつとり酒のむごとく右左の手にてぐつとほしいで辨慶よまひらせんときひて武藏ハ大きよ喜びうやゝ〳〵くおしいたゞきおおしく酒をのむごとくさも勇くほしよけるかゝる折から橋のほとりの木立の中よ聲あつて源氏の殘黨義朝のすれがたみ牛若丸それが謀反に組あすなる辨慶とやらんいふ僻法師いで六はらへ注進するまつておれよと高やかよよばわりてかけいでんとする者あるよ兩人ハ愕然とおどろき頭をめぐらゝて是をみるに年の齡二十三四色白く目秀で適の豪傑身にハ腹まきしてあがき二こしを佩たりこれ別人よあらず橘次季春にてありければほほハみて眼を悲らし其許などてさる腹じろきとを宣ふや素より其許ハ平家ようらみもなく源氏よ恩もなき身ながら人のうれひをもて身の榮花をばからんとハ日頃よりあげあき心かなよしさもあらばあれ今までのよしみも今日かぎりなりいで辨慶が忠義の手はじめ此長刀の殺人刀引導わたしてくれんずと敦圍あらくすでに長刀をねつとりのべんとするより橘次ハ慌忙ておしとゞめ師兄かならずはやまり給ふことあかれ吾儕今のごとくいへるハ全くあしき心もていへるよ非ず今平氏さのんよして草も木もなびき去たがふあかなるよ更たけ人定りて外よきく人なゝといふとも人の耳ハ壁よ付石のものいふ世の中にかゝる道べたよおゐて苟も御曹司の御姓名をあかゝ大義を相譚給ふといと危しとおもふものから心よもあら

ぬ唐突の辞を發して君を諷諫ーたてまつりーと小子が寸志に候かし今これなる辨慶がものがたりよて委細ハきこーめしさふらひし三條の橘次季春と申薄命の者よ候なり此後とも何卒御目お給ハれかしと身を謙りてのべよけれバ義經公なゝめあらずよろこばせ給ひさてハ金賣橘次とハ其許がことよてありけるか父橘内をうたれさこそ無念にあらめ此身よつまされ一入汝が心中察ー入と數行の涙よくれ給ひぬ左右するまにすでに鷄明曉を報じ東の山の端ゑらみわたらんとするにおどろかされ兩人ハ御曹司を誘ひて隱家へこそ立還りぬさてもその次の日よいたりて辨慶ハ橘次よ對ひていふやう我々斯まで心をつくせど太郎が踪跡ゑれざるからハもはや這奴幾内よハおるべからず今一度陸奥を詮義せんこそ肝要なり幸ひなるかな義經公ふたゝび奥州へ下行し給ハんとの御底意あれば其許御曹司を守護なしまゐらし共侶よ陸奥へくだり給ハゞ歟の行衛さゝいだす便もあらんか吾ハ今よりあまねく西の國々を偏歷ー何ぞきよもあれ義經公旗あげー給ふときくとさハ第一番にはせ付て高名手がらをあらはさんとおもひハなり左ハあれど其許も義經公も美佐崎が面を見しり給ハざるこそ難義あれと頓て筆墨をとりいだし太郎爲祐が面体恰好を畫ようつし是を橘次よさづくるに義經公も憐し感激しつたへきく堯ハ夢よ傅說をみてこれを姿繪にうつさーめて終よその人を得たりとうれハ賢人是ハ聲歟善惡邪正とかゐれども姿繪によつて橘次が本意を達せんと是偏よ辨慶が勵ーなりと宣ふに橘次ハ手にとりあげて西視東視て大きよよろこび頓てこれを旅行李の裏よおさめける斯りけるほどよ辨慶ハ義經公よ橘次がことをたのみきこへふたゝび洛の隱家を立て浪花へくだり西國さして赴きければ橘次ハ義經公の御供なし奥州へこそいそぎける○話分兩頭こゝよ三位中將重衡卿に兩個の愛妾おわしぬ一人を雄蝶の前となづけ五條大納言邦綱卿の御娘なりまた一人を雌蝶の前とよべり二人とも翠黛紅顏の粧ひ花より猶芳ーく玉の簪照月のすがたあたりも輝くばかりなれば重衡卿の寵愛かぎりなし此雌蝶の前といへるハ武藏の國の住人澁谷莊司重國といふ源氏の侍の娘ありしが斯平家盛んに源家ハ日よまし衰ふる世の中なれバ父たる莊司重國ハ名をうづみ跡をかくしうこよこゝよと吟呻ーが一歲都堀川のほとりある逆旅華屋義平といふ者の許にて病床よ臥して路費よハつきはてとやせんかくやと案じわづらひけれバ雌蝶の前此頃の名ハいまだ蝴蝶とよびーが精悍く父が枕邊をはなれず介抱等閑ならざりしかど年頃の辛苦といひ旅のつかれよ病ハ日よまーおもり價ひ尊き藥をもちひざれバ所詮本復せんことかなひがたしと醫者のいふに胡蝶ハ孝心ふかき者なれバ此由をきゝて此身を遊女よあり共も賣て父がくすりの代を調へんと窮に主義平よ云々のことと相語ふに義平ハきゝて胡蝶が

孝心のほどを感じ左までの金よもあらざるべきよかゝる孝女を川竹のながれよあづませんもいと不便なり此娘美目かたちうるわしく人品も賤〜からぬに同じくならば堂上方なんどへ宮づかへさせばやと其よしを胡蝶よもかたりきかするに胡蝶はあるじが情けある詞よいとゞうれしくもし君がた情よて肌身をけがさず由緒ある人の家に宮づかへしはべるをならんよりたらはぬ水仕の業ものかゝ生々世々の御鴻恩よはべるかしとなみだと倶よ賴みけるにぞ主人はもつぱら遠近をはせあるきてその事をかたらひけるに一日重衡卿北野へ參籠の歸路此ほとりを通らせ給ひて不圖胡蝶がすがたを見そめ近習の靑侍として何者の女なりやと問せ給ふに此ほどよりこゝの逆旅よ逗留してある所の浪人の娘なりと申に然らば黃金をあたへて吾嬖妾にせんと私よ逆旅の主人をよびて云々のことをかたらひたまふよ義平大きによろこび胡蝶が孝心の志操のことなんどをきこへあげ頓よ承引ければ重衡卿も御よろこび斜ならずやがて御歸館まし〳〵ける義平は胡蝶を一室よまねき此ことをかたりけるよ胡蝶は始終をきゝて心中におもへらくわが父庄司ぬしは原源氏なればよしや今斯窶々しくなりたまふとも娘を平家の嬖女よはすべからずさりとて妾今これをいなまばいつか黃金を得て父が病の本復する期あるべきちかきたとへは常磐御前は三人の子の命を助んとて現在の仇なる清盛公の側妾となり貞女を捨て、貞女を立給ひたる例もあり彼は子の爲よ小夜衣の夫をかさね妾は親のためよ此身をすて、寃家の平氏に仕ふるとも豈常磐御前よ恥ざるべきや然はいへ此よしを白地よ父にかたらばよも快くはもるすまじ密由緒ある人の家にしばしがほど宮づかへすと詐りてその後左も右もまた詮術のあるべしと心一つにおもひさだめ主人義平よ打對ひてその淺からぬ志しのほどを喜びきこへ疾重衡卿の許にやりてよと言に義平は打點頭やがてその次の日胡蝶の髮をとりあげさせ重衡卿の館へいでゆきかくと言ひ入るゝに重衡卿よろこばせたまひやがて約束のごとく黃金若干を賜ひければ胡蝶は是を逢屋義平よ遞與していふやう妾かならず〜もとゝにあるとをば父よつげ給ふな只西國がたのよーある人よ倡れてくだりぬと跡よてつげて給はれとくれ〳〵もたのみきこへければ義平はおみだおがらその心を得て黃金を携へかへり胡蝶に代て庄司が病をみとり價ひとゑらはず妙藥を用ひれど死生命ありと庄司は竟よはかなくなりにければ義平はあく〳〵野邊送りのことなどかたのごとく營ゝはてゝ後よ此よしを胡蝶がもとへいひおくりけるにぞ胡蝶は天にあくがれ地にかなーみけれど詮方なく跡懇よ弔ひ猶肉緣の伯父たる播磨の國書寫山の學頭觀慶阿闍梨が辨慶の師よして庄司重國が兄也もとへ消息よ黃金どうへて云々のよしをつげこ〜また彼むぐらやへも黃金卷絹くさ〳〵の物を贈りて父が永々

介抱に遇ひし恵みをむくひける葎屋義平が話此下よあしかくて胡蝶ハ重衡卿の嬖妾となり〜より幾程もなく共寵愛他よこえて名も雄蝶の前にくらべて雌蝶の前とあらため給へどその寵遇雄蝶のまへが上よありて六宮の粉黛もこれが爲よ顔色おきがごとくあるよぞ雄蝶のまへハ心の中に這奴素性賤しき身をもつて我と肩をならべ諸人の尊敬よあふこそ易からねと人をれず嫉妬の胸を焦し給ひけるこう方見けれかくてほどなく雄蝶雌蝶のふたりハけ〜きべみて酢物を好ませ給ふに徑よ典藥の頭を召〜て診脈をさせ玉へばいづれもは懐妊に相違なしとヤにぞ重衡卿の御喜びなゝめならずすでに八月に及びけれバ何卒男子平産あるやうにと佛神へ禱り諸寺諸山へ加持祈禱奉幣のたいのりあるが中よも雌蝶のまへハ書寫山へ文よて爾々のよ〜をきこへつゝがあく安産なすやうにといひつかハしければ觀慶阿闍梨ハ一トかたならぬ姪がたのゝなれバ一山へかくとふれ流し衆徒を集め檀をきづき三七日が間安産のいのりを修行し給ひける雄蝶のまへのかたにハ此ことをつたへきゝやがて御父大納言のもとへ此よしをいひ送りければ邦綱卿もきこし召し倘吾娘公達をもうくるともあらば我とても外戚の威をふるハんものと有德の權者をえらみけるに叡山西塔の豪雲僧都ときこへしハ此頃双なき聖ありといひもてはやすよ大納言ハ頓よまねきよせて何卒吾娘雄蝶のまへ男子平産あすやうよ變成男子の法を修〜て玉ハるべしとたのみける此豪雲といへるハその心ざまひがみて陽にハいかにも尊氣よ見すれど底意よハ欲心ふかく破戒無慙の惡僧なりけれバ大きによろこび大納言の膝下よすりより聲をひくうしていハらく奈何よものたまふごとく吾大威德明王の法を修しなバ變成男子うたがひあしといへどももし生れ玉ふ時刻雌蝶のまへに後れ玉ひて彼方の和子も男子ありせば當時ことよ寵愛ふかき雌蝶のまへのことなれバよ〜や下借腹にもせよ兄君よ立玉ハんハ必定せりさからんよハ雄蝶のまへの産玉へる若君ハ弟君と稱せられ自からその勢ひもうすかるべ〜然あらんよハ君の御心底さこそ本意なくおぼ〜めすならんかこれのみ愚僧が法力にも及ばざる所なりと心ありげに申ければ大納言ハ沈吟〜ておわせしが漸く首をもたげ貴僧の宣ふ所一々吾肺肝をさすがごとしこハいかにしてよかるべき願くハ廣大の隣みをたれて吾們親子が情願のゝなふべき術をおしへ玉へかゝ〜もし吾娘男子を平産するともあらば貴僧へハ莫大の賞金をまいらせんといひければ豪雲莞爾と打笑みなをも邦綱卿の御みゝよ口をよせ何ごとやらん〜ばらくさゝやきけるが邦綱卿ハ横手をうつて大ひに悅び誠よ此計奇妙ありとやがて當座の布施物として沙金許多賜り豪雲をバ叡山へ還し玉ひぬ

第十二回

流言を信じて重衡愛妾を疎む
無常を觀じて重元佛門に入る

寔や市に虎ありて聞き三度にしてはじめて信ずとたゞ恐れても恐るべきは流言の一ッなり此頃誰いふともなく洛中に噂しけるは雌蝶のまへは何卒公達をまうけんと賤しき者どもを奥に引入是と姦通し其男血氣衰ふるときは絆のもれんをおそれて竊に是を刺ころしなどするをその數をしらずされば此度身どもれる御胤も全く中將重衡卿の御子にはあるべからずよしなき下司下郎の種なり　加之　内縁ある　書寫山の觀慶阿闍梨をたのみ雄蝶のまへが懐姙の實の御胤を呪詛調伏して絶命の法を行はしむ原これ渠は源氏の余類なれば斯平家に仇するなりそれとしり給はず重衡卿ふかく寵愛し給ふこそいとあやふしといひふらしけれ清盛公が召つかひの彼三百人の童俗に千人禿とかくと聞て重衡卿に告げたてまつりければ大きにいかり直に平左衛門の尉重元を召れ疾雌蝶のまへが首を討書寫山の觀慶をやらんいふ賣僧めを逆磔にかけよ這奴が腹なる子悴こそ何奴が胤あるかも知れねば腹をあばき源氏の種の根を斷て葉をからすべしと敦圖荒くのゝしりて命じ給ふ此平左衛門尉は重衡卿の幼きより不便をかけられし者にて自ら烏帽子をきせ玉ひ御諱の一字を賜ひて重元とよばれけるが重元始終をきゝてけ

じかるとはおもひこれ心得がたき御諚かなもつとも此ほど街の風説は小子も粗きゝ候へど慥なる證据もはべらずこれ全く彼君がかゞかり發跡玉ふ威勢をそねみてかゝる根あしごとを世にうたはするにてやあらんずらん熟々ぎんみをとげ玉ひて後討ばせ玉へと辞をつくして諫めたてまつるといへども素より一徹短慮の中將どの少しもきゝ入給はず汝いかなれば主の命を叛き源氏の余類をかばふや汝此役目をいなまば難波瀬尾をつかはして雌蝶を殺さすべしと宣ふ平左衛門も詮方なく〳〵委細領掌しければ重衡卿きゝて這奴館より首うたんも後日の批判いかゞあり何かたへも誘ひゆきて窃ようしなひ首にして吾よみすべしと宣ひければ平左衛門は力およばず直ち雌蝶のまへの許にいたり僞ていへりけるは三位殿の重衡卿仰ち雌蝶のまへ懐姙の身なりてすでに八月よりおよび舘よりのみあらんはさこそ徒然なるて且衛生の爲よろしからず幸ひ四方の山々も花盛りの頃なれば洛外へ花見がてら出のびてまいるべきよしの御諚なり則御供よりかく申平左衛門尉伺公仕るべけれはその外は牛かひ舎人壹兩人よてくるしからじと申上けるよぞ雌蝶のまへは修羅の使と一点しり給はず君の淺からぬ御心ぞへのほどこそうれしけれとてとる物も取あへず車よめされ平左衛門のみを御供よめしつれ給ひて御舘をねりいで給ふ平左衛門の尉は豫て期したるとなれば地主のさくらや清閑寺仁和寺御室の方

へハ行ず舍人等に心を得さし松の尾山の山ふかくぞ誘ひやがて御車をとゞめ牛かひ等をバそるかにふもとのかたへ返し雌蝶のまへを車よりいたしたてまつるに雌蝶のまへハいとゞかしげよ四下を見まわし給ふよ祇園清水音羽の龍うたの中山清閑寺のあたりをおもひの外櫻ハ爛熳とさきみだれたれど奈何よも深山とおぼしく山又山に聳へばるか溪水のねと耳をねどろかし尾上よさけぶ猿の聲ハ腸を斷つ風情あるにつゆ〳〵心得ぬ面色にてやよ重元よこゝハいつくなりや竟よ見たるともなき深山なるに何とてかゝる所へハ妾を誘ひ〳〵ぞいとおぼつかなし緣故を詳よかたれかーと宣ふに平左衛門ハなミだをそら〳〵とながし寔や貴妃ハ其美三千の上よあつて寵過かぎりあかりしときけど終よ馬嵬が塵とあれりと盛者必衰の理誰かのがるべき今日君を此松の尾山の奥よ御誘ひたてまつりしハ全く御遊覽のためよあらず我君重衡卿浮説の流言を信じ君を失ひたてまつれよと我よ分付給ふもへ小子さまゝ〳〵理をつく〳〵て御諫めヤせしかど一点ほどもきゝ入給ハずことよ君ハ源氏の余類にましますよし殿の御怒りますく〳〵つよく若吾儕此役目をいなむときハ難波瀬の尾がごときむくつけき侍に仰せて御命をめさるべしとの結構なれば詮かたなく所詮御命ハ給ハるものならんよハ緣故を審よきこへあげ御覺期させまし最期の御念佛をもすゝめまいらせバやと此山蔭に御誘ひ申〳〵益あき雜人們をば左右にいひこ〳〵らへ館へ還〳〵候なりとおみだながらよ申ければ雌蝶のまへハ霎時なみだにかきくれて左右の應もなかりしが漸くはぶり落るなみだをはらひうれしき其許が志しかないかにも妾賤ハ源氏の余類澁谷の莊司重國といふ者の娘なれど父が病と貴がんためうき川竹のながれよも身をしづめんとおもふをりからおほけなく中將重衡卿の御目よとまり側妾にせんとの仰せときゝ退糧しても父ハ源氏よしや高位高官でも平家に此身をまかせんといハゞ父の赦すまじとそれとあかさず暇ごひ黄金よかへての宮づかへ敵にまくらをかハせ〳〵も常盤御前の例をおもひ首尾よく父をそつぎ〳〵うへ身ハいさぎよく死なばやと覺期きハめて宮づかへも女子心のかひあくて一夜二夜とすごすうちそれともしらぬ重衡卿のひとかたあらぬ御情よ竟ほだされて死おくれ一月二月たつ間よたゞあらぬ身となりしゆへ責て此子を産おとさバすぐに此身ハなきものと心一つに覺悟ぜりこかるよ何人かかゝるとを流言おし妾を罪におとさんといそらおそろしき工みの有條きくもなかく〳〵けがらハし又書寫山の觀慶阿闍梨ハ妾が血すぢの伯父君にましませど當世さこゆる大德にまゝませバ何條呪咀調伏なんどのおそろしき法を行ひ玉ハん妾今こゝよて死る命はさらく〳〵惜〳〵からねど倘吾あきあとにて阿闍梨の難義をならんかとそれのみ心よかゝりはべりまた二ッよは妾が腹に舍り〳〵ハ全く重衡卿の御胤ある

に妾今はかなくありなべ腹なる和子もやみから闇にまよひ給いんとおーけれと彼もこれも源氏よつあかる妾が腹よやどり給ひ～御身の不幸百度千度悔たりともさらにその甲斐あるべからず妾源氏の身にありながら父よかくし君を偽り平家の祿をはみたるを源氏の守護の正八幡の罰し給ふと思ふよそ入をうらみんようもなし言ひれくとい澤なれど女子の愚痴とわらいれなんはや首うてと西よむかひ合掌してぞおわーまず重元これをみるよりもおつるなみだを袖よはらひさてい君い世上の噂のごとく源家の余類にましませしかよしや源氏なれべ迚何かハいとひ候べきよしなき人の讒言を實にうけて懷胎の君を討よと宣ハする中將どのも主君なれまたその主君よなれ給ふ其許も即主君なり彼美女丸を打ちかね～仲光が身も此身よつまされ何處よ及があてらるべきせまじきものい宮づかへと古人ののこち草も此身に生るとしらざりきと其まゝそこに擅と臥し前後不覺にとりみだし歎きよ時をうつすよそ入相つぐる鐘の音ととものみちりゆく櫻花を見あげて姫ハうトろを見かへりなどて重元おくるゝやはや日も西山よ傾かんとして今うつかねハ入相の寂滅爲樂ときくからよたゝ後の世こそたのもしけれはや疾々とすゝむるよ平左衛門ハはつと心づき生者必滅會者定離今平家かく時めくといへども滿盛公の暴逆諸天善神のよくしみあればいつまでか榮ゆべき電光朝露の夢の世に蝸牛の角のあらそひよよしなく罪をつくらんよりこれを菩提の種とおし今より出家入道なし跡懇よ弔ひたてまつちんかあらず成佛なー玉へと氷のごとき刀をぬひて御後よ立まわり彌陀の利劍を心に念じひらめかすよとみえけるが御首ハまへよおちよける重元ハなく～御衣の袖を引ちぎりて御首をつゝみ四邊を見まハすよかたはらの岩よ一つの洞ありて口ハせまけれど奥のひろさハ疊七八疊もあくらんとおぼしたれべ是屈竟あり權姫の御亡骸を此洞よかくーまいらせ一回御首を重衡卿の實檢にそなへて後吾儕が賞にかへて申乞ふたゝび爰よきたりて御むくろよつぎあはせよろしく埋葬しまいらせん爾なり～と獨心に点頭てなく～御亡骸をかの洞の裏へ入まいらせ倘今霄の中よ猛獸のついべみさらんもはかられずと大ひなる石をまろべして洞の口をふさぎやがて御首をたづさへ館へこそハ立歸りぬかくて平左衛門の尉重元い重衡卿の御前にいでゝ雌蝶のまへが御首を實檢にそなへまうトけるハ下官此度の恩賞よハ何卒永の御いとまを玉ハり且姫の御首を賜れかしと申～ければ道に重衡卿も恩愛の涙せきあへ玉ハず平左衛門がのぞみにまかせいとまを玉ハりけれべ重元ハよろこび次の朝ふたゝび松の尾山よのぼり昨日雌蝶のまへの御骸をかくしまいらせ～洞のほとりよちかづきて見るよあないぶろ～やもろ～の猛獸頭をうなたれて洞の口をまもりて居るさまなるに平左衛門重元ハ

不審はれず少刻たゝずみてゐるに洞のうちにて泣きりに嬰兒のなく聲するにぞいよ〳〵あやしく弓をもて猛獸を追ひのけちかくよりてやをらよせかけたる石をとりのけて見るゑ雌蝶のまへが首なきむくろのほとりゑ今うまれたるとおぼ〳〵き嬰兒なきゐたり重元ハなゝめあらずれどろきたちよりていだきあげてつら〳〵視るゑとこれ玉のごとき若君ゑてありければ且れどろきゑ且よろこびさてハ天孫を出てとほからぬ重衡卿の御胤こゝに降誕ましましたるそよりて魑魅魍魎もこれをくらハず洞の口をまもりたるまやあらんずらんこれ實に雌蝶のまへの寃枉をはらす證據此上やあるべき然しながら今此和子を倡ひかへり重衡卿へ爾々のよ〳〵をきこえあぐるとも心よからぬ五條大納言親子あるからハ此若君の御行末いとあやふし不若吾右も左もーてやしなひまいらせなバ成長ののち御親子再會のときなからずやハをうのほとりにふりく穴をうがち雌蝶のまへが御むくろに首をつぎ合せて是をうづめ上にーるーの松をうゑ直に髻をはらひかの和子をふところゑなし山をくだりゆくゑも知れずなりにける後に俊乘坊重元といひ〳〵ハ此平左衞門の尉がことゑして平家亡び後九曆二年五月重衡卿南都におひて誅せられ給ふ道すがら小野の里にて彼和子とをじめて親子の名のりせさせ給ひしなどありとい〳〵どもこれ辨慶が傳ゑかゝハらざるをなればーばらく筆をさしおきぬ

武藏坊辨慶物語卷之六終

第十三回

觀慶冤六波羅に虜る
武藏坊夢に冥府を闡す

三位中將重衡卿ハ平左衛門に分付て雌蝶の前をころさせ玉ふといへども御怒り尙おさまらず渠が伯父とやらんきこへし書寫山の學頭觀慶といへる賣僧も正しく源氏の余類なればよーや法師なりとてもゆるかせにしがたし早く引捕へて糺明なすべしと備前の國の住人難波次郎經遠備中の國の住人瀬の尾の次郎兼安といふ兩個の佞人に仰せければ兩人ハ徑に許多の夥兵を引つれ書寫山に馳向ひ矢庭に阿闍梨を高手小手に縛て六波羅の庭上に引すゑるに阿闍梨ハ夢に夢みし心地にて更よりの行衛をしらず難波瀬尾ハ此ときに觀慶を佶と睨へ汝が姪とやらん胡蝶といふ者不憶幸を得てかたじけなくも重衡卿の御寵愛を蒙りし處這奴却て寵にほこり得もしれざる惡少年等を奥に引入これと姦通なして素性賤ーき者の種をやどしこれを三位どの、御種といつわり剩へ五條大納言邦綱卿の御息女たる雄蝶のまへが懷姙の御胤を亡者になさんと汝をたのみ呪咀調伏の法を行ひーよしもつぱら京洛中の風説寔に天に口なーを言ーむると素性ーれざる父なし子と勿躰なくも王孫に遠からぬ重衡卿の御胤と僞るをもつて天神地祇の京童の口をかりて告給ふよ三位どの、御怒り甚ーく雌蝶のまへをバ平左衛門尉に言付て結果てしまふたり加旃ず汝等ハ原源氏の余類なるよし素性を明し調伏なせし綷の顚末眞直に白狀なし疾々罪に伏すべしときひて阿闍梨ハ漸く首を擡げさてハ其事にて候ひしか宣ふでとく愚僧が俗緣に胡蝶といへる者候ひーが渠ハ我弟澁谷庄司重國といふ者の子なるが幼雅ときわかれてその後絶て音信も聞ざりしが去頃云々のよしにて父の病をみつがんために是非あく平家の側室となり懷胎までなしたるよーー何卒首尾よく身二ツはならばそのうへにて自害して死するとの委細を文にしたゝめて贈りたれバ且驚き且隣み斯佛門にいりし身ハもとより三界に家なし釋をもつて姓となず身の源氏平家の差別なければ姪が心を安んぜんと衆徒を集めて若君平產の禱をなせしものみ人を助ることそ出家の役目なるに爭が恐ろしき呪咀調伏をなすべきやこハ衆徒等を召よばれて御吟味有らハ明白たるべーと憚る色なく言上するに難波ハほゝいて頭を打搖り否々そハ緣者の證據とやらん何ぞ當になるべきや是ハ定めて雌蝶の前のみに賴まれーにあるべからず源氏の殘黨のうちより平家を調伏せよとたのまれたるものならん疾言ずや白狀せずやいはぬといはざるよおくべきか水責火ぜめハ愚脊を立わり鉛の熱

湯おそろしき責苦をなしても吐實させずよおくべきかと難波瀬尾かわる〳〵に日毎に阿闍梨を囹圄より引いだしさま〳〵責さいなむといへどもとよりしらざるといひ悟道を發明したる大德よましませば只口をつくみて何をも應へ玉はず斯り一ほどよ絶いり玉ふといくそたびといふとなく今は啻霜夜によいるむしの音のいと幽かよおりもて行殆々玉の緒も絶なんとす小松の内府重盛卿は始て此をきこしめし大きにおどろかせ給ひ書寫山の觀慶阿闍梨は當世の大德にまし〳〵て調伏おんどの邪なる法を行ひ玉ふべき人よあらず雌蝶のまへとやらんもはや討れたるうへは詮術あり觀慶阿闍梨はよしや源氏の余類にもせよ幼より佛門よいり給ひたるからは何ろくるしかるべきと父清盛の御前にいで、云々のよしを演說して阿闍梨の命を乞ひ重衡をめしてはやく阿闍梨を赦しまいらすべしと命じ給ふよ重衡卿は詮術なく去ぶ〳〵其旨を承諾なすといへども猶心よからずやありけん備中の國へ配流なすべきよぞ極りける却說四塔の武藏坊辨慶は嚮に洛にて義經公橘次よわかれそれより足よまかせて普く西の國々を經廻り一年ばかりを過て治承二年秋の頃よやありけん肥前の國雲仙ケ嶽のふもとをよぎりけるが不圖道をふまたがへすでよ黃昏よおよびければ奈何はせんとあたりを見まはすよ一軒の辻堂ありけるよぞ是幸ひと立よりて見るに雨露のために空しく軒端かたむき椽くちて草茫々と生茂れり辨慶は例の禪杖を力よまづ椽の上よのぼりて朽りんじて斜なる狐がうしをおしあけて裏よ入てみるよ堂の中央よれ石もて彫みたる地藏尊を安置したれど誰詣る人もあるしとみえて花瓶よさしたる樒の花もかれ香爐も傍よまろびてさらよ線香の薫りだもなしかけあらべたる繪馬はあのぐはげりんじて願主の名さへもおぼろなり武藏坊はつら〳〵此形勢をみて佛前に額き南無や歸命頂來六道能化の地藏尊毋山の井義婦玉苗その外源氏の諸生靈頓證ほだひとふしおがみ今宵は御佛の堂をかり一夜をあかさばやと端座合掌して念佛となへてぬたりけるはや深々とふけ行夜半よ溪水の音松風の聲谺にひびりてさはがしくいもねられざるよいとど行末越方のををおもひつゞけてねたりけるよ遙あなたよて人のさけぶ聲きこゆるに辨慶は耳をそばだてハテこゝろへぬ小夜更て人跡まれなる此ふもとに人の聲きこゆるは正しく此邊りよ盜人の栖家なんどあるとおぼし行てみばやと頓て堂をいでゝさけぶ聲をしるべよたどり行に風の吹まはしよやその聲或はとおくきこへあるひは耳のもとよきこへてさらよその所よいたらずこはふしぎや狐狸妖怪の所爲にもせよその正体を見極ずして歸らんも口惜しとつたかづらよ取つきて峰にのぼり谷にくだりうこばかとなくたづねもきしよ漸くにして平地に出たり向ふの方をとみれば一人の老法師よ手がせ足がせをはめ惡鬼羅刹のごとき異形の

者鉄の杖をあげて責さいなむやうす辨慶大きにおどろきつらく彼老僧の面をみるにこれいかゝ我師父書寫山の觀慶阿闍梨にておわしけれバ且おどろき且かなしみすでゝとび出んとせしが否々世にハまたる人ハ幾干もあり孔子の陽虎にまたる類その俤ハまれども善惡ハ雲泥のけじめあり我師ハ書寫の學頭まゝ〳〵て當世の大德たり何の罪あつてかゝらあたりへきてかゝる呵責を受玉ハんやうなー必定人違へあるべし然るにても此法師ハ齡ハ古稀に近からんとおぼゆるに奈何なる罪とか犯して這奴等が爲ゝ斯のごときの杖とうくるとにや加之這奴等が相貌きハめて醜惡にしてさらゝ人間のたぐひゝあらずうたがうらくハ妖怪變化ゝハあらぬか何ハともあれ先ゝのびてその顚末をうかゞいゝんと尙木かげにたゝずみてみるゝ頓て彼者どもハ老僧に對ひ扨もしぶとき法師かな大王の御前ゝ引ずり行淨破璃の鏡ゝかけて白狀させいでおくべきやといひつゝ引立ゆくに頓てすこし朗なる所ゝいでたり爰に一ツの樓門ありその造りざま日の本ゝハ目なれずすべて唐めきたり彼兩人ハ法師を引て此門の裏に入りたり辨慶ハ是をみていよ〳〵不審うもこゝハ何處ゝして此一ト搆ハ何人の住家ゝやと打あぶざて是をみるに一箇の遍額をかけて閻羅宮の三字を書したり茲において辨慶おほひゝおどろきさてハ我ハいつのまにやら死してこゝハ冥土なる閻王宮なりけるかこハ奈何せんとしばし惘然として佇立ゐたりし折から門の裡より一人の官人巍然としてあゆみきたるに辨慶ハちかくよつて問ていへらく今あやしき二人の者一人の老僧を引立きたりて門内へ入しが彼老僧ハ何等の人ゝ〳〵ていかなる罪をおかーかゝる呵責をうけはべるゝや又彼二人の獄卒ハ容貌極めて醜惡にー〳〵て人とも鬼ともみえわかざるが這奴等ハ何者なりや官人しりてゐハさば審ゝかたり給ひて小子が疑念をはらし玉へかしといふに彼官人不審氣に辨慶が爲体を西視東視つゝいふやう今彼獄卒が引立きたりし老法師ハ南贍部州大日本播磨の國書寫山の學頭觀慶阿闍梨といふ者なり又かの二人の獄卒ハ是を奪魂鬼縛魄鬼と号し人間の魂魄をうばひこれを縛めて冥府へ誘ふ役目なりさればいまだ死せざる人も娑婆におひて罪科を犯すときハ活あがら墮獄して火の車ゝのせられ畜生道におちなどする皆此鬼等がわざなりときくより武藏坊愕然として大ひにおどろき我師父ハ日頃碩德宏才のきこへたかゝりしが何の罪何の科あつて斯獄卒等が手にかゝり給ふゝやと最かなしくふたゝび官人の袖をひかへて尙りの詳ゐると問んとするに官人ハ辨慶をかへりみ方見や陽人こゝハ陰司なれバ汝等が久〳〵くとゞまるべき所にあらず吾ハ今閻王の仰せをうけていそぎの用事あり疾そこを離されよと袖をそらひ倉皇く立さりけれバ辨慶ハ途方ゝくれ奈何ハせんと門の戸にみゝをあてゝ裡の動靜をうかゞふゝ烈〳〵く打敲く

音して〜さりよ阿闍梨の喘ぎさけび給ふ聲きこゆるよ辨慶こらへかねて門の扉どう〜と打たゝきあけよ〜とよばれどもさらよ答る者なし辨慶此形勢をみてふたゝび大ひよ恚りよしく〜あけぬとてそのまゝよーしておくべきやもろこしの獘噲ハ鴻門の會よ門を破て主君高祖が危きをすくひしときくれおんぞ獘噲におとるべきやといひさま弓手よ長刀をかいこみ馬手を扉よおしあて金剛力をいだして曳哉呟とおしけれバさしも丈夫よ造り建たりとみへ〜門の閂めり〜とをれて扉左右へひらきけるにぞ辨慶ハ大ひよよろこび直に門内へはせ入てむかふを倍とみる閻魔王とおぼしく面の色ハ朱のごとく眼ハ日月よ似て虎ひげ左右にわかれくわん〜と高御臺の上よ座し左右にハ俱生神千里眼耳風のたぐひをはじめ十王の輩とおぼしく魏々蕩々として居ながれたり遙のこなたに以前の獄卒觀慶阿闍梨を引すへなを鐵杖をふりあげ眼をいから〜大王の廳前なるぞ疾白狀せよ白狀せずば目よものみせんと顏色憔悴したる阿闍梨を情なくも只一打にせんとする形勢なるに辨慶ハ何か猶豫すべき例の禪杖をひらめかして物をもいハずうつてかゝるよ兩人の獄卒慌忙きにげんとするを左右よ打仆しとびかゝつて閻魔王を高御臺より引おろし引手に襟髮をとつて大地にねぢふせ足をあげて背をしたゝかよふみつけ長刀を小脇にかいこみ大の眼を活と見ひらき座中を倍とにらまへ我を誰とかおもふ遠からん者ハ音よもきゝつらん近くハよつて目よもみよかたじけなくも天津兒屋根の苗裔大職冠鎌足公十一代の後胤中の關白道隆の氏族熊野の別當辨正が一男幼名生佛丸人稱〜て鬼若とも呼りし鬼若衆今剃髮して西塔の武藏坊辨慶とハ我事なりあれなる老僧こそ我師よまゝ〜て當世の碩得なるになんぞ地獄へおちてかゝる呵責にあひ玉ふべきいわれなしこれ全く人違にてあらんずらん今辨慶が誘ひ歸るにさゝもる者あらバ我長刀よかけんがいかよと云に閻魔王をはじめ十王の輩面色土のごとく戰慄きさらよこたふるものなし辨慶ハ最快氣ようちわらひ去からバ疾師父の手がせ足がせをとくべ〜といふに兩人の獄卒ハふるひ〜阿闍梨の手あしにかけたる拷器をはづしければ辨慶ハはしりよつて阿闍梨をいたハりまいらせ頓て脊よ負て隻手にて長刀をかいこみ四下をにらまへ閻王はじめ汝等鑒になし一百三十六地獄ことゝ〜く打つぶして得させんとおもへども阿闍梨を誘ひたてまつらんとおもへばさばらく赦し得さするぞかさねて來りて地獄を亡すべしと悠々として立かへるよさゝへんとする者一人もなし辨慶ハ容易阿闍梨をともなひて以前の門をくゞるよとおぼへしよたちまち瓦落々々といふおとに目さめてみれば是南柯の一夢にーて元の雲仙ケ嶽の麓なる地藏堂よ茫然としていたりける

第十四回

故郷に辨慶師の安否を訪ふ
白浪松の邊より橘次落髪す

扨も辨慶ハ目さめてみるに肉ゑきりにうごき胸打さわぐよつら〳〵おもひめぐらせバ不審とかぎりなーさるよてもれもひがけざる夢をみるものかなよしや阿闍梨世をさり給ふとありともいかでか陰司へおちてかゝる呵責をうけ給ハんやうあしこれ正しく吾此ほどの旅づかれによりてかゝる正なき夢を見たるものなるべー然ハいへ久しく故郷へも音信ざれバ一ートまづはりまへ立こへ母の墳墓へも詣で且阿闍梨の安否をも訪ハんとやがて夜の明るをまちて辻堂をいでは〳〵と播州さしていそぎけるかくてほどなく故郷播磨がたなる福井村のほたりよ行てみると寔や桃李ものいはず春幾か暮烟霞跡なし昔誰か栖んと賦したるごとく今ハはや許多年を經たれバ辨慶を生佛丸なりと知る人一人もなしやがて亡母の塚へ行てみれば詣る人もなしとみえて草茫々と生茂り半ハ土ようづもれて見るもいぶせき形勢なるよ胸まづふさがりて涙ぱらりおつるに慌しく四邊の草をかひはらひ水をくゝて苔をあらひ清め花を供じ阿伽を手向南無母上出離生死頓證菩提とくりかへし〳〵念じ終りてゝをいで倩々おもひめぐらーけるハ我今愁ひかく見ぐるしき乞食坊主のごとき形相よて白地よ御山にゆきて師父の安否を

問んもなかくよ影護しさりとて外に聞くべき人もなし彼肥田の翁ハ石流に村長なれば今尚かしこよいまずべけれど圃太夫ぬし許ゆかバ玉苗が產る所の我子あるべー左あらんよハこれも又我輪回のさまたげよして渠等が爲よもよろしからず右やせん左やとおもひ猶躊躇てゐたる折から十二三才とおぼしき一人の草かりもらべ脊よハ落葉を多くあつめて籠よいれたるをおひて聲たかやかよ夷唄をうたひつゝ來るよバ辨慶ハ是をみてちかづくまゝに彼もらべを呼とゞめ其許ハ定めて此山のふもと村よすめる者ならんが當山の學頭觀慶阿闍梨といふ聖ハすこやかよおわすや否やを〳〵らざるかといふよ彼童辨慶がすがたを左視右視て然宜ふ其許ハ阿闍梨の徒弟にてやおわすらん鈍ま〳〵や此度の一件のをを知給ハねとおぼし抑彼觀慶阿闍梨ハ去る頃六波羅の兵難波瀬尾といふ兩人みだりよ此山にのぼり情なくも阿闍梨をつよくいましめて洛陽へのぼりぬその緣故を奈何といふに彼阿闍梨の俗緣に爾々の人おわして箇樣々々の綟につきて無實の罪を得玉ひ囹圄よ繫がれすでよ責殺されんとし給ひしよ小松どのの一言に因て漸く清盛重衡の怒りをとけて一命助るといへども備中の國へ配流のよーかの難波瀬尾の両士付そひてもはや大物の浦より纜をとき備中の國岡山といふ所まで至らんとすれど此ほど日ごとよ風あらく浪高ふして船をやるごともならず茲をもつてあかしのうらよ舟がゝり

ーてゐれど猶此爲体にてハいまだ二三日ハ風直るまじ何の所縁なき吾儕ゐれど最いたましく
おもへば奈何とも詮かたなし其許愁ひこゝらわたりへきて阿闍梨の弟子なんどゝいひ給ハゞ
またもや源氏の殘黨余類と怪しめられて憂目よあひ給ハんハ必定せりはやく何方へも去てそ
の難をまぬがれ給ふべしとおしへさとすをきくよりむさし坊ハいかり心頭よりおこり眼を見
はりはをくひしばり彼方をきつとよらまへさてハ去る夜の夢ハれもひ寐のつかれよあらぬ佛
神のつげ給ふ正夢にてありけるよなにくき平家の奴原が進止かないで吾今よりあかしのうら
べにおもむき難波瀬尾とやらんが首引ぬひで師父をすくひまいらすべしと敦圖あらく詈てす
でよそこを立んとするに彼はらべ辨慶が袖をとらへて呵々とわらひ師兄かならずはやまり玉
ふな其許ハ實に當世の豪傑よおハせど今あかーのうらにいたりて白地に阿闍梨の危急をすく
ひ給ゝとー給ふといと拙し彼船よハ難波瀬尾をはじめとして平家の兵夥多ありてまもりおれ
り縱ゐれとても其許が勇猛に比べんよハれそるべきにあらねば首尾よく阿闍梨をすくひいだ
し給ふとも平家のせんぎきびーくば何國にか身を竊び給ふべき竟にハ探しいだされて其許も
ろとも憂恥をさらし給ふべし加之其許ハ義經公よたのまれ結び平家をほろぼし源家再興し
て民の塗炭をぬき給ふべき大切の身ならずや大功ハ細謹をかへりみずといふ古語をわすれ四

夫の勇ゐはやり給ふハ太丈夫の所爲にあらずと說きやぶられて辨慶ハ愕然として大ひにおど
ろき汝ハ實に年よにげなき怜悧者かな負たる子よおしへられて淺瀨をわたるとハ是等のことを
いふふらんか然るにてもわが義經公よ味方して平家を亡さんなどとハさらに此方におぼへな
きとおりを實しやかに陳ずればわらべふたゝびいへらくかくし給ふゐ其許ハもと熊野の別當
辨正ぬしが庶子武藏坊辨慶といふ豪傑にして都五條のはしよおゐて源の御曹子義經公に邂逅
し主從の約束なー給へることハ故ありて吾よくこれを去れり必ずつゝみ給ふなかれと胸中の
機密をいひあてられて道の辨慶もひたとあきれ嬰時童子が顏打まもりてゐたりけるがこハ究
て人間にハあるべからず神明佛陀のかりに草刈わらべよ化現し給ひて我をして阿闍梨の危窮
をすくはせ給ふものならめと肚裏よ思案しつゝ遽しく大地よ蹲踞きうやくしく言けるハ我肉
眼の大俗凡夫にーてかゝる神仙なるとをゝらず最前よりの不禮を免し給ひてあはれ師父の横
難を助くべき宜計あらば何卒おーへ給ハれかしと低頭平身して遽けれバ神童兒爾と打笑み
善哉辨慶汝阿闍梨を助けたくおもハゞ箇樣々々よ計ふべし左あらんよハ阿闍梨が命も全く汝
が誠心もとげるなるべし然あれ文王も麥里に囚れ孔子も陳蔡よ厄すこれ天命の定る所よして
如何とも詮かたなし阿闍梨謫居にれも心き給ふとも平家亡びん後ハおのづから歸鄉し給ふと

あるべーかならずうれふることあかれと綷審びらかよさとすよそ辨慶ハなゝめあらずよろこび厚く彼神童よ禮をのぶるに神童ふたゝびいふやう汝今宵このほとりよて故人よ遇をあるべしそのとき彼友を扶けて一兇を亡ー得さすべし是も彼も皆是天命のゑからーむる所なれバ汝かならず師父のとを念とーて朋友の信を失ふをなかれ此ほどの日和ハあか〳〵一日二日にーてハ風和がざれば阿闍梨の命にハ恙あーといと細やかよ説示して頓てまた謠をうたひ瓢々然とーて何處ともなく立さりけれが武藏坊ハしばしそのあとを伏おがみあかしの方へぞいうざけるかくてあかしのうらの邊りよたどりつきければ阿闍梨ののり給へる船やあると此處彼處とさがしもとむるよ今宵もそらかきくもりて風はげしくふりゝふらずみ定めあきよ辨慶ハ簑笠に身をかくー例の禪杖を携へそこよこゝよと吟行をりから忽とある松かげより一人の大漢あらハれ出ものをもいハず白刃をひらめかし辨慶よきつてかゝるよこゝろへたりとびしさりかゝる夜陰よ人倫たえたる此荒磯よて理不尽よ旅客をたぶやかすハいハずと云れし白波ならんいで我一棒を試ろむべーと禪杖をとりのべ身ゝまゆれバ彼方ハ大刀を眞向よかざし左右の論ハ無益なりはやくくびをさゝげよとうつてかゝるよ辨慶これとたりあふと一上一下盧くくうくすゝ實々數十合戰ふといへどもさらよ勝負ハみへざりける辨慶此体を見てもどかーくやおもひけんふたゝび彼棒をとつてりう〳〵はつしとふりまハしけれバたちまち上の方より四尺あまりの云ら刀よひるがへりいでゝ長刀よ異ならず辨慶ハ此長刀をひらめゝして我一刀の下に泉下の鬼となれよと打てゝるに彼賊ハ二三刀うち合せーがやよ待給へ旅客たゞ一言いふべきとありといふをきひて辨慶からー〳〵と嘲てらひ汝我をたばかりその透をうかゞひて討とらんとするものなるべー我爭かさバかりの計におちいるべきいでいふとあらバ疾いへきかんと長刀をかまへ眼をくばりて扣もるよ彼賊いへらく最前よりの其許が本事おか〳〵尋常の人よあらず云かのみならず今までたゞの棒なりーとおもひしよ俄に云ら刀はねいでゝ長刀よ異ならずおぼろかけよもきらめき見ゆるハ何ともつて心得がたしかゝる稀代の兵器を携る者外よあるべうともおぼへずもーくハ西塔の武藏坊ぬしよハれわざずやとひかけられて弁慶ハ愕然として大に驚き然いふ聲音ハ何とやらん此方よもおぼえあり奈何よも我こそ西塔武藏坊辨慶なり我名を云り玉ふ抑其許ハ何人なりやつゝまず姓名を名乘玉へと詰り問んとする折しも雲間をいづる月代に辨慶はじめて彼賊の面をみれば豈はからんや橘次季春よてありければこハ〳〵奈何よとばかりにて雲時あきれてゐたりける

武藏坊辨慶物語卷之七 終

第十五回

垂井驛の斥候松
舞子濱の蒙汗酒

當下辨慶ハ長刀を納めて原の禪杖となしつ橘次も刀を鞘におさめ襟かいつくろふはしよ辨慶ハとある松が根に臀うちかけて季春よむかひさても去る頃洛陽の隱家にてわかれまいらせてより吾儕ハ西の國々の端までも錫をとばし杖を曳てあまねく地理人氣をうかゞひしよ此ほど僅かもゐあてりふたゝび當國よきたり此ほとりよ吟行へりこハふかき緣故ありて一朝一夕よハ說つくし難なりたゞ心得ぬハ其許ハ義經公共侶陸奥へくだりし身のいかゞして此西國にきたりかゝる非義非道の業をあゝ玉ふや切取强盜も世の便著なき折からハ武士のならひとハいへど渴しても盜泉の水をのまずとハ義者の辭よしや一命を繫ぐためなりとて左も右も又詮術もあるべきよおもひきや金商客と世にうたハれし橘內ぬしの一子が盜賊剪徑の邪ある活業をすべきとハ實よ三日向顏せざれば其智ゑかりがたしとハかゝるとをやいふなるべゝと唧顏よ言ければ橘次ハいと面なげよ奈何よもかゝるうらべよおひて不意會ひまいらせたれば然おも

ひ玉ふ事理なれど我なんぞ綠林の群に入てかゝる非道の活計をあすべきや是よつきてハ最永き物がたりあり外日洛よてわかれまいらせてよりハ曹子義經公と共侶に陸奥へくだらんと木曾路をさゝて垂井赤坂の驛のほとりなるとある逆旅に舍りたるよその夜夜半の頃にいたりてその家へ許多の强盜おしいりて宿の主をむじめ家內の者を悉くいましめたり吾儕と義經公とハ盜賊のいりしはじめより物かげよ竊びてその爲躰をうかゞひ倘や歆美佐崎太郎ゑ俤のよたる人もがなとひうまりかへつてゐたりけるようの首領とおぼしきハ六尺有余の大の法師なりとおぼゝく頭よハ衆徒頭巾をいたゞき身にハ黑皮おどしの鎧を着大長刀をもきバさみ床几よかゝり座しきの中央にありて小盜偸等よ指揮して藏より金笠衣服調度のたぐひをはこばせおりつ這盜人ハこれ此頃名たゝる熊坂長範といふ盜賊の張本にゝて部下許多を從へ畫ハ垂井と赤坂の間なる斥候の松といふ梢にのぼりて遠近を眺望もしよき旅人のこゝを過るをあらバ竊にそのあとをつけ夜よいりてその旅宿を襲ふて略貴擔兒のたぐひをうばひとる所の强盜にして世人おぢおそることすくなからず此家ハ逆旅ながら此わたりに双なき素封なりければ孫てかの熊坂めがけてゐたりゝが此夜よきたよりや得たりけん部下を將てこみいりしにぞありけゝ義經公ハ從來智勇秀絕にましますゆへよ今此爲体を欝して吾儕ま低言給ふハにくき熊坂

が振舞かな此家の主人も最いたまし義をみてせざるハ勇あしと我今熊坂をほろぼし此家のあるじを助けバやとおもふあり汝も力を合せて這奴等を懲よ〜てくれんずと逸り給ふに吾儕おどろき密に申しけるハ千金の弩ハ鼷鼠のために發せずとこそ承る今君ハ大切の御身よましまする何ぞかるゝ〜く強賊老馬賊なんどゝたゝかひ給ふべき君いかに猛くおはし給ふとも彼よハ數百の同類あり倘万一御過ちあらんよハ亡父君への不孝なり努つゝしみ給へと諫めければ御曹司ハ嘲わらひ給ひよしや渠何万騎なりとも素より烏合の草賊おうるゝにたらずいざや義經が本事のほどをみよやとて小太刀を拔て座中へおどりいで給ふに熊坂長範これをみて汝ハ何者なれバ小冠者分際として我に及むかいんをするハ虎の髭をなでんとそるにひと〜不便あがら長刀のさびとおさんとかひこんだる大長刀をふりまわしてうつてかゝるに御曹子ハ例の身がるにましませばたちまち身をおどらせてとびあがり電光石火のごとく小太刀をひらめかして熊坂とわたりあひ給ふよ吾儕小ゝげより一刀をぬひて手下の奴輩を切ふせくゝ上げるほどよのこる者どもハみなちり〜よ逃うせけり右左するひまに義經公ハ難なく長範を打とめ給へバ吾儕やがて家内の者の縛めをとくよ主人の長ハ地獄よて佛まあへるこゝちして義經公の御前よひざまづきなゝだをながして再生の恩を謝す御曹司ハ自若として宣ふよいかに

橘次もしや此群のうちよ汝が仇美佐崎太郎とやらんがあらんもはかりがたし慰のある奴輩を責てとひ詰むべしとおゝつたまふに吾儕實よもと心づきやがて一人の小盗賊の半死半生よてうごめきぬたるを引起して汝等が仲間のうちよ原都の產よして美佐崎の太郎爲祐といひし者ハあらざるやといふよ彼小盗人ハ首を打搖りて去る者ハ候ハずと答ふあなたこなたの手負等よ問へどおほくさらずといふ玆におひて吾儕荷物の内より師父の與へ玉へる骨相圖をとりいだして小賊等よ示し倘此人相よ似たる者をさらざるやと敷回責問ふよ一人の小賊彼骨相圖をとゝかふみていふやう吾儕ハもと西國がたの海賊なりしが些の子細はべりて近頃より熊坂どのゝ麾下よ屬したるものなり此頃播磨の海上沼島といふ離れ島よ一人の海賊住りその名を海上の灘丸といふ此灘丸の人相恰好此骨相圖よ寸分違わずさかもその生れハ都がたなる平家の被官なるよし慥よきけり倘此者にてハ候はずやといふに吾儕これを聞くより天へも昇る心地〜つさらハその灘丸こそ美佐崎太郎ようたがひあ〜シテ汝其沼島の案内をばおりたるならんくわ〜く語ば命を助け褒美を遣ハすべ〜といふよ彼小賊ふたゝびいふやう奈何にもかの灘丸が栖家ハ沼島の海岸へ出たる岩窟を切ひらき立派に殿づくりして常よハ爰よ住ひまた或ときハ大船を造りてこれに打のり海上を往來し諸國より運送の荷物を奪へりその岩崛のさまハ個

横々船のやうすハ云々なりと詳らかたりまたいふやう彼灘丸が部下に牛鬼の鯛六といふ者ありて這奴ハ舞子の濱ゑ一軒の酒店をひらきてこゝゑ憩ふ旅客のうちにて懐の重たげゑみゆる者ゑハ酒の中ゑ蒙汗藥を入れてのましめて打仆し金銀衣服を剝とりあるひハ大勢なる者なんどハ竊に沼島の岩崛へ告げやりて灘丸自ら部下を引俱しきたりて是を殺してその財寶をうばへり其許彼灘丸ゑ遇んとおもひ給ハゞ先此鯛六が店にいたり給へうれにハよき物をまいらすべーと懐より細々許なる竹の札ゑ燒印を押したる物をとふでこれハ是彼灘丸が一味の輩の割符なりよしや遠國の者ゑして面をゑらずとも此わりふを持もき熊坂どのよりきたりし者ありといはゞ鯛六もあへてうたがハず沼島の岩崛へ誘ふべし然ハいへ仲間にハことゞく隱語ありそれをゑらずば行給ふとも詮なかるべきがまづ此割符を携へゆきて試ゑたまふべーと割符を我ゑ遇與せしゆへ吾儕よろこびてこれを受納めやがてかの小賊ゑハ黄金を與へて逃しやりぬ左右するひまに夜も明んとするゑ義經公ハ世を竊び給ふ御身あれば主人の長がとゞむるともふりきりて吾儕を俱して陸奥へくだり秀衡朝臣ゑ對面なし其許を主從の契約し給ひしゑより一て吾儕がこゝまでつげ給ひしかば秀衡朝臣ふかく稿ひたまひて被物許多たまハりつゝて彼所にとゞまること一年ばかりなりしがその間ももつぱら彼太郎爲祐が行備をたづぬるゑいへどもさらゑゑらねば兎角に沼島の灘丸がを心にかゝれば義經公にも秀衡朝臣にも暇をつげてふたゝび都へのぼりうれより直ゑ當國やくだり四五日ほど以前舞子の濱ゑある酒店ゑ立もむき云々と偽りとしらへて割符を出一て見せ何卒灘丸が麾下に屬せんとを託しけれハ彼酒店の主人鯛六ハ心得て小船ゑうゑのり沼島ゑいたりかくゑ通じけんゑ暫らくありて立かへりいふやう岩窟の棟梁灘丸ゑしハ狐疑ふかく容易人をいれず此割符を持行たれど其許が仲間の隱語をしらぬ樣子をきゝてゑやーくゑもひさらにもるーー玉ハず實に熊坂どのよりの紹介あらんゑハ彼人の書翰にてもあるべきゑそれのなきハ最不審し通奴いよ〳〵此島ゑとゞまらんとならバ投名狀をゑたゝむべきよしをいひ付玉へり其許強て大王の麾下ゑ屬し玉ハんことを欲一玉ハゞはやく投名狀をゑたゝぬ玉へといふゑ吾儕きひてこハ易きことあり筆硯やあるかと玉へ頓ゑかひてまいらせんといひしゑ酒店のあるじ呵々とわらひ其許いまだ投名狀といふをとしり玉ふまじ凡新に此島の手ゑたがハんとはふ者あるをきハかならず先一人の者の首を斬て携へきたらじ是を投名狀と名づく其許深實ゑ此島にとゞまらんとならバ今日より第三日をかぎりて人の首を切て持きたり玉へゑからんにハ吾儕大王ゑ執成まみゆるとを得さしめんといふゑ吾從來罪なき人を殺さんと不便にハおもへども詮方なくやがてその趣きを承諾

して此ほどより夜ごとに此浦邊を彷徨りて往來の旅人をまてどかゝる荒磯あれば夜よ入ていと往來する人絶てなく今宵にてすでよ三夜よとよべり斯てハ投名狀を覓ることなくんバ灘丸よ遇ふよすがもあーと心しきりにいらたつとりから師父のきたり給ひしゆへ天の與へと辞ともかけず切てかゝりしゆへ師父にハ我を盜賊なりとおもひ給ふも實に無理ならず最危きとにはべらずやと一五一十をかたるよそ辨慶る太きよおどろきさてハ左樣の事にてありけるか不意會ひまいらするも尽せぬ緣よやあらんずらん我も其許よりかれてより西國よおもむき此ほど當國へきたりしハ箇樣ゞゝの事なりと師の坊が無實の罪よりて備中の國へ配流せられ給ふよしをきゝて何卒すくひまいらせばやと心を盡すをりから書寫のふもとにて神童の告よりて今宵此ゐらべに吟味しかり且その神童のおしへに今宵故友よ遇ふとあるべーりの友の力となれよかならず朋友の信に違ふとなかれと示し給へるハ其許に力をそへて敵をうたさすべしとの示現ならんか左あらんなハ其灘丸でそいよ〳〵美佐崎太郎ようたがひなし其許今吾を縛めて其酒店に倡引ゆきて彼鯛六とやらんを欺んにハ投名狀を覓んと今宵しも濱邊の松かげよりつて待とりしも此法師のきたりしゆへ矢庭に切てかゝりしよ遁奴出家にまげおくなか〳〵手強き奴なりしが難なく打伏せ斯いましめて將てきたりし也大王の御前にて此奴が首を切て二心あきさまを見せまいらせん僅まハはべれど渠が携へ孝李頭陀帋のたぐひも持きたり候と偽らべ鯛六實なりとおもひて岩窟よ伴ふべしそのとき我灘丸が面前に出あば寶の太郎なるや自みば明らかなるべーといふよ橘次ハかぎりなく怡び寔に其許とハ奈何なる宿世よや斯厚き情を蒙るをいつの世よかハわするべき然ハいへ重ゞ〳〵恩ふかき師父をよ由や剖にもせよ縛めんを空恐ろしと猶豫よ辨慶ハ打わらひ季春ぬしあどて然る女ゞしきをのたまふや是所謂苦肉の計略なり疾々我をいましめて引ゆき給へ縱へ鐵の鎖もて十重廿重につなぐとも引ちぎらんをたゞこれ朽たる繩のごとしいかでか遠慮するにおよぶべきと吾手に脫をうじろべまわせバ橘次ハ詮術なく武藏坊をきび士くいましめて行李と頭陀帋を禪杖のさきにくゝり付て是をかたげ雙手に繩をとつて酒店をさしていそぎゆきぬ

彼灘丸が部下の賊等此うらべの松かげよいでゝ夜な〳〵往來の人をなやませ〳〵ゆ今ハ猶白波松といふ大樹のこれるハ彼橘次と辨慶が出會し邊りの老松をいふなるべー

第十六回

辨慶が計に依て季春父の讐を復す
灘丸が一念頭に止て鯉魚に着す

扨も橘次季春ハ辨慶を將て彼舞子の濱なる酒肆にいたり門の戸ほと〳〵と打たゝくに頓て酒

塵のあるに鯛六は立出てやをら戸を引あくるに橘次は縄付を引立て裡よりぬり實しやかにその容子をかたりければ鯛六はきいて一點ばかりもうたがふけしきなくさては其許は實の熊坂どの、手下よておわしけるか此法師年は若けれど面魂ひ只者ならずと見ゆればいかさま些は手よおぼへもありつらんを易々からめおほせ玉へる足下の武術もいと奥ゆかし大王も左こそよろこび玉はんまづ仲間入めいはひよ一盃をくみ夜のあくるをまつて沼島へ誘ふべしその法師をば彼處の柱へ括かとくくしつけてれさ玉へかならず油斷してをりおよがーぞなど心とけたる形勢に橘次は心中にほくそえましたりと大きみよろこび綸よ辨慶を目くばせなしてわらひをかくしつゝいとけれしきとをきこへ玉ふものかな吾儕も宵より濱邊よ佇立て寒さ絶がたかりーは酒を賜らんとはありがたしとやがて地爐の邊りよ座をとむるよ鯛六は酒をあたゝめ鯛のあぶりたるを皿にもりて携へきたり吾儕毒味もてまいらせんと一盃を傾け橘次にさす橘次はみづくと引うけてとつとのみ干もさても名酒かなと頭をたゝくよ辨慶は最前よりものをもいはず柱よくゝしつけられて頭をうなだれてゐたりけるが素より酒をこのむと甚しく酒の香ひをかぐときはおもはず口より涎を流すほどの好なれば二人が酒をくむ爲体をみて咽をならーけるがまた餓頃に一ツの計をめぐらし盤をいたしていふやうゆかに此家の主人よりすべきとあり吾儕は幼きときより佛門に入り斯年頃諸國を行脚しはべれどさはがしき世は衣食常に乏ーく飢餓の色あり今其許等の物がたりをきくよ沼島の灘丸とやらんいふ海賊の部下あるよし吾儕も何卒其許等の吹擧をもつて我もその灘丸はしの部下とあり心のまゝよ榮花を極むるとあらば是ひとへに其許等の賜物なり吾儕も法師なれど亂世の中を諸國をめぐりー者なれば些の武術のたしなみはありこれ其處よおわす壯佼のよく去り給ふ所也といふよ鯛六きひて實なりとやおもひけん橘次よ對ひ其許何とかれもひ給ふ彼法師が詞僞りともみえず去あがら大王の命をうけずして私よはゆるゝがたー先縄付のまゝ沼島の岩窟へともなひゆき白地よ言上してうの後兎も角もすべきは奈何にといふよ橘次もつともと点頭に辨慶これをきゝていへらく去からば先其許等も吾儕も志ーは一つなれば則傍輩も同じとなり若き人はいまだ去り給ふまじきが吾儕年ごろ諸國を勸進して貯へたる黄金頭陀袋のうちにありこれを仲間振舞とーて其許等にまいらせんにうの酒を我にも一ぱいのまゝ給へといふに鯛六はまづ頭陀袋の内をあらためるに將ーて詞よ違はず幾枚かの黄金ありければ大きに喜びやがていまゝーめられたる辨慶が傍へ陶茶碗をたゞさへもき酒をのまずるにぞ辨慶は心の中におかしく密一息よぐつと呑くだしはやく肴をあたへよといふに鯛六さし心得てたいをはさみて口にくゝまずれば辨慶は

れをもくらひつくし又々酒を呑せよといそがしたつるに鯛六ハ遽しく茶碗にさけをうつさんとするをいなゝ細々許なる茶碗よてハいとものたりかし陶の口より我口へ呑すべしといふをきゝて鯛六ハ呆れはてさて〳〵我まゝをいふ坊主かなといひつゝ陶の口を辨慶が口へあてがへバ武藏坊快氣に陶の酒をのみつくしうまゝ〳〵と舌打〳〵けるがほどなく傍に仆れて高鼾かいて臥〳〵けるぞ不敵なる左右するひまよ夜も明えなれけれバ鯛六ハやがて遍舟を〳〵つらへ橘次よ對ひいざ共侶に行べしといふよ橘次も心得て辨慶が禪杖をたづさへ辨慶をよび覺して等〳〵く船にのせけれバ鯛六ハ艪櫂をあやどり須臾よして沼島へこぎよせ陸へ上れば橘次ハ右の手に禪杖をたづさへ左の手に武藏坊が繩をとつて歩ませもくよ程なく灘丸が栖家の石門よいたれば鯛六ハさきよ立て門よちかづき門をまもる小賊よ事の次第をかたれバやがて石門を左右へひらき三人をおくへとほす此石門ハ是岩を切ひらき石をもつて扉となしたる物にして要害堅固の形勢なりかゝる類ひの門三重ほどありかくて猶奥まりたる方へとほるにその結構いふばかりなし御簾かけわたしたる廊下あれば漢の大倭の鳥獸を麗しく畫きたる襖あり恰も高貴縉紳の館に異ならずやがて灘丸が居間ともおぼしき庭上よ兩人を引すゆるに辨慶ハ頭をもたげてこれを見あぐれバ上座よハ二疊臺をかうけ褥幾重かをかさねその上よ座したるハ灘丸とおぼ〳〵く色白く月代ながくのバし身よハ熊の皮と錦をはぎ合せたる羽織を着し下よハ袖廣き衣を幾重をも着たり弓手のかたよ鹿の角もて作りたる刀かけよ金ごしらへの二こしをかけ脇息よ臂をもたせ寛々と大さかづきをとりあげ美麗しき女バら四五人を左右よえべらしてこれを相人よ酒くみかハしぬたりけるが末座にて部下の小盜偸とおぼしく或ハ頭を栗のいがのごとく生したる法師またハ惣身よ入痣したる大漢兒なんど車座に圍繞〳〵て酒を呑形勢鯨の百川を吸ふがごとし當時辨慶ハ瞳を定めて灘丸が面を倩見るよまがふかたなく先年二荒山のふもとにてかくまひ得さしたる浪人者なりければ辨慶ハ橘次をかへりみて如何季春這奴こそ其許が讐敵美佐崎とやらんにうたがひなし疾本望をとげ給へといひもあへずゐいやうんと縛めの繩を引ちぎれば橘次ハ心得て禪杖を手にわたすにとるよりはやく一トふりふつて白刃をいだし小脇よかひこみ椽の上におどりあがれバ部下の小賊等ハ辨慶が勇猛よあら膽とられ左右なくハ手をれろさずたゞ顏打まもりて詞なし其時辨慶ハ大の眼を活と見ひらき灘丸を佶とよらまへ汝去る歳下野の國高野の庄のほとりにて金賣橘内が家よいりこみ渠が側室袖衣といふ艶女と姦通し花橘といふ名香を證據として悴橘次と詐り深栖陵之助が娘唐立をめとりあまつさへ橘内袖衣から立等を殺害なし蛙鳴丸の名劍をうばい立のきし曲者ならんそのとき吾僧さる奸

悪の者とあらず辻堂よ汝をかくして追手の難をさけさしたる武藏坊慶辨といふものなりよも見わすれいせざるまじといふよ灘丸つく〳〵見れば奈何よも見おぼえある法師ありければ遽しく袖の上よりとんでおり恩人はやまり玉ふな吾僧こゝにあつて斯海賊をおりしにい最ふかき緣故あり啻一言申べきことありと低頭平身してのぶるよそ橘次も手早く身ごしらへし灘丸よ對ひいかに美佐崎太郎汝室の八島のほとりよて一人の老人を手よかけ拾兩あまりの黃金をうばひとりしとおぼへあらんその老人い則我養父中窪の水四郎といふものなり我こそ三歲のときその水四郎よ助けられし橘内が實子橘次とい我事なり養父實父のうのうへに妻の仇たる太郎爲祐うらと重なる此年月蛙鳴丸を疾わたしいで尋常に名のるべしと床のうへにおどりあがれば部下の小賊等いこれを見て得器々々をひつさげ橘次に立對はんとする爲体よ辨慶い長刀をおつとりのべて小賊を礙と白眼へ汝等我を誰とかおもふ西塔の武藏坊辨慶といふあら法師なるぞ我義弟橘次季春倶不戴天の仇を討んとするときにあたつてさまたげひろがゞ辨慶が此長刀のさびとなさんといひもあへず薙刀をふりまわすよと見へけるが先よすゝみ〳〵小賊が頭いたちまち打おとされ風に木の葉をちらすがごとく破亂離々々と席上にどびちりけれゞのこりの輩叶はぬもるせとゆひさまよあとをも見ず〳〵にぼゆきぬ美佐崎太郎い此形勢を見てもはやのがれがたしとやおもひけん御立あがりいかよも我こそ海上の灘丸とい假の名實い平家の浪人美佐崎太郎爲祐といふ者なり先年金賈橘内が家に寄食せし折から室の八島のほとりにて不意手に入りし花橘の名香をもつて渠が實子橘次と詐り首尾能から立をめとりしに袖衣が嫉妬より綽露顯よおよばんとせしゆへ不便おがら橘内ばじめそで衣から立等をも手よかけたり又りの以前室の八島にて賤の老人をころし十兩あまりの黃金をうゞひしことありけりさていその老人も汝が養父水四郎とやらんよてありけるか此うへい辨慶もろとも返り討なるぞかくごせよと刀おつとりぬきはなし切てかゝれゞ此方も心得たりとぬき合せ丁々發矢ときりむすぶ不測やそら俄塡よかきくもり何處ともなく數万の蛙聲と合してなきつるに橘次い信と白及よ目をつけ阿羅いぶかしや時ならぬに蛙のもろごへさてい太郎が帶せし刀い家の重寶蛙鳴丸にうたがひなしとく〳〵こあたへわたすべしといらつてうつを楚かとめ奈何よも汝が推量のごとくこの刀こそ汝が實父橘内を殺害あしてうばひとつたる蛙鳴丸父の刀でいさぎよく最期をとげよと切つくるを右にうけつ左にさゝへ霎時がほどいたゝかひしがいかでゝ孝子の太刀さきに歇すべき大喝一聲さけぶよと見へ〳〵がたちまち頭を打おとせゞこいあやしや灘丸が首級高くあがり眼を怒ら〳〵橘次めがけてとびかゝるを身をひらいて刀をもて横さまよ薙け

れハ首ハ床の間よりありける印子の鯉魚の置物よくらひつきーぞおそろしゝれ橘次ハ立より灘丸が首を引はなちやがて懐中より橘内水四郎から立等が改名をとりいだー机の上よのせて首級を手向何とぞ父尊靈うらみをはらし成佛得脱なし玉へとしばしがあいだ念じ終り蛙鳴丸をとつて打かへしみて今の奇特を見るからハうたがひもなき我家の重寶あらんとやがて鞘におさめけれハ蛙のこゑハやみよける辨慶ハかの鯉魚の置物を手にとりあげつらくく見るに寶よも生るごがとくにしてなみくの品よあらざりけれハ鯛六をとらへていふやう汝ハ灘丸が腹心の者とおぼしきに此置物の來歴をもしりつらんが何處より得て奈何なる由來やある密に緣故をかたるべしといふよ鯛六ふるひくいふやうされば候此鯉魚の置物ハ唐土玄宗皇帝の秘藏ー玉ひ沈香亭にありける所のものありしが故あつて近頃來舶したるを灘丸りの船をおうひてうばひとり常よかたハらをはなさず愛翫せしものなればその一念頭よとゞまりて此置物にくらひつきしならんと舌をまひておそるゝに辨慶ハからくとゝらひ汝ハ昨夜吾に酒をあたへたる恩あらば命をたすけ返ずなれハ此後心をあらためて正民となるべしとやがて彼處此處にかくれぬたる盜人等を尋づねいだしことくく殺しつくしけるに許多乃女ばら辨慶橘次がまへよひざまづき口をそろへていへらく妾等ハ皆これ夫とわかれ父母よはなれ灘丸がためよ

勾引されて詮術なく爰よとゞまりつらき月日をすごせー者どもなれば何とぞ故郷へ歸ー給ハらばありがたくこそ侍るかしとなみだとともにねがふよぞ兩人ハ見ぬ異邦の白猿洞日の本の大江山の俤もろくやとばかりおもはれけれハ辨慶ハあはれを催ふし心まかせに故郷に還るべしもはや此所に捕ハれし者ハ汝等のみなりやと問ふよ女ばら答て然れハ此四五日さきにとらハれきたりし一人の娘はべるがいかよ責らるれども主人灘丸が心よ去たがハざるをもつて彼處の一間の裡にれしこめられて居れり最不便のことに候かしといふにやがて辨慶橘次ハ等しく彼一間に行てミるに衣服もいやーから沁處女髪もみだれーまゝよて高手小手にいましめられ傍の柱よくゝしつけられふし轉びてなきゐたり今辨慶等がきたるを見て命もとらるゝをよと身をちゞめて伏ゐたるに兩人ハちろくすゝみいましめをときたすけおこしていへらく我々ハ盜賊のたくひよあらず此岩窟の棟梁灘丸といふ者ハ年來の仇あるよよつて今將討とりその外小賊も鏖よなし廢てありし女輩をもことゝく故郷へかへーつかハすなり容子をきくよ其許ハいまだ此ほどとらへられてきたり灘丸がためにはづかしめられざるよし寔よこれ辛ひのはなはだしきなり疾々故郷へゝへしまいらせんが那里奈何なる人の娘よておはすやととハれで漸々首をもたけさでハ左樣の人々よて侍らひしか妾ハ津の國淺澤といふところある岸の

左衛門匡博が女姫松とよばるゝ者なり妾が父左衛門ハ大江の匡房公の末葉よりて代々文章博士の家系なりしが近來世の中さわがしきをもて父匡博ハ病と披露して淺澤小野の里よ退隱し風月を友となして浮世のをよかゝつらわずこたび妾を倶して摩耶詣でせんとゝきたりしよ不圖も此島なる盗賊よとらへられこのところへ誘ひあるじが心に云たがへよとさま〳〵にせめさいなめどたとひ此身ハ死すればとてこゝろけがれし盗賊のためよ肌身を汚すことかはとすでに覺悟ーはべりしにかく情ふかきに方よすくハれふたゝび父母の面を見るとあらば歡び是にまさるとなしとうれしなみだよかきくるれバ橘次ハきゝて大きよ骸ささてハ岸の左衛門匡博君のに娘よてれわしけるか君ハ忘ろしめすまじきが吾養父下野の國室の八島ある中窪の水四郎といふ者ハ若冠のをりから岸の家よ仕へゆつき惠ミを蒙りし者なるよしハ養父が寐覺よ物がたりしをもつて我よくこれを云れり實よ我々不意も主家の令娘をすくひまいらすると離せぬ三世の奇緣なるべし吾儕これより故郷下野へかへる道すがら君のに家までおくりとゞけ參らせんとゝきゝて姫松ハ手を合せて二人をふしおがみぬ辨慶ハ尙鯛六に指揮して岩窟の隈々をさがし覓めさーつ灘丸がたくハへおきし黄白財寶をとりいだしてれを女ばらと鯛六よわたちあたへその他衣服調度のたぐひをばこと〳〵く海中へ投し金ハ山に藏し玉ハ淵よ沈づむと吾ハ

徴來三界無滝の境界なれば金銀珠玉を見ることゝ瓦礫よひとーまた橘次ぬーハ世よきれなる富家あればけがれし者の手にふれし寶を何かせん此鯉魚の置物も這奴がふかく念をかけしものときけハ此世にとゞめて益なし得がたき物を寶とせずたゞ善をもつて寶とすとハ聖賢のおしへなりといひさま印子の鯉魚をとつて海へざんぶとおけ入れしよ不思議やそら猛よ結陰り鯉魚ハ生るがごとく鰭をうごかし波の上を二三度游ぎめぐりこおたへ對つて口をひらくよと見えけるが一道の白氣陰々と立昇るなかに灘丸がすがた彷彿とあらハれ此人々を信とにらまへけれバ姫松ハ此形相を見て苦とさけびて仆れふしぬ辨慶ハ小癪なる兇賊かな汝生るとささへ叶ハざるよ死ーて障化をあさんなどゝハ嗚呼がましと長刀をもつて切りはらひけれバ形ハ消べて鯉魚のすがたも海中よしづみあとなくなりぬ斯りければ兩人ハ慌わしく姫松を扶けおこしさま〳〵介抱ーけれバ漸やく人心地つきけるよそこれと鯛六よ屁せうの外の女ばらと倶ー て岩窟を立いであとへハ火をはあちこと〳〵くこれを燒きうしなひ共侶よ海邊にいてまず辨慶橘次姫松等船に打のれば鯛六ハ艪をおしつゝ舞子の濱よつきぬやがてきた辨慶が指揮よまかせ鯛六ハ船をこぎかへし屠れの女ばらを船にのせふたゝびこおたへわたーければ打喜ぶことゝりなく辨慶橘次よあつく禮をのべ姫まつよりかれをつげておのがさま〳〵立さりぬか

くて辨慶ハ橘次ヨ對ひ我ハなを此ほとりヨ立去のびて師父觀慶阿闍梨をすくひまいらすべければ其許ハ一刻もはやく姫松どのを送りとゞけ故郷へかへり復讐のよ〜をかたりよろこバせ玉ハんこそ肝要なりといふに橘次ハ頭を左右りヨ打搖りいな〜我こたび年頃の宿志をとげ〜も全く其許の扶助ヨよるものなれバ我も又物の數にハはべらねど死力を盡〜てなりとも阿闍梨をすくひいだしまいらせんといふヨ辨慶ハきゝもあへずうの志〜ハ然るとおがら阿闍梨をすくハんにハ其許の力をかるにおよバず我一人ヨて事たれり却て助太刀の者あるときハ何かのさまたげなればかならず心を勞したまハずとく〜故郷へおもむき玉ヘ又再會のときあるべ〜といふヨ橘次も今ハ詮かたなくさハとてやがて姫松に旅の支度を調へさ〜辨慶にいとまをつげ舞子の濱を立いで、淺澤の郷へいそぎけるかくてその日も夕ぐれちかくなる頃ほひ武庫山の麓をよぎるをりから並木の松の小蔭より大勢の人聲して山賊をとりなよがしぞとてんでヨ竹鎗をひねり得物々々を引さげあらハれいで、橘次をなかにおつとりこめ女をとたせと詈つたり畢竟此黨ハ何等の人ぞそハ下回の分解を聞け

武藏坊辨慶物語卷之八終

第十七回

武庫の麓ヨ孝子盜賊と疑がハる
明石の浦に英雄二兒を懲らす

實にや海の穗ヨも怖るハ落人のならひとやらんそれヨハあらで橘次季春ハ今大勢の者ヨとりかこまれ意の中におもへらく是全く灘丸が黨類のさきへまハりて爰ヨ埋伏して我們をさへぎりとゞむるにてやあらんずらんと姫まつを後ヨかこひ刀の柄に手をかけて佶とにらまへ何奴なれバ黄昏におよんで道もく人の足をとゞめ盜賊の勾引のと詈る汝等こそかへつて老馬賊小客ならん疾道と開て通さずバ目に物見せんと敦圉あらく詈るにぞ先ヨすゝみし漢兒からく〜と嘲わらひ吾們を盜賊なりとハ舌あがし汝が後ヨ在る女こそ我娘にして五日以前に此ほとりヨて見うしなひたりおもふに汝その娘を勾引して遠き縣ヨ沽却〜夜寐遊君のたぐひにせんとの伎倆ならんうれしもへよこそ吾此輩を雇ひて四五日以來遠近を探しもとめ〜ヨ今また此所ヨて遇へるハ天命の去からしむる所ならんか疾々娘をとたせよとよバハる聲ヨ姫松ハ橘次のうしろよりおそる〜覗き見るヨ賽ふべやうもあらぬ我父左衛門匡博にてありければ且おど

ろき且よろこび喃家舟大人かならず珊爾ー給ひぞ此御方ハ金貫橘次ぬしとて妾が爲の恩人よ
はべるかしといひつゝ前にいづるに岸の左衛門ハ姫松を見て大きよ怡びそハ何とかいふ此御
方ハ盜賊勾引よハあらで其許がための恩人なりとハ奈何なるゆへぞとくかたるべしといふに
姫まつハうれしなみだをはらひ沼島の灘丸といふ海賊の爲に辱ハれ殆々死なんと覺悟極めし
折からてれなる橘次ぬしまた武藏坊辨慶といふ二個の豪傑かの灘丸をころし妾が危難をすく
ひ給ハり故郷へおくりとゞけたまハらんと倡なわれしありと辭せわしく物がたるよ匡博ハき
ひて大きよおどろき遽しく橘次に對ひて一揖し吾儕眼ありながらかゝる豪傑と知らず不禮の
段をいくゑよも御赦ー給へかー先共侶よ我客舍へきたり給へ恕々と禮をもナべーといふよ
橘次も同じく禮と返し吾儕も名のれば君の家にハ些の所緣なきにーもあらずそハ絆ながふし
て立ながらかたるべきにあらねばまづ君の舍りへまいりなんときひて左衛門ハ打点頭さきよ
立て案内するよ大勢の者ハ弓矢竹鑓の類をたづさへうちどよめきてあとに從ひ大物がうしの
岸の左衛門の舍りよつきぬかゝりけるほどよ匡博ハ酒肴をとゝのへてまづ橘次に勸めけるよ
ぞ季春ハりの惠みを謝しつゝ我身のうへ人のうへ何くれとなくすべて此度復讐の顚末より義
父水四郎といふ者岸の家にハ恩をうけたる者なりといふことまでおちもなく物かたりけれバ

匡博ハ掌をうつて大きよおどろき迭にその奇遇を感じけるかくてうの次の日よいたりければ
岸の左衛門ハ姫松橘次その外奴僕等を將て大物のうらを立出けるよ橘次ハ心もせけバまたて
そと再會の期を約し左衛門親子が引とゞむるをふりそらひ故郷下野へというさけるがすでに
本國にもなりければまづ陵之助が許にいたり武藏坊辨慶といふ者の扶助よよつて此度沼島に
おいて首尾よく歆太郎爲祐を討とりーはじめをいへバ箇樣々々と安達が原よて畊作法師が庵
室に舍りと覓めしより五條の橋にて千人ぎりとなーー義經公よ値遇したてまつり共侶に奥州へ
くだりしとき此邊りをも過りしかどいまた本望をとげざりしゆへわざと立寄ざりし怠りをの
べそれより彼熊坂が部下のおーへにまかせまたはるゝ〳〵と西國におもむき此度仇を討蛙鳴丸
をとりかへせし終りをいへば云々と詳にかたりけれバ光重常世等ハ去きりにその功を稱へ慢
に辨慶が義心を感じやがて父橘内が遺跡を相續なし常世と中陸じく陵之助に孝を尽し男女數
多の子をもうけ日にまし家富榮えぬ話もとへうへるさても觀慶阿闍梨を見送りの役人たる難
波瀬の尾の兩人ハ此ほど日毎に風あれて船をいだすをならざりしかバ心おらずもあかしの浦
に五六日があいだ船がゝりしてありけるが今宵ハ欠しぶりにて空うらゝかに風もなく去かも
十五日の夜にして千里の外まではれわたり翌ハいよ〳〵纜をとかんと水主楫取等を聚ひて酒

宴を催ふしわらひさゝめきてゐたりけるが阿闍梨ハひとりみよしの方に立出たまひ心ゑづゝよ普文品を讀誦しておわせしがはや夜も深々と更わたり人聲も止み只磯うつ波の音のみ嵐しく最物すごきに阿闍梨ハ倩中空を打ながめ寶や寶相眞女の日輪ハ生死長夜の闇を照らし本有常住の月輪ハ無明煩惱の雲をはらふと我幼きより佛門に入ながらかゝる無實の罪を得ることゝ奈何なる宿世の業因ならん此世ハ假の火宅の住居只後の世の闇路をハ照させ玉へと獨言おもひがけなき後の方にあらハれ出し難波瀬の尾阿闍梨の腕を兩方より無手とつて佶とにらまへ奈何觀慶汝ハ原源氏の余類なれハよしや法師なれハとて何奈なるとを爲出さんもゑれざれハ縞に船中にて失へよと重衡卿の言ひつけあれど兎に角になみだもろくて今宵までハ黙止たるが最早雨もはれたれハ翌ハいよ〳〵纜をときて船出せんとおもふあれば今ハ助けれきがたしときひて阿闍梨ハおどろき玉ふけしきもなく彼も是も過去の定業ならめとおもへハ何をかゑへ何をか歎かんいかにも汝等がために殺さるべし然ハいへ今讀かけし普文品もはやすこしよて終りなれハ何卒終るまでゑばしの猶豫なしくれよと宣ふに經遠かね安ゑぶ〳〵これを諾なひさハかりのとハ免し得させんに疾その經を讀むべしと最期を催す無道の辟阿闍梨ハ經卷手にとりあげ聲高やかよ讀誦してすでに刀刃段々壞といふ句にいたるをりから二人ハ齊しく

目くハせなし物をもいはずひらめかす刃のひかりハ電光石火あわやゑ見るまにこハいかに板子をはねあげ一人の法師あらはれいで刀を持たるなんばの次郎が利腕とつて傍へなげのけ瀬の尾が襟がみとるよりはやく頭轉撞三間ハかり投ばし二王立に立たるにぞ阿闍梨ハ大きにおどろき抑何人がいつの間にこゝに來つて吾此危急をすくへるハいかなる佛菩薩にやと先ゥの打扮を纏すに脊たかく色白き一人の大法師身にハ鼠木綿の布子の裾みじかきをはせをり上にハ黒き麻の衣の袖をたかくかゝげ馬手よ一根の禪杖をわきばさんで立たる形相金剛神のあれたるごとく遒れの英雄豪傑とこそ見へよけるそのとき阿闍梨ハつら〳〵その面を見給ふにこれ別人よあらず絶て久しき武藏坊辨慶にてありけれハ愕然としてやよ其許ハ生佛の辨慶ならずや其許ハ去る歳叡嶽をいでゝ東の方へおもむきしと風のたよりよきゝしのみうの後さらに音信もなかりしにいかゞして吾此度の横難をゑりはる〳〵こゝに來つて今此危急をすくふとつきせぬ師弟の名にしなれと宣もふ詞に辨慶ハ阿闍梨のほとりに蹲踞きこれまでの身の上のをを說と一ぺんにして今宵とも船にゑのび難波瀬の尾が酒宴のまぎれにひそかに船にとびのり板子の下にかゞみて最前よりの容子ハのこらずきけり吾今宵しのびいらずば師父ハ這奴等が毒手に死したもふべかりしを憖危しくと萬般介抱するひまに漸く經遠兼安等ハおき上

りうたれたるこしをさすり戰へるはの根をかみしめて辨慶に對ひ汝ハ何奴なれバ我們に斯からきめを見するぞ疾六波羅へつれ行てその罪を糺すべきぞと恐るゝいひけれバ辨慶ハがらゝと嘲わらひ汝等ハ清盛をおぢおそるべけれど我ハかへつて恐ろしからず抑我を誰かと思ふ熊野の別當辨正が一子に武藏坊辨慶といふ者にして則是なる阿闍梨の徒第なり今にもあれ御曹子義經公の旗あげしたもふときく時ハ第一番にとせ加ハり真先にすゝんで清盛が坊主首引き拔きてくれんずものを我今汝等をころし阿闍梨をすくひ何國へも倡ひたてまつらんとハ最易しといへども清盛が命ハ一天の君の勅諚もおおじく且神童のおしへもあれバ師父をも伴ハずまた汝が命をもとらずその代りにハ汝等今日より心をあらため師父をいたはり配所まで送りとゝくべし倘少しにても惡心をさしハさむとあらば我此禪杖忽長刀となりて汝が頭を刎べし是みよかしといひさま振まわすよと見にしが明晃々たる白刃棒の中よりひらめきいでゝ長刀に彷彿たり難波瀬の尾ハ此形勢を見て膽をけし辨慶がまへにひざまづきていへらく今宵私に阿闍梨をうしなひたてまつらんとせしを全く我々が私あらずさりとて又重衡がいひ付にもさうらハず是ハかの五條大納言邦綱卿吾娘雄蝶の前の寵愛の衰んをおそれて叡山の豪雲僧都といふ惡僧をかたらひ雌蝶のまへが懷胎ば賤しき者の胤なりと流言さしまた書寫山の觀慶阿闍梨ハ雌蝶のまへにたのまれて雄蝶のまへが腹ある子を調伏なすと世にうたハせしも皆是邦綱と豪雲がいひ合せなりと去り給ハざる重衡卿一圖に雌蝶のまへをうとみ家臣平左衛門の尉といふ者にいひつけて松の尾山の奥にて窃に害しまた阿闍梨をバ我々に仰せてからめとらせすでに重き刑に行なハるべかりしを小松どのゝ諫言に是非なく配流に極まりしおりから邦綱卿竊びやかに吾們兩人をめしてかの觀慶といふやつこそ正しく源氏の余類なれば生おかば平家を呪詛調伏なさんを顯然たれバかならず備中の國へゆく船の内よて人しれずうしなふべし重衡のまへをバ吾よきに計らはんと我々よ過分の黄金を賜りゝゆへ我々その黄金ゑ眼くらまかゝる邪非道を行んとせゝかど命にかゝる實なし啻此うへハつゝがなく阿闍梨を配所までおくりとゞけまいらせんと審に吐實したりけれバ辨慶ハ齒をくひしばり眼を見ハり洛の方を屹とにらまへ邦綱めハ己が娘の愛まれぼれて不義をはたらく所謂水猴にして冠する山猿公家ともおもふべきが豪雲ハ出家よありながらかゝる非道の伎倆に組なずとそ憎みてもにくむべきの惡僧かな我暫つて這奴等を此長刀にかけずバ天下の豪傑に笑わるべしそハ兎も角も汝等愈今より野心をさゝはさまず師父をれくりたてまつれよ我も備前の國岡山の泊迄共侶に行べゝといふに難波瀬尾ハ心のうちよ戀恠おもへど詮術なく唯々と應へ只管弁慶に媚るに弁慶

い二人に對ひ我霄より板子の下にしのびゐたれば身体すべてひえこゞへたりはやく酒をあたゝめて持きたるべしといふに難波瀬尾い推辭によりなくやがて酒をあたゝめ肴をそへて持きたりければ辨慶い大いに喜び大さかづきよりてつゞけさまに三四杯を傾け最快氣よ佃劉ひて難波よ對ひ汝いこゝへきたり我足をひねるべし瀬尾いまた阿闍梨の肩をやわらげてまゐらせよといふに兩人い心中よいかりをふくむといへども辨慶が勇氣におそれて倘推辭ばいかなる憂目に逢わんといふが隨意奴僕のごとく足をさすりかたをもみて恥辱をもかへりみず媚諂ひし氣味よけれ斯て翌朝追風ありけるにぞあかしのうらを出帆して備前の國岡山に着けるこゝよりい備中の國へい陸地を往をよりて人家も多くあればもはや這奴等も阿闍梨を殺さんともなすまじければ配所までおくりたてまつらんも流石にはゞかりあれば名殘い尽まいらせねどこゝよりて別れ奉るべし御身よ御山の麓よで會し神童の告によるときい師父配所よおもむき給ふとも幾ほどもなく歸鄉したまふべしとときひたればかならずしも御身をいたいり時節の至るを待給へかしと雨々と歎きければ阿闍梨も感涙をぬぐひあへず汝い幼き頃魯鈍よして經卷をも誦せずたゞひろあがきのみ月日をすごせしゆへ人皆出家よい得なるまじと疎み半成ど我ずこぶる見る所あるがゆへよりのまゝにて捨置しが將して此期よおよびて命を塵芥の如く輕んじて我窮難をすくふと不思議の因緣ならあ此後もかならず義經公よ仕へ軍陣よおもむくともも血氣の勇よ誇らず吾が名の武きを殲すの文字をわするべからずと諄々と敎へたもふよ辨慶い委細承諾してやがて難波瀬の尾よ對ひこれよりよぐ〳〵阿闍梨といたいり誘ひ參らすべし倘師父の身の上に凶事ありときくときいもれ何處にありともたちまちはせ來つて吾此殺人劍汝等が首を切るべし汝等が首い汝等にあづけつかいすなりといひつゝすでよ船よう上らんとせしが傍らよ横たへあり〜二抱やもあるらんとおぼしき帆柱を見て兩人よ對ひ汝等が頭と此帆柱とい何れか堅からんといふよ難波瀬尾口をそろへていふやう我々が頭少〜く骨ありといへども爭か此帆柱におよぶべきといまだいひも終らざるよ辨慶い拳をかためて帆柱の眞中を確と擊ふさしも太やかなる帆柱ぽつきと二ツよ折れければ經遠兼安はじめとして船中の人々膽をけしさてもおそろしき怪力かなと舌をふるい色をうしおいざる者一人もなし當時武藏坊慂爾と打笑み我こぶしなりとて鉄よて造りしにもあらず汝等と齊しく父母の血肉おりされど一心凝るときい此帆柱の水いものかい鉄石をも打碎く是所謂虎と見て石に立矢もありとやらん吾今單騎よして見るかげもなき乞食頭陀の境界なれど一心こるときい平家の强敵を打亡さんとかくのごとし汝等洛へ歸らば主人清盛重衡等に斯とつげよと大音聲よ罵りつゝやがて船よ

りあがりふたゝび洛の方へ赴きぬ

第十八回

勇名を留る辨慶が擂荷堂
恥辱を晒す豪雲西塔橋

偖も辨慶ハ岡山より阿闍梨よわかれつゝ〳〵おもひめぐらしけるハ去るにても憎きハ豪雲僧都かれ我今より叡山よおもむき這奴が首引ぬいて師父が怨をはらすべしと洛へいそぎけるがほどなく舞子の濱なる彼の蒙汗酒屋の鯛六が店のまへを過りければ鯛六ハ辨慶と見るよりはしりいでゝひざまづき師父恙なくて還り給ひしやたちよりて悠々労れをやすめ給へと懇よ引とゞめければ辨慶ハ程よいりて過し夜我おもふごとく船よ竊びいり難波瀬尾等を懲して阿闍梨の危窮をすくひ絆ゆへなく岡山の泊まで送りまいらせて立かへる道ありとかたりければ鯛六ハきいてます〳〵その智勇を感歎してやまず左右するひまに酒をあたゝめ肴どりへて持きたり何ハなくとも一盃を傾けて寒さを凌ぎ給へかしと吾儕ハ嚮の日師父の敎戒よりて斷つり心をあらため實の商人となりたれど倘や怪しみ給わんも影護ければ毒味してまいらせんとまづさかづきをあげて一盃を傾け肴をもくいてのち辨慶よすゝめければ辨慶ハ打わらひ汝今なを野心ありて我よ例の蒙汗酒なんどをあたへんとするときハ我汝が五音の調子よよつて是をしるを何より易しなどて汝をうたがふべきといと心よげよ敬盃を傾けその夜ハ其處にどゝまりけるしかるに其夜より辨慶ハ瘧といふ病に冒されて打臥しければ鯛六ハおどろき兵庫の町へいもきて藥を買ひとゝのへなどして最正首ゝしく看病等閑ならざりける實にや絶世の豪傑も病といへる兵にハ敵しがたくこゝに臥すと廿日あまりにして漸く全快しければ今ハ心易しと主に此ほどよりの恩を謝しこゝを立出で洛へといそぎける是より先難波の次郎瀬の尾の太郎の両人ハ觀慶阿闍梨を備中の國なる配所まで送りとゞけて洛へ立かへり竊に邦綱卿の許いゆきて明石よての顚末をかたり最面なげよ武藏坊辨慶といふ荒法師よさまたげられて詮術なく阿闍梨をとろし得ざりしとを告るにぞ邦綱卿も本意を失ふとハへども猶觀慶を害せん計いくばくもあるべしとて止にけるがこの事を彼豪雲僧都が許へもいひ送りければ豪雲聞てかの武藏坊といへるハ一山よもてあまたるほどの荒法師なれバさもありなん倘や其うらみを報ハんとて當山へきたらんも計りがたしかならず通すとなかれと嚴しくいひ付おきけるが果して四五日すぐると大の法師禪杖をつきたて豪雲僧都が許よきたりすでに門を入らんとするに門守遮りとゞめて何者なりやとトとがむるに辨慶ハ聲をあらゝげ汝ハ近頃こゝに來りし者ならん吾ハ久しく此西塔よありし武藏坊辨慶といふ者なり豪雲僧都に對面したきとありてわ

ざくと登山せりそやく通さるべーといふ面色たゞごとならずとみへければ門守の漢色をうしなひ奥へよげ入り僧都よ斯とつげければ豪雲大きよ怖れ扨こう我思ふよ違わず這奴師匠のうらみを晴さんとて來りし者なるべー留守なりと答へよといひて奥のざしきよ隠れてゐたりければやがて門守ハ此よしを辨慶よいひけれバ辨慶ハ大の眼を活と見ひらき豪実他行したらんよハ嚮に我門に入らんとせしときに他行のよしをいふべきに奥よ入てふたゝび出きたりて斯いふハ正ーく内よありながら留守をつかふと覺えたりよしくその義ならバ家さがーをしてくれんと禪杖を小脇よかいこみのつさくと草鞋のまゝよて玄關よりあがりけれども八々辨慶が勇猛におりれて誰咎むる者もなー豪雲いこれをみて履ものをもとかず慌忙き庭の口より逃いで西塔なる廻廊の裡に身を潜め息をこらしてゐたりける辨慶ハ本堂客殿庫裏僧坊のこる隈なく探ーもとむるといへども豪雲がかげだに見えざりけれバさてハ這奴いちはやくもよげ出しものなるべーよーや汝目蓮が鉢の子よかくるゝの術を得たりともいかでか我明らかなる天眼通をもつてたゞね出さで置べきかと獅子王の荒たるごとく普く堂宇をさがせども居らずと見れバ向ふの廻廊の右の階の上に土よまゝれー足あとつきてありければさてハ賣僧め此堂の裡よかくれしようたがひなーと勢直よはしりよりて大音聲よ罵りけるハ已豪雲かバかりの堂の裡よ隠るゝとも我二ッの堂もろとも擂ひで返らんこと最易しと廻廊の下よ肩を入れて曳哉うんと擡げければ廻廊ハめりくと音ーて左右の小堂軒傾き甍ぐるらりと落てすでに倒るべくぞ見えけるハ恐ろーかりける勇力なり今なを西塔にある所の辨慶が荷擂堂是なり豪雲今ハたまりかね内よりとんでいづるを辨慶ハ猿臂をのバーて無手と捕へ此所にて刑伐なさんハ靈場をけがすのおそれありこなたへ來よといひさまに嬰兒をあつかふごとく弓手よ首すじをかいつかみ馬手に禪杖をひきばさみ疾風のごとく山を下りやがて西塔橘にありければまづ豪雲を傍なる樹木にくゝーつけ汝我師父を讒ー殺さんとまでなしたるを罪ハその身よおぼへあらん首引ぬきてくれんずとおもへど過し日くれくも師父の教訓に汝が名の武藏の文字をひするなと示し給ひーー辭あれバ僅よその一命をば助け得さするなり然あれ先の日此長刀の錆となさんと誓ひたる白刃のてまへいひもけなければ汝が耳鼻をそぎて世人の見せしめよなすべーとやがて長刀を持かへ豪雲が耳鼻をそぎければ豪雲ハ苦痛に絶ずゆるし玉へくとさけぶにぞ耳鼻より鮮血さつとほどバしり見るもいぶせき形相なり辨慶ハ此爲躰をみて快ーくと手をうつてわらひ又長刀をもつて傍の松の木の幹をおしけづり墨斗とりいだし墨ぐろに

形ハ釋迦の御弟子に似て行ハ提婆が惡よりも甚〳〵く姿い圓頂緇衣よありあがら心ハ虎狼野干よ等し今ハさゝが其惡を懲らさんと六根を不具あら〳〵め此木よくゝ〳〵つけて永く無間の苦を受し心早く烏和尚きたつて道奴が引導をもたゝ〳〵狼の長老來て五尺の身を服中に埋葬せよと云々

月　日

武藏坊辨慶書

と筆太に書る〳〵共ま、何處ともあく立去りけるかくて往來の人一人見つて二人見つけ後よハ蟻のごとくあつまり騷散動めきて是を見物し或ハ豪雲が暴惡を憎みあるひハ辨慶が强勇をたゝへ囂々としてやまず此噂たちまち一山よきこへければ叡山の座主聞〳〵めし直ゝ豪雲をとらへ〳〵めて其子細を責問ふよ豪雲深く已が惡事をつゝみ書寫山の觀慶が弟子たる辨慶といへる者阿闍梨が罪を犯して謫せられ〳〵を吾讒言せしと僻おぼえ〳〵て理不尽よ山よ登り靈場をふみあら〳〵剩へ吾僧をとらへて斯耳鼻をうばゝといふ詞さへ鼻へぬけ衆徒等も腹をかゝへけり座主遂一きこ〳〵め〳〵書寫山の觀慶が徒弟に辨慶とかいへるあら法師西塔よありしよしい我も粗きけり然ハいへ辨慶なりとて故もなきよ當山へきたり斯狼籍ハあすゆじ彼是もつて豪雲罪な〳〵といふべからず何ハともあれ斯五躰不具とありし者ハ山へとゞむるを難しとて即時よ西塔

橋より追放よおよびければ豪雲ハ口おしきとかぎりあしといへども詮術なくさして行べきかたもなく彼處此處に一夜二夜とあかしくらしけれど今ハそや朝夕の糧よも尽ければ些の力量あるにまかせ夜なよゝ遠近に出て白挺强盜をなし其日を送るうちにも辨慶が踪跡を探し此うらみをそらさばやとおもひもつぱら心をつけてたづねける去るほどよ辨慶ハ迚ものとよかの五條大納言をも捕へて怨を返さばやと洛の邊りにかくれて間あく時なく邦綱が外にいづるとつけねらふといへども邦綱もまた辨慶が爲よ羞かしめられんとを怖れて絶て漫行をせざりしかゝ辨慶ハさらよ其便を得ず百日ばかりを過せしが誰いふとなく武藏坊辨慶といふ豪傑先にハ五條の橋におゐて千人ぎりをふし此頃また大ひに叡山を鬧し豪雲といへる惡僧を懲らしたりなど巷談街説まちく〳〵なりければ平家にハこれをきゝて易からぬとよおもひ嚴しく詮義ありければ辨慶も今ハ都に足をとゞめがたく些の知音あるとたよりて泉州堺の方へおもむかばやと夜をこめて洛を立出八幡越よぞさしかゝりぬ

武藏坊辨慶物語卷之九終

第十九回

阿部野街道に辨慶衆賊を鏖殺にす
淺澤第宅に姫松鯉魚の怪を惱さる

武藏坊ハ頻に道を急ぐものから洛を出て足に任せ八幡を越橋本の邊りよさしかゝるよ時ハ將よ冬の末にして寒風はげしく空かき曇りて雪さへちらく〳〵と降出し寒さたえがたく手足もこゞへ殆々行なやゝしよ遙あなたに燈の光り見えけれバ扨ハ人家よやとうれしく近くよりて見るよ人家にハあらで只在る山蔭よ雲のごとき大漢兒車座に居ならび枯枝をあつめ焚火して居りつ辨慶ハ是を見て這奴們ハ定めて野武士山客の類よして此山路よ網を張て往來の旅客を俟なるべし何程の事やあらんと禹歩ふあゆみよりて大勢よ對ひ愚僧ハ叡山の者なるが俄頃よ和泉の方へ要事ありて斯夜を冒して赴くものなるが寒さに耐がたくて頗る難義よおよべり何卒暫時が間其火よあたらせて玉ハるべしといひかけて大勢の中へわつて入れば山客們ハ呆れはて〻辨慶が爲体を熟と打ながめつ〻片よりて火よあたらするよ辨慶ハ大きよ歡びこハ忝あしと兩足をふみ出し火をかきれこして居たるよ其うちよ一人手拭もて深く面をつゝみたる者武藏坊が形相を看視て汝ハ武藏坊辨慶ならずや奈何豪雲を見忘れしか去る日の恨を返さんと此日頃汝を待を既よ久〳〵と手拭をかなぐり捨る面を見れバ日外耳鼻をそぎたる西塔の豪雲僧都おり弁慶呵々と嘲笑ひ汝佛弟子の身を以て罪なき人を罪よおとす惡業たちまち其身よ報ひ三世の諸佛我手を借て汝を罰したまふ是因果敵面の道理なるといまだ悟ず却て我を恨む是僻の甚だしきならずやと從容と〳〵て驚かず尙悠々と火よ當りて居たりけるよ豪雲ハ左右の應へハおく傍の人々に向ひ豫て其許等よ語りたる我深き仇敵ハ這奴なり疾我を扶て打殺したまハるべしといふ言下よ大勢の山客等心得たりと一同に拔連て斫てかゝるよ辨慶ハ絆ともせず小癪なる蠢出めら無益の殺生とハ思へども飛で燈よ入る夏の虫みづから來て死を招くうへからハ跡へハ引ぬ天窓役引導わたしてくれんずと長刀を車輪のごとく廻して多勢を相手よ切結ぶよはや焚火も消がてゝあるよ雪をあかりよ追つまくりつ戰ひ〳〵が素より野武士山客の類なれば爭か辨慶が修練よおよぶべき忽閃かす長刀の光りと俱よ豪雲ハ二段よなつて仆れ伏ぬ殘る黨ハ是を見て逃んとするを此首彼首よ追つめ終よ悉く討取り一息吻とつぎて雪を掴んで咽をゝめし頓て荷物を肩よ引かけ禪杖を携へ泉州の方へ急ぐほどにゆき〳〵て其夜の七ツすぎとも思しき頃阿部野街道よさ〳〵かゝるよ尙雪ハ去きりに降つもりて野も山も只是一面の銀を去

きならべたるがごとく寒さたへがたきまで只在農家の門邊を過りしまに裡まで人聲しければ少刻勞を休て往べやと頓て内に入て見るまに二人の漢兒地爐の端まに酒酌かい〜て居たりければ辨慶ハ大きまに歡び愚僧ハ往來の者なるが雪中の道まに行なやめり價ハ望まにまかせてまゐらせんまに其酒を一盃わかちあたへ玉へれといふまに主人の漢兒聞て大に怒り我々さへ足じとおもふ酒を爭か汝まに分ちあたふべきみれば法師の身にして飲酒ハ五戒の第一を聞に凡俗の我々まに對して酒を覓るこそ易からね與ふる事ハ扨おきて早く爰を立去ずば目まものの見せんを醉に乘じて詈りげれば弁慶も大きまに恚りなどてさばかりの事を汝まにならふべき殊まに價を出さんといふまに呑さるのミか土農人の分際として我まに對て惡口するこそ不敵なれ汝們があたへずとて我呑ずまに置べきやといひさま傍まにありあふ壜を取て只一息まに飲干しければ兩人ハ大きまにいかり憎き法師めが進止かなと在あふ拐を取て打てかゝれば辨慶ハ足をあげて一人をけたほし今一人が首筋つかみ力まにまかせて投いだせば破れかゝり壁つきぬけて表の方へ二三間もんどりうたせて仆れ伏す此勢に恐れけん二人ハこそ〳〵と逃行ば辨慶ハ獨打笑み尙紙燭してうこらあたりを探〜覓るに板厨の内に一壜の酒と乾魚とありければ大きまに歡びこれをもまた飲尽し心の中におもふやう這奴等家を捨て逃行しハかあらず其友をかたらひ來り我を捕へんとするなるべし迚等がごとき土民幾万人來るとも怖るゝにたらねどよしおき暇取て夜明なば便宜あしゝと頓て酒の價ほど錢を壜の口に結つけ明ぬ間にと其處を出て堺の方へ急ぎけるがたちまち耳元まに鉦の音かまびすく聞えければ扨こそ我おもふにたがハず鉦をならし相國をふして村中の人を集ひ我を搦へんとするなるべしと頻りまに足を早めて急ぎけれど今まで冷こへたる折から多くの酒を飲し事なれば十分の醉を發し一歩ハ高く一歩ハひきく浪々蹌々として行こと幾干ならずして雪の中まに撞と轉びしが其まゝ前後もしらず高鼾まにて臥しまける姑くありて何ものよや矢庭まに左右より辨慶が手をとつて引起す者あり武蘇坊漸く此時目覺醉眼朦朧としてあたりを見廻すまに夜全くあけて其さま獸獵まに出たりとおぼしく弓矢を携へりゝしく打扮たる一個の武士左右ゐ許多の勢子を從へ威風凜々として床几まにかゝり扣へたり辨慶ハ此形勢を見て大きまに怒り汝等何奴なれば吾快く眠りゐたる所を引越して可惜醉を醒させたるぞといひさま捕へし手をふりはらへば力餘りて二人の勢子等ハ雪の中へのけさまに撞とまろぶまに彼武士佶と睨まへ此程野武士山客所々に隱れ栖て夜毎に此安部野街道まに出て往來の人をなやますよし是によつて此所等邊の民家まにハ各々相圖を定めおき倘怪〜き者來る時ハ鉦と鳴して人を聚ひ盜人を捕へんとすると聞り然るに我今朝しも未明より獵に出たる遠近にて夥〜き鉦の音聞へ〜

ハ扨ハ彼盗賊此邊の民家を犯すと見えたりと思ひしよ案に違ハず此所に來つて見るよ心得がたき汝が形相殊よ此邊よ住る盗賊の首領といふハ大の法師なりと聞よ汝が爲躰實の僧とハ見へざれバ問ずと知れ〜強盗の魁首あるべし早く白狀〜て縛めをうけよと烈しき下知よ大勢の勢子立かゝらんとするを辨慶ハ手をあげて暫しとおゝとゞめ我ハ全くさる怪しき者にあらず武藏坊辨慶といふ者なるが子細有て泉州堺まで赴んと夜を冒〜て道を急ぎ〜よ昨夜の雪よ殆々行なやみ彼處ある農家よいりて酒を乞て呑〜が其酒よ醉て思ハず爰に臥〜たるなりと語るを聞て彼武士ハ眉を顰めそハ何とか宣ふ其許が名ハ武藏坊辨慶とかゝからバ外日橘次季春といふ人と共侶に沼島におゐて海上の難丸を退治し玉へる豪傑よハあらぬかといふよ辨慶聞てつや〜〜心得ぬ面色よていかにも我こそ金賣橘次と義を結びたる武藏坊辨慶なり其許何と〜て吾名を知り且沼島の難丸を討たる事をさへ知りたまふや最不審と聞より彼武士慌忙ふためき衝と立て辨慶が手をとつて上座に推居へ辭を正〜ふ〜て云らく師父最前よりの不禮のだん〜幾重にも御赦しを蒙むりた〜とばかりにていさこそあやしく思しつらんが小子ハ當國淺澤小野の隱士岸の左衛門大江匡博といふ者なり樹に吾娘姫松摩耶詣の折から彼難丸が爲よ捕へられ〜に其許と儒次ぬ〜兩人にて難丸を打取り娘をすくひ玉ハりしよし季春ぬしの物語にて詳にき、つ何事のありてや此雪をもいとひたまハず和泉へハ赴きたまふや何ハ兎もあれ先我第宅に來りゆる〜と勞れをやすめ其後赴きたまふとも遲きよあらじと他事なき詞に辨慶ハ快然と〜て歡び扨ハ姫松どの、御父君たる岸の大人よてさふらひ〜か斯寥々しき形勢よて雪中よ仆れ伏〜ぬたれバ盗賊白挺とも見たがへたまふも理なり我何とてさばかりの事を心よかくべきこのうへハ辭にまかせ君の館に至り委細の事を問もし問れもせんと聞て左衛門匡博ハ然ハとて共侶に淺澤の館に返りけれバ左衛門ハ頓て山海の珍味を安排〜てまづ辨慶に勸るよそ武藏坊ハ其管待の厚さを謝し快く歡盃を傾けて後匡博よ對ひ橘次姫松等に別れてより明石の浦にて綷故なく觀慶阿闍梨を救ひまいらせ岡山の泊まで送りとゞけそれより洛陽よ竊登り叡山にいゆきて豪雲をこらし尙邦綱をも恨みんと洛中を彷徨り〜ゝど詮義きびしきをもつて虛〜く和泉の方へ赴んと來り〜なり其後姫松ぬ〜よハつ、がなくておわすならんと問かけられて匡博ハ愁然としていふやう吾娘一且火坑よ陷りしのど其許等の勇猛によつて幸ひよ賊徒の爲よ恥しめられず然るよ姫松家に還りてより不思議あるい夜よ至れば物にれそハるゝごとく海より續きたる庭前の池水ざハ〜〜と音すると等しく家鳴震動し其丈六尺有余の金鱗の鯉魚彷彿とあらわれ眼と怒し磴と白眼人のごとく詞を出〜恨しや我今まで人の妻娘の別な

く強奪して閨の伽となせしよ汝のみ心づよくも我心よ隨わず去よよつて憂目見せおきあバ自ら心解て色よき返事をもあすべしと一間に推〜籠れひたるうちに辨慶橘次が爲よ竟にはかく討れたり其無念骨髓よとほり死してもなを忘がたく這奴等よ怨みをはらさんとわおもへども渠等い世よまれなる孝子英雄にーて近よる事あたわず玆を以て吾最期の一念日頃愛翫せし鯉魚の置物よ還着ーて汝を陰司へ誘ふなれ來れや來れといふ聲して口より一道の水氣を吹出せば彼水氣のうちより數万の小鯉魚あらわれ出で娘が總身に喰ひつきてなやますよぞ娘わあら痛や耐がたやと悶苦しむ事終霄よして漸く曉頃よいたれバ鯉魚の怪わ原の池に飛入て跡なくなれり是よよつて加持祈禱の類さまざま心を尽すといへども更に露ばかりも驗なく娘わ日に増し顔色憔悴〜殆々命も危〜我苟〜くも儒門の家よ生れ粗周公孔子の書を讀三綱五常の道に背かざるに奈何なる天命にや只一人の娘を盗賊づれの寃魂の爲よ一命をとらるゝとい是非もなき事どもありと兩眼よ泪をうかめて物がたりけれバ辨慶わ大きに駭きいかにもその折から親鯉魚の怪異をば見たれども然までの事よわあらじと思ひしに扨わ灘丸が怨魂執念深く密縁て思ひをかけし姫松御前をなやまずと覺へたり我れ不意此首よ來りーこそ幸ひ今宵姫松ぬしの枕邊に通夜して彼怪物の正体を見顯しまいらすべしといふよ左衛門匡博わ斜ならず喜び豪傑斯宣ふ上わ心やすーと頓てその夜武藏坊を姫松が閨房に誘ひ姫松にも委細をかたりければよろこぶを限りなくあつく辨慶に謝〜ぬ斯て武藏坊わいつもの禪杖を傍におき今や遲しと待ほどに案のごとく四更の頃ともおぼしきに池水さわ〜くと音ーて霧のごとく水氣室中に滿るとひとしく丈拔群よして鱗の光りわ金色なる鯉魚忽然としてあらわれいで姫松に飛かゝらんとする所を辨慶わ禪杖をとつて振動かし忽ち長刀となし鯉魚をめがけて發矢と斫れば鯉魚わそのまゝ庭の面へ逃行を續いて追欠れバ鯉魚いもとの池よ飛いり水上を游ぎめぐるに忽池水わ紅ひよなれり辨慶わ長刀からりと投捨池の中へざんぶと飛こみ手どりにせんと此首彼首へ追詰追めぐるよ鯉魚わ波をけたて、荒まわるを辨慶わ難なく小脇にかひこみ力を極てぐつとしめて頓て汀に游ぎつき大音聲に鯉魚の怪わ武藏坊が志とめたり人々早く出合玉へと呼わりつゝ鯉魚を陸へあげあげて其身も續ひて飛上りぬ此物音におどろき左衛門はじめ家臣のめん〜てんでよ雪洞を携へはしり來りまるにこわ奈何に六尺あまりの鯉魚ともおもひしに然わなくて漸く二尺に足ざる印子の鯉魚の置物なりこわ不審やと人々立よりて敢め見るに此置物に辨慶が斫付し長刀の跡ありけれバ大きに駭き更よ其由縁を志らず其時辨慶匡博に對ひ物千歳を經るときわ志らず怪をなすと聞り殊に此印子の鯉魚わ唐土玄宗皇帝沈香亭

におひて翫びたまひし物と聞り加之ず彼灘丸が一念秘藏の器物に還着してかゝる怪異をなしたりと覺へたり憎き賊徒が執着かな今ぞ怨讐得脫なし成佛せよといゝさまゝ禪杖をあけて突たゝかゝ打けれバ不測や印子の鯉魚ハ忽ち微塵ゝくだけ一道の白氣陰々と西のそらへたゝびきけれバ扨ハ怨念も立去しものなるべしと頓て其碎けたるをバ岸の左衛門が菩提所東生郡の北ゝありけるその寺内に埋め跡懇ゝ弔ひける今猶網島に在る所の鯉塚ハ是なるや否考ふべし斯りし後ハ姫松が病も本復しければ家内の歡び譬ふるものなく是全く武藏坊が勇猛のあす所なりとて深く辨慶を稿ひ此所ハ洛ゝ遠く身を竊びたまふゝ便りよければいつまでも止まり居て時節の至るを待たまへとすゝめけれバ辨慶ハ實ゝもと此年ハ爰ゝとゞまり明れば治承三年如月の頃ゝもなりければ早晩平家の詮義も漏らひけるにぞ左右に義經公の事心ゝかゝれバ一旦奥州ゝ下り御曹司の安否をも訪まいらせ且ハ都の動靜をも告ばやと左衛門親子ゝ暇乞をなし陸奥さして赴きける

第二十回

默龍庵に武藏坊主君を諫む
浮島原ゝ御曹司兄の陣に至る

辨慶ハゆき〳〵て奥州に至り平泉の邊りにて義經公の噂を聞にこれ奈何御曹司ハ父母の菩提の爲入道したまはんとの志願なりとて郎等ゝハ悉く暇をたまわり衣川の邊りある福壽山無量壽院といふ寺に一箇の庵室をこつらひ晝夜こゝゝ閉こもりて物いみし讀經のみしておハしますと聞しかば大きに駭き彼君ハ幼稚をりゝら鞍馬ゝて既に出家したまふべき所を密に下山し自ら當國に下り秀衡朝臣をかたらひ大義の思立あるがゆへゝ去歳も平家の動靜をうかゞハんと再び洛ゝ登りたまひ〳〵に今又遁世の思ひを起し閉こもりおハすとハ何とも以て心得がたし疑らくハ當國ゝも平家の隱目附あらんとを議りて斯ハ世にうたハせ計を帷幕の裏にめぐらして勝事を千里の外ゝなし〳〵たまふにハあらぬかと東樣西樣思ひたゆたい彼無量壽院ゝいゆきて對面せん事を乞に一人の法師出來りていふやう御曹司ハ當寺の境内ある默龍庵といふ庵室ゝ閉こもりたまい敢て人に遇事をゆるしたまハず其許行たまふとも其甲斐あかるべしといふに辨慶答て吾儕ハ西塔の武藏坊辨慶といふ者なり見たまふごとく釋門の身なれば俗客とハ事かはりて苦〳〵かるゝまじ枉て對面をゆる〳〵たまハるやう傳致て下さるべしといふに彼法師頭を打ふり否々彼花にハ裡より堅く鎖したれバ縱寺中の者なりとも物忌はつるまでハ入事を赦したまはぬ者を奈何なる因ありとも何ぞ赦し玉ふべきや疾還りたまへといふを辨慶ハ推返して頻むと再三度に及びけれど法師ハ更に聞入ずさて〳〵汝ハ聞るけのなき者かな早くかへらずハ

奴僕等に言つけて敲き出すべきぞと威丈高に言ければ辨慶審然として眼をいからし吾ハ御曹司とハ三世の約をなしたる者なれバ強て對面を乞ふ執つぎせざるのみか敲き出すなんどゝいふこそ易からぬ其默龍庵とやらんハ何方ぞ疾案内せよといふよ彼法師ハ色を失ひふるひ〳〵默龍庵のかたを指さしければ辨慶ハ頓て本堂を打めぐりて見るよ爰に一箇の門あり這門の内こそ默龍庵ありとおしゆるよ武藏坊ハ打点頭も早汝よハ用なしといふよりはやく法師ハ慌忙き逃行しが何思ひけん潛足しつゝ立戻り小蔭へこそハ忍び入ぬ辨慶ハやをら門の邊りよ彳みて裡の爲体を窺ふよ障子引立御曹子の聲とおぼしく高かよ讀經したまふに辨慶ハ立よりて扉をほと〳〵と打たゝきいかよ我君武藏坊あそまいり候余人ハともあれ爰を明て對面をゆる〳〵たまへかしと聲をかぎりよ呼と叫べど只軒端に音信るゝ松風ならで誰答ふる者もなし辨慶ハたまりかねあまりを申せば御心づよ〳〵斯までよいふを聞わ外たまハずバ此所にて腹かき切て相果へ〳〵といひかけて門の邊りよ動下と座〳〵既にかうよと見ゆるよぞ障子の内よ聲ありてやれ待武藏はやまりぞと障子ひらけば御曹司ありしにかわる御姿髪ハおどろよ亂したまひ鼠の衣殊勝氣に數珠つまぐりておはすよぞ辨慶ハ此爲体を見て且はぶり落る涙をはらひなどて我君よハ斯心弱くおはしたまふや日外五條の橋よて遇まいらせしときの仰よハたとひ苦よ寐戈を枕にしてなりとも父の仇清盛はじめ平家の奴原墨しよあざんと最勇ましく聞えしよ今斯佛門よ入りたまハんとハ寔よ言がひあき御心かあ大丈夫の一言ハ駟馬も及ばずとこう聞はべるに僅の間に然る御心にならせたまふハ奈何なる天魔の魁入よて此首邊りたりの賣僧めらに誑らかされたまひ〳〵ならん遥く御心ひるがへし秀衡朝臣を頼みたまひ奥羽の勢をかり催〳〵都に白旗をひるがへ〳〵たまハゞ平家の暴逆をバ年來諸人爪彈して憎む折からなれバ源氏舊恩の輩諸國よりはせあつまり一舉して平家を亡し再び源氏の御代となさんと親なり嚮よも聞えまいらせしごとく辨慶生佛のむかし書寫山において夢中の老僧の告もはべれバとく〳〵御姿あらためたまへ其外よ聞へまいらせたき事澤あれど沓をへだてゝかゐをかくと爰よりハ申上がたかり疾く戸を開きて御通し下さるべしとき、て御曹司頭を打ふりたまひ否とよ辨慶吾いとけあき時佛門にいりし此義經一且鞍馬を下山なし平家を亡し父の鬱憤一族の修羅の妄執はらさんと思ひ〳〵かども熟考ふるに一盃の水よく一車薪の火を消事あたハずとやらん縱や一人や二人の郎黨ありともそれを賴みよ悠ひなる事を爲出さんよは恩ある秀衡をさへ連累よする同前それよりハ迚も微運の此義經佛門よ入て永く一族の菩題を訪こそましならめと佐藤兄弟龜井駿河の面々よもおもふ旨をきこへ知しことゞく身の暇をとらし我一人此庵室よ閉居して行

ひすまず窓に來て我道心を妨ぐるハ全く外道の武藏坊もはや三界に家なき義經なれバ上よ君なく下に臣なー然れども今目前よ生害なさんとする形相あまりよ不便なれバ戒業を破り其死をとゞめしハ吾が寸志なり今生の對面これかぎりぞと言捨て障子をぱたとさしきりて寂寞として音もなし辨慶今ハ詮ゥたなく扨ハ我君本心出家したまふ御心とおぼへたり嗚呼言がひなきとやいはん臆病とやいはんよし〳〵此上ハ吾れ壹人なりとも彼滄海公よならひ竊に洛へ推しのぼり此大長刀をもつて淨海が首さらへ落〳〵くれんずと大音聲に詈り悠々と立去んとする以前の法師寺中の惡僧ばらをかたらひ立忍ひて居たりけるが此時ハらく〳〵とあらハれいで容子ハ殘ず立ぎゝつ反逆人の武藏坊先よハ五條の橋にて千人切をなし去年の冬又叡山よおぬて豪雲僧都を刼かせし無頼の惡僧いざ尋常に繩かゝれと棒千木利器をとつて打てかゝるに辨慶ハからく〳〵と嘲笑ひ小指だよもたらねど武藏坊が歸洛の手宮笥此世のいとまをとらせでくれんと大長刀をふりまハせバ右往左往よ散亂すはじめの法師大ひにいらつて太刀拔そばめ切てかゝる折からに何國ともなく一本の素箭飛來つて彼法師が胸板に發矢と立バ何かハもつてたまるべき呟とのつけよ反かへれバ武藏坊ハ是を見て阿那いぶかしやと見かへるこなたの默龍庵の障子をひらき立出でたまふ義經公以前にかわる御形相烏帽子狩衣さハやかに重藤の弓携へ椽の上よ衝立たり左右にハ等しく鎖帷子小手脛當に身をかためたる兵ども君を守護し扣へたり登時義經公莞爾と打笑みいかに辨慶かならず心を勞する事なかれ吾汝に別れてより再び東國にくだり時の至るを待うちにも片時も忘れぬ大義の企て時々相譚ふ味方にハ是なる佐藤忠信嗣信をむじめ皆是一人當千の兵なれど平家の隱目付當國にも徘徊なせばわざと表に佛道を歸依し出家遁世の望ありと家臣等にハ暇を取し此庵室に閉籠晝夜讀經に日を送り深更に及んで私に件の人々を聚ひ專ら軍議を評論す夫疾々門をひらき武藏坊をこなたへと宣ふ詞に一人の武士やをら立て門をひらけば辨慶ハ大きよ歡びずゝみ入に仆れ伏したる以前の法師むくゝと起上り御大將もハや愚僧が役目ハ濟たるならんと正首だちて武藏坊が後に從ひ疎々入れば弁慶ハ且駭き且怪み義經公に對ひ君の御矢先にかゝりて落命せしと思ひしよ然ハなく て恙なく且今の辭ハ全く歟にハあらじと思ー抑此法師ハ何人よやと肩をひりむるに義經公打笑せたまひいまだ知るまじ此法師ハ常陸坊海尊といふ者なり我汝が心をうたがふるよハあらねども笑の中よ刀を磨ぐ亂世のあらハー人情反覆世の常と聞ものから倘やと思へば豫て海尊にも其心を得さし置たれバ儘汝を試しのみかならず心にかくる事なかれ其他逃散たる僧徒も皆是當寺の者にして義經よ心を傾けて事ふる者なれバ少しも心をおくよ及バず又最前海尊よ

射かけたる矢も鏃を拔おひたれば常陸坊よも恙なし此後ともへだてなく相譚ひて我を助け稱世の功を立よかしと殘るかたなき名將の詞にはつと感激し夫より佐藤兄弟はじめ鎧井駿河等にも名對面して俱に軍議をかたらひける斯て猶辨慶等いさまゝに姿を變し遠近に徘徊して江湖上の動靜をさぐり聞うち早くも其年暮て治承四年になりつ然るに今年は水曾路より義仲起り伊豆まゝ頼朝旗揚したまふを聞へしかば驚破此時よと義經公ハ辨慶海尊其外手勢廿余人を俱して奥州より登り駿州浮島が原なる頼朝公の陣に至りたまふにぞ頼朝公ハ絶て久しき同胞の御對面に互に手を取かゝ一不覺涙よくれたまひぬ已れよりして辨慶ハ束の間も君の傍をはなれず平家追討の折から孫て意恨ある五條大納言を打とり師父觀慶阿闍梨の怨を返し一の谷の戰ひ八島の合戰に軍忠數回に亦て平家全く亡び一後も堀川夜討の功名その他義經公舍兄の不興を蒙り再び陸奥に吟行たまふに及んでなほ附添終に文治五年衣河に亦て立ながら終りを取一事に至つてハ普く坊間に流布する所の軍記野乘に載て詳なれバ予が筆を勞するに及ばす然あれ尚遺漏なきにしもあらず且腹稿いまだ吐盡さずといへども書肆頻に局を結バん事を促をもて姑く茲に筆をとゞむ猶他日新研を開くとあらんかし

○

柳無再按ずるに本朝武家高名記にハ(鎗闘分捕卷之六)文治五年衣川の御所に於て辨慶三十七歳にして主君と同死せり依之子孫あしといへり是を以て見るときハ慶辨ハ仁平三年癸酉の出生歟同書(感狀之六)兵粮米借用狀を載たり其文に曰

今度芳野入既令二議定一就二兵粮米闕如之時節一米十石賴思召候則友成之御太刀一腰被レ指二遣之一候此度之儀如何共才覺專一也

文治元年十一月十日　尼崎老中

西塔武藏坊　辨慶印

此書今猶彼處にありとなん未見ず專ら人口に膾炙する攝州須磨寺にある所の若木の櫻の制札　此花江南所レ無也云々ハ只梅の制札なるを好事の人源氏物語須磨の卷に若木の櫻咲そめてといへるに附會して光源氏を源九郎にあやまれる者にして辨慶が遺跡にハあるべからず此事既に岡西惟中が續無名抄及び蜀山翁の南柯夢言に見たり

源平盛衰記に元暦二年三月廿一日熊野別當堪增二百余艘の兵船を調へて漕來り源氏に